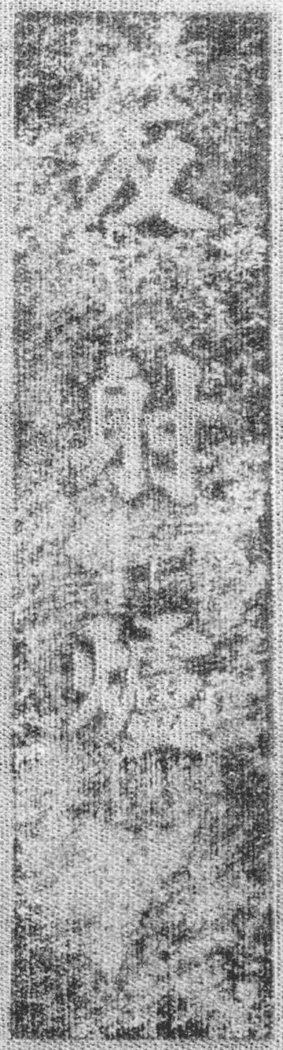
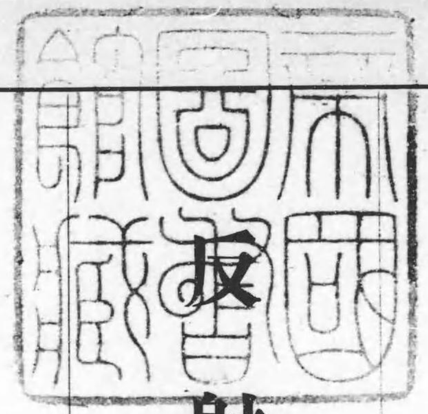
536
222

始

536
222



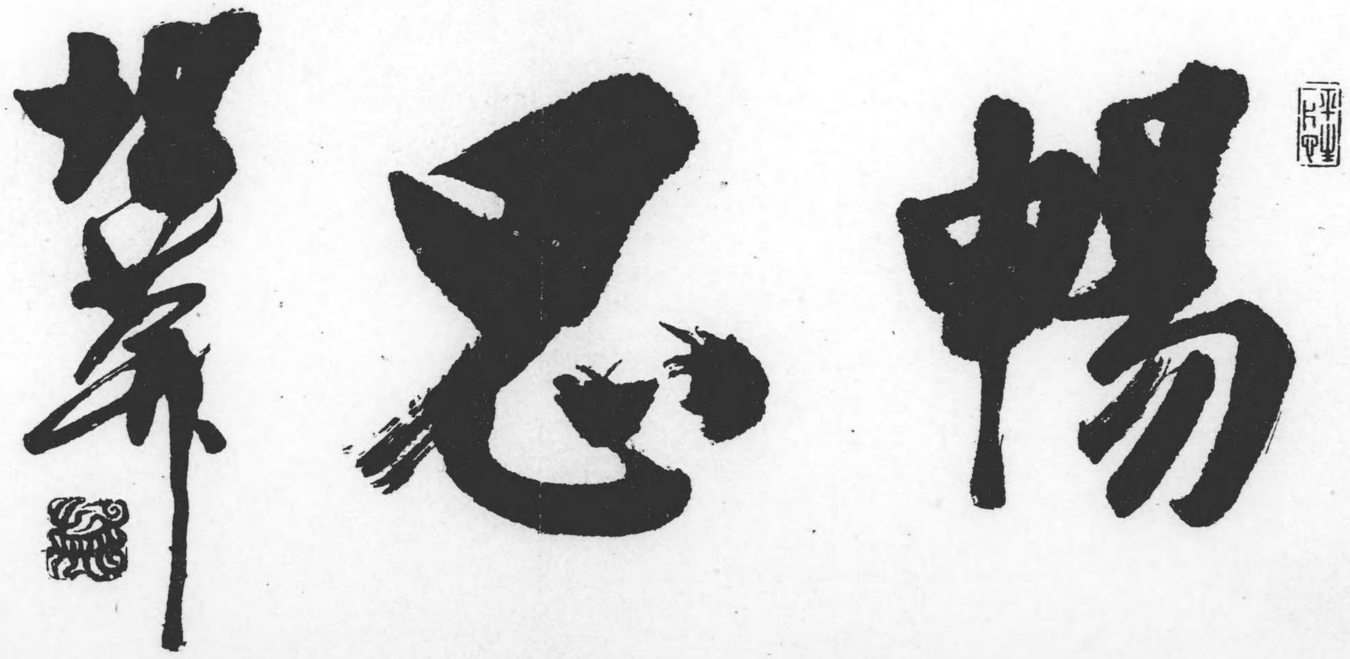


反射爐

岡田播陽著

大正
15.12.7
内交

臺灣大學圖書館藏



自序

赫々たる太陽は、其の實、戰々兢々の閃きだ。諸有天體の塵芥を攝取して、熱と光に化し、もこの天體に返し〳〵する彼こそ、實に謙虛なる心の象徵……謂はゞ宇宙の反射爐である。反射爐が金屬を精錬するやうに、太陽は一切を淨化する。愛と力の源泉たる謙虛そのものは、人生の太陽であらねばならぬ。そのまゝにして地獄の釜だ。如何なる罪障をも溶解する地獄の

536-222

目次

近江聖人……一
大無量壽經をめぐりて……一一九
以身教人身こ自他覺圓滿――眞實と方便――支那こ大無量壽經――
僧鎧と親鸞――印度の夢と支那の現――支那の佛教――世界に於け
る日支の關係――支那人と歐洲人――猶太人と日本人――法華軍こ
淨土軍――日本經こ日本人經附法華京――滅亡の前夜――法華經と
觀經こ――天臺法華と平安京――他を殺すもの――京攝と東京――
表裏轉倒――法華こ老莊――南無妙法蓮華佛――法華經こ大經こ――
如來祕密神通之力――被轉經人――法華法亂と一向一揆――法華こ
觀經と――佛教こ基督教――聖書こ佛典と――共觀福音書と淨土三
部――約翰傳こ法華經――世界は基佛の相反に活かされる――精神
不滅こ物質不滅――佛物同人――玩具匣とビツクリ匣――此處と此
時――特別經―純他力こ半他力―自他本願――阿彌陀如來の四十八
願――夜明けて歌ふ鷄の聲――『母經』こ『父經』こ――矛盾こ調和―

釜を他にして、何處に復活があり得よう？　見よ！
一揮たゞちに魑魅魍魎を光明化する此の魔鞭を……

著者

—不可思議經——眞の沈着——孤獨に徹して——太極人經——刻々臨終——永遠の我——信仰滅んで經卷在り——法塵一掃——大乘教徒と般若思想——宗教と習性——正法の行衞——七祖の悲嘆

大大阪と石山本願寺
——蓮如上人と織田信長——……二〇五

序論——應仁の大亂——元正塔の再建——權力主義と平民主義——小大坂の正體——城を家の家とした一大家族——石山本願寺以前の大坂——蓮如と石山本願寺——京攝文化の中興開山——プロパガンダの天才——實剋虛——法然と蓮如——解脫、明惠と法然、蓮如——親鸞と蓮如——白骨の塔と蓮如——法然、親鸞、日蓮と蓮如——蓮如の母と無常考——阿彌陀ヶ池——水と大阪——關東と關西——信長と蓮如——信長と信玄、謙信——信長と三好黨——信長と一向一揆——世界主義發揮の根據地——叡山と石山——專門的軍人と素人的軍人——黑衣の英雄と甲冑の傑僧——石山合戰と豐臣秀吉——石山合戰と秀吉——石山町人と信長——石山合戰と近代文化——悍馬と猛牛の格鬪——顯如の退隱と信長の斃去——宗教界の試煉の火——信長と秀吉——吉利支丹と種ヶ島と——人中のダイヤモンド——……二〇五

國民向上の舞踏——切支丹の黃金時代——專門家は人類の落伍者である——町人文化の頂點——東西二市の學問——大坂築城と商工業——十露盤——人物の輩出——眞個の醫人——革新と復古——日本文化滅亡の悲鳴——踵で考へる時代——結論

默箱……二〇七

廢佛棄釋と宗教神道——惟神と宗教神道——思想と信仰——宗教博覽會——言葉は事實の裏を語る——戀の愚峰氏——芭蕉と光演——光演と親鸞——子規と光演——必要と存在——俳畫館から土地會社——孤獨の人——無產者は力である——恩愛ともに深し愛欲の海——兆民は學者なり——梁川と正久

肉附の面……二三七

『今法然』と『今日蓮』……二四七

廣瀨太乙……二五三

河村清雄と山本芳翠……二五九

悲花樂葉……二七一

藝術無き時代——蕪村とその妻——騙込竹田——騙込竹田と其の拾ひ物——崋山と春山と——物欲と藝術慾——池無名——野賢の清調と王侯の態——畫神と書神——解き難き永遠の謎

孔雀明王呪の實驗……三八七

平田篤胤……三九二

蒹葭堂献本始末……四〇三

古書の賣買……四三三

性劇逆臣藏
假名手本忠臣藏』と『赤穗事件』……四四三

虚空を歩む土中の白骨——所謂歴史と所謂戯曲——復讐卽歴史——近松巢林子と竹田出雲——巢林子物と出雲物——人格化と器械化——大野九郎兵衛と大石頼母——大石良雄——性の象徴——九郎兵衛と大石良雄——身代り劇——極樂鳥——桃井若狹之助と三好松洛——天才的興行師——元祿劇の主人公——板谷峠の無緣佛——吉良義央の寢首——

善惡俱有へた大善人——松の間の刃傷事件——吉良の素性——義央の舊領地——義央の罪惡——忠義の奥の忠義は人の目に觸かぬ——覇府時代の源平戰

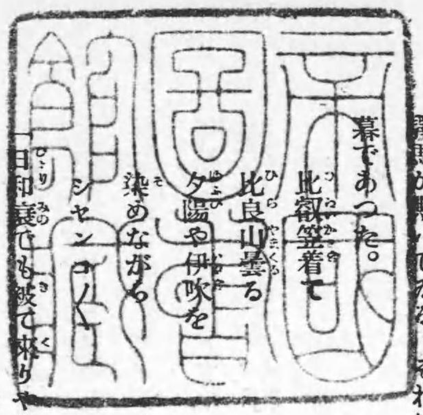
遭難者と刺客……五〇六

目次

終

一

人懐かしい秋風が吹き初むる頃であつた。琵琶湖に浴へる丘陵ずんだ松林の中に、痩せこけた澤馬が斯いてある。それは丁度大正十五年から二百八十六年前……寛永十八年八月二十日の夕



圓い山々に圍まれた太湖の面に、三角の波立ち騒ぎ、晴れては曇りつ、曇りては晴れつして又しても泣出す日和雨にそば濡れながら、ボカ〳〵、シヤンコ〳〵と、蹄の音と鈴の響に勵まされつ、馬を勵まして、巷に入り、野を出で、野に入り漸つと大溝にさしかゝたが、何時しか

夕闇がしのびやかに脚下に纏はり初めた。何方向いても往く人はなく、湖面には漁り灯一つ見えない。驀て大溝を過ぎて加茂といふ在所に入つた時には、大地はもうスッカリ闇に塗り蔽されてゐた。

「何日にねえ提灯を持つて出たのだが、失策つた……大津の立場に忘れて來ちやつた。兄哥ー馬の事ー今日は疲憊つたらう。俺は君身の爲に、こんな苦勞をするのだが、手前は俺に苦勞をおつかぶされながら、小言一ついふぢやなし、勿體ねえこつた。俺は百合粉雜炊を啜つても、手前にや豆を食はしてやりてえんだが、貧乏の底を拔いちやつて、碌すつぽ藁も喰はされねえ勘辨しろよ、それに今朝から休みつこなしだからな……」

蠶をなでつゝ斯ういつた權四郎の目には涙が滲んでゐる。馬も心あり氣に屁ツ尾をふつた

生れ變れば
お主が馬子よ
今のお主にや
わしがなる

シャンコ〳〵

馬の疲憊を慰むる馬子唄に、馬は喜びを鈴の音に響かせる。惑謝と聞かれる馬の嘶きに、疲憊を忘れる馬子權四郎

「兄哥……やりをつたな」

牛温かな馬糞を踏んで覺えず呟いた其の途端、前方から闇を裂ぎつゝ飛び來る一つの提灯が目に觸いた。

「ハテ！　誰だらう？」

權四郎は怪訝りながら

娘可愛や
いつ來て見ても
たすき投げ出す
ひまもなや

シャンコ〳〵

と、馬を追つ立てた。血の道に惱める妻と留守をまもれる娘の身の上が、一人氣懸りになつて來た。

らしい。馬も心有り氣に駈け出した。斯くて程なく提灯が間近くなつたかと思ふと馬は止まつた

「おゝ、手前はお光ぢやねえか。何處へ行くだい」

我を忘れて權四郎は叫んだ。

「あゝ！　父つちやん……迎へに來ただよ」

お光は矢庭に父に取り縋つた。

「病人はどうだい？　留守中變でも起りやしなかつたかい」

氣遣はし氣に權四郎は尋ねた。

「おつ母は昨日から氣分が快かつたんだけど、今日夕方さしこみが來て、妾一人迂路々々して

ゐるところへ、恰度、了佐さんが、蝮の黒燒を持つて來てくださつた」

「それや好かつたね」

「それに了佐さんが擦つて下さつたお蔭で、おつ母は痛みも止まり、ウト〳〵寢入つたので、

了佐さんも安心さつしやつて、お歸りなさるゝ、入れ違ひに兄さんがやつて來たのよ」

此處までいつてお光は、急に言葉を途切らした。

「彼の畜生奴……又、母親を苛めに來せやつたな」

權四郎はせき込んだ。お光は袖で涙を拭うた。

「そりや困つたらう、畜生はどうしたい」

「まだ居るのよ」

「金をせぶるのだらう」

「だつて一文もありやしないし、何う仕樣もないのに、兄さんは平たり込んで動きやしないん

だ」

「なーにそんなに心配しねえでもいゝ、俺が歸つて追つ拂ふから……」

「それに與作さんがついて來てゐるのよ」

「何？　與作がついて來た。糞ツ垂れ奴……全體、彼奴が惡いんだ」

「さうですことも…兄さんはあんな惡い人ぢやなかつたんだけど、朱に交れば赤くなるで、與作

さんに交際ひ出してから、まるで人間が變つちやつた。家を潰ツちまつたのも、與作さんの尻

押しなんだもの……、ねえ父つちやん」

さも怨めし氣にお光は斯ういつたが、今の今まで憎ちしさうに毒づいてゐた權四郎、何故か

急に態度と共に言葉を和げて

「いや〳〵、我が子憎まずに、捕吏憎むてえのは俺のこつた。與作も良くねえが悴も悪い。悪いもの同志がよるこ何んな悪いことをおつぱじめるか知れたものぢやねえ。恐ろしいことだ。それにつけてもこんな無黨の親に、手前のやうな孝行娘が生きたのは、有り難てえこつた。聞きや手前は、親に隱れて觀音樣に願がけして、毎日お百度を踏んでゐるさうだな。おつ母の病氣が癒るやうに、兄が改心するやうにと、祈つてゐるのであらう。身體は產みつけられねえこいふが、俺の目には、手前が觀音樣に見えるわい。イヤ、觀音樣が、手前の心に、住んで御座るのぢや」

深潭に寒露の滴るやうな、濕やかな密嘯き……それは權四郎の髓の髓から滲み出る血こ涙の悲嘆であつた。

「父つちやん……勿體ない。何をいふの……、妾に罰があたる」

「いや、さういふ態度が可愛いや。おつ母も待ち兼ねて居るだらう。手前、此の馬に乘んな。おそくなるから……」

「父つちやんお乘りよ。妾が曳いてあげる」

「滅想な！　觀音樣を別當にして何うなるものか。グズ〳〵いつてるこ、夜が明けらあ」

「おい兄哥！　手前の好きな光坊を乘せてやつてくんな」

いふより速く權四郎、お光を抱へて馬背に乘せた。罣まつたこ、いはんばかりに馬は歩き出した。父に提灯を手渡してお光は前鞍に取り縋つたが、紐らしいものが指頭に觸れるではないか。」

「はて？何だらう……」

お光が引つ張るこ、革財布が飛び出して鞍にあたつたその音で、大金が入つてゐるらしいのに、吃驚して驚えず鞍から飛び降りた。そして向直つて父に何かいはんこする態度を仄めかした。しかし目にはくやし涙が一杯光つてゐた。

「危ねえ！お光……何うしただい」

權四郎は驚いて振り顧つた。お光は聲を戰慄はして

「父つちやん！　お前が柄にもない殊勝らしい言を吐ふので、何だか變だこ思つてゐたが、やつぱり臭い物に蓋ぢやあつたのだな」

「鍬から棒に途方もねえ」

「父ちやん！　お前は貧乏の苦しさから若しや……」

「人殺でもやつたといふのかい」

「さうよ！　そして殺した對者の魂魄を鞍の下に隱匿して置いたのよ」

「白痴奴！　大きな聲で飛んでもねえ……お光！　手前は何うかしてゐるな」

「だつて此處に證據があるよ。父つちやん！　これや一體何うしたの？」

お光は革財布を父に突き付けた

「はて？　そんなものが何處にあつたのかい」

「白ばくれたつて駄目よ。自分で鞍の下に隱匿して置きながら……」

五體を戰慄はしながらお光は、泣かんばかり斯ういつた。

「あ！　さうだ……彼の若侍のに違えねえ」

覺えず權四郎は叫んだ

馬鹿いつてら……こんな大金を驛馬の鞍下に入れて歸る、氣狂が何處の世界にあるものか」

お光は

「だつてゐるから仕方がねえ、えれえ事をやつちやつた」

今までの元氣は何處へやら、遽に悄氣込んだ父の態度に、お光は、恐ろしさに堪へざるもの

、如く

「父ツちやん！本當のことをいつておくれ、父ちやん……」

恨めしさに滿ちた瞳を父に注ぎかけた。

「可愛想に貧に窶れて氣がひがんぢやつたのだな。娘盛りを病人の介抱から馬の世話……それに滿足に粥を啜れねえのだからねえ。それといふのも、俺に甲斐性がないからだ。いや、こんなことをいつてる場合ぢやねえ。昨日膳所まで通ほしの客を送つて行つて、今朝、歸り道を大津まで送つてあげた彼の彦根の若侍が、お忘れなすつたのに違えねえ。ごうせ殿樣からの預り金であらうのに……俺も自宅が氣になつてゐたから、ツイ後に氣を注けてあげなかつたからねきつと今頃は氣がついて、ごんなにか心配してござらつしやらう。お光！　手前兄哥ー馬ーー と一緒に歸つてくんな。此處にあの若侍から貰つた駄賃が三百文ある。此金を彼の畜生に與れてやれ。俺は遲くとも、明日日暮までに歸るからな……」

斯ういつて權四郎が、革財布を隻手に、もこ來た道へ引返さうとする時、月は再び雲に隱れ

たが、疑惑の雲は隈なく霽れて、父が心の明月を拝みながら、

「父つちやん！　今頃から何處へ行くの？」

何故かお光は周章しく引き止めた。

何處へッて、知れたこつた。これを持有主に返しに行くんだ。有難てえことには、道中のつれ〴〵話の中に、今夜は京の三條の萬屋こいふ旅籠に泊るこいつてるらつしやつた。ナーニ、江戸長崎ぢやあるめえし、夜の引き明けまでには、お返しすることが出來る。頼むぞ！お光！行つて來るから……病人に氣をつけてやつて呉れ」

權四郎は更に駈け出した。

「父つちやん！　お待ちよ。後生だから……」

お光は追ひ縋る。

「なーんだ、お光！」

「怒つちやいけないよ！父つちや……」

お光はさもいひにくさうに、

「でもねね、父つちやん！　そんなに大事なお金だつたら、お忘れになつたり、馬鞍の下に入

れたりするものかねえ、父つちやん……そりや御天道様がお前にお貸し下さつたのだよ。三年も滯つてゐる家賃を、此の晦日に、ごうにかしなけれや、家を追つぽり出されるぢやないか。親子路頭に迷ふたら、病人のおつ母は死んぢまふ。おつ母は泣いてるよ。兄さんに責められるよりも、隣家の婆さんから借りた借金の催足をされるのが、死ぬより辛いと泣いてる。そんなことで病氣も癒らないのだ。お前の可愛此の馬だつて、明日金を返さなくちや、抵當に奪られて了ふのぢやないか。御祖父さんが、いかい苦勞で手に入れさつしやつた畠だつて、兄さんが無斷で賣つてゐるよ。妾や今日、買つた人から聞いたんだよ。明日でも金の都合して來りや、權四郎さんが氣の毒だから、返して上げないこともないが、日が經つこさういふ譯には行かないこ、親切にいうてくれたよ、畠ばかりぢやない作物ぐちぢやさうな。それを思ふこ妾や身體が寒うなつて、生きてる氣がしないもんだから……お前を迎へに來たんだよ」

「いや、こんな腑甲斐ない俺を、今日が日まで父に持ち夫に持つた爲めに、憂目ばかりを見せられながら、たゞの一度だつて愚痴をこぼしたこともない手前やおツ母を、何時も心に掌を合はして拜んでゐるんだよ。」

「父つちやん！　お前がさう思ふなら、濟さぬこことではあらうけれご、其の御金を暫時御借り

申すこゝにしてお呉れ！　ごうでも可い金で親子三人が救かつたこ御聞きなされたら、お落しなすつた御方だつて、そんなに憎うは思はつしやるまい。それにごこの馬の骨とも、わからぬ驛馬に置き忘れた金が、マサカ戻つて來やうこは、思つてゐなさるまいから……」

お光は且つ泣き且つ強請む。權四郎は呆れ果て

「お光！貴樣は俺のお光ぢやあるめえ。妖狐が娘のお光に化けてゐるのだらう」

「父つちやん！　まかり違へばその狐が罪を引ツ被るのよ」

「これやお光……何をいふ。情げねえ奴だ。小判の音で破れるやうな腹なら、摑み出して狐にでも與れつちまえ、先刻、手前は何こいつた、雪こ變つた俺の魂も、矢つ張り墨に見えた道理だ。小女郎だてら、ふてえこごを吐かしやがる。我が子ながらも恐ろしい阿魔ツちよだ」

悲憤の涙に咽びつゝ叱り罵りはしたけれごも、親の爲にマサカの時には己が命を捨てようこする娘の心も讀めてゐる。又娘がこんな心をおこすのも無理はねえ。俺は人でも殺しかねない惡黨だつたからね」

こゝ、腹の底に泣きつゝ、權四郎、明日の日にも困る己が境遇……妻娘の上を思ひ遣つて、流石に迷はざるを得なかつた。

「あゝ食ふものがなくなりや、人間も人間を喰ふだらう。觀音樣が鬼に化らつしやる筈だ。嫁いでもぐ〳〵追ツつかねえ貧乏ほご恐ろしいものはねえ、漸このこごで、俺の心の恐ろしい角が折れたこ思ふこ、可憐しい娘の心に物凄い牙が生へるこは……」

光明と闇黑の瀨戸際に衝ツ立つて權四郎、如何はせんこ途方に暮れた。

「シツカリしろツ！　權四郎……」

何處からこもなく聞える聲ならぬ聲に權四郎は魂を貫かれた。

「あゝ先生！　何うも濟みません。惡うごわした」

突然、其處へ打ツ倒れた。お光は仰天して、

「父つちやん！　何うしたの？」

提灯に照らして見るこ、權四郎は大地に坐り込んで、合掌禮拜して居るではないか、お光はいよ〳〵呆れて、

「父つちやん！　其像やお地藏さんぢやないかね」

「あゝ地藏か。だが此の地藏が藤樹先生に見ねたのは、先生が生きた地藏さんであらつしやるからぢや。俺はな、取るまじき金を取つてゐた時には腹は滿れたが、心は飢じかつた。そん

な横着な心を先生に、スッカリ取り除つて頂いてから、ドンナに飢うても、心の底には世界中のごんな寶こも、換られねね、眞實の寶が光つてゐるんだ。俺に取つては藤樹先生が生きたお地藏様だ。此のお地藏さんに見放される位なら、可愛い馬こも別れよう。手前なんざ、何處へなりこ出て去せろツ！　たこひ生命を取られたつてごうして此の心の寶が放されよう」

「そんな食はれもしない寶が、山程あつたつて糞の役にも立つものか」

「そんな業託を頬裂きよるこ、口が歪むぞ……」

權四郎は斯う叱つて身顫ひした。不氣味な雲の破れ目から、美しい顔を出した下絃の月影は鏡の如き湖面を照らし、銀波金波の漣艶たる光景が、彼に何事かを密喃いたらしい。

「さうだ！　下界から見るこ、雲に隱れて御座らつしやるお月様も、もう一つ高い御空には、何時も曇ることなく、照り渡つてござらつしやる。ドンナ惡人でも本來の善心には變りはないこ、仰在つた中江の旦那……イヤ藤樹先生にお目にかゝつたのは、忘れもしねえ、去年の今夜……さうだ！　たしか此處等邊りだつた。違えねえ、此の羽衣松の下だ。彼の時、俺は博奕に負けた自暴ッ腹で、自棄酒煽つた勢ひこはいひながら、手出しもしねえ惡苦地なしだこ見縊つて、不意と働つ突つた對者に酒代を強請つたのは、確かに此處だ。所が、其の男は氣味の惡い

程莞爾いて、まるで、佛様に御供へものでもするやうに、恭々し氣に財布ぐるみ大金をくれやがつたのには、流石の俺も少々氣味が惡るかつた。それに俺は圖に乘つて、衣服まで剝えぢやつた。處が振返るこ、裸體にされながら怨めしさうな顏もせず、きちんこ坐つたまゝ、俺を拜んでゐやがる。何をさらすんだ、此の凡暗奴！と、歸りかけたが、何故か氣になつて、又振顧つて見たら、まだ地上に頭をすりつけて拜んでゐるぢやねえか、お光！　その時ばかりは、本當に魂がでんぐりかへつちやつて、ぴりつこも動けなくなつちやたよ。奪つた物をお返してお詫しなくちやならなくなつちやつた。それから俺はすつきりこ眞人間に生まれ更つてゐるんだから……」

「父ちやん、何故それを今まで言はなんだの……」

「ほんとに悲しいここや嬉しいここは、親にも子にも云へねものだ。又、言つたつて何にもならねえ、ごれほご辛らい苦しみも自分一人のものぢやねえか」

「何は然かれ、我が身ながら恐ろしい此の惡黨を拜んで下すつた先生のお姿には、俺の行末を案じて死んぢやつた親父や、お母の俤が見えたからのう。いや兩親ばかりぢやねえ、先祖も、神も、佛も、一緒になつて現はれさつしつたよ」

改恨の涙ご共に 迸る父の斯うした懺悔話に、聞き惚れて居たお光は、急に怪訝な眼をひからして

「父つちやん！　それに何故、兄さんは、アンナ惡黨になり、おつ母はあんなに工合が惡くなつたのだらう？」

「なーー、そりやみんな、俺が種を蒔いたのだ。俺の若え時の事をおもや、俘なんざ、まだおこなしい方なんだ。俺の兩親が死んぢやつたのも、俺が殺したやうなものなんだ。おつ母の血の道も實は俺の極蕩が祟つたのだ、藤樹先生に御目にかゝらなかつたら、俺はまだごれだけ人を酷い目にあはしたか知れたものぢやねえ。恐ろしい事だつた。それに、世間の醫者が、匙を投げちやつたおつ母の病氣を、あれまで醫して下すつた彼の了佐さんだつて、藤樹先生のお蔭で、彼んな立派なお方にならつしやつたんだ。我が心の病氣さへ醫せば他の心の病氣は醫る。それに心の病氣が醫らなくやち、身體の病氣は醫りやせぬ。ご、自分の心を清めて、生神樣になつてござらつしやる先生なれやこそ、身體の病氣もお醫し下さるのぢや。大惡黨の俺を眞人間に、立ち歸らして下すつた先生のおかげで、おつ母の難病も醫して頂けるのぢや。その先生の魂を享けてをられる了佐さんに、毎日のやうにお目にかゝつてるながら、手前にやまだわ

からねえのか、たわけ奴！おれの目に手前が觀音樣に見えたのは、やはり親の慾目だつたのだ」

火よりも熱い涙ご共に、迸る父の魂の響……權四郎の斯うした血叫びに、お光は愕然として夢から覺めたるもの、如く、

「父つちやん！　勘忍してお呉れ、妾がわるかつた」

大地に頭を摺りつけて泣き詫びるいぢらしさに

「手前がさうした心になつてくれりや、おつ母の病氣も治る。兄の心も入れ替らう、俺も以前は生きて行くとが恐ろしかつたが、今はごんなに苦しうても、苦みの裡に言ふにいへねえ難有味がこもつてるるんだ」

慰め顏に權四郎は斯ういつた。お光は全く覺つたらしく。

「父つちやん！　速く行つて其のお金を返してお上げよ。妾には能う解りましたから……」

眞心に立ち歸つたお光の態度に

「ぢや、お光！　往つて來るよ……」

勇み喜んで驅け出した權四郎の姿は忽ち闇に消えて了つた。やがてお光も馬を曳いて我が家へご急いだ。するご、先程から樹蔭に隱れて、父娘の對話を立ち聞きしてるた若者がヌーツご

現はれた。

三

樹蔭から現はれた若者はお光の後姿が、森の中に隠れて了ふまで見送つてゐた。やがて太い溜息を吐きながら獨り言をいふのであつた。

「如何にも權四郎父娘のいふ通りだ。權六―權四郎の倅―を、あんな惡黨に仕立てたのは全く俺だ。俺が光坊を女房にくれろッ！　と、幾ら強請んでも、テンデ對者にしねえもんだから、倅の權六を抱き込んで、目的を遂げやうとしたのがもとで、可愛想に彼奴も到道烙印付の無頼漢になつちやつた。人間てえものは弱いものだからね。親兄弟に見放されると、仲好くしてくれる友達のいふ通りになるものだ。今日、權六を誘ひ出して、權四郎の家へ出かけたのも、光坊をものにする魂膽だつたのだ。權六は博奕の資本をはたらうとするし、俺は又俺で、光坊を引つ張り出しにかかつたが、お光の奴、相も變らず木で鼻を括つたやうな待遇をしやがる。業が煮えてたまらなかつたが、提灯さげて出かけやがつたのを幸ひ、背後をつけて、手詰の談判をたゝきつけ、まかり違へば、手籠にしてゞも、今晩といふ今晩は、慾望を遂げなきやおかね

えと、追つかけて見ると、小女郎だてら、彼奴！　馬鹿に足が速い。それに漸つと追ツ付きかけたところで、バッタリ權四郎に出喰しやがつた。いま〳〵しさに地團駄踏みながら、何うにかして呉れようと、こゝに隱れてゐるうちに、圖らず聞いた父娘の對話……あゝ、あゝ、間違つてゐた。惡かつた。永らく放埒に身を持ち崩して、惡い事の仕放題。親兄弟の强意見も、空吹く風と聞き流して來た此の俺も、先程からの父娘の樣子を見て、二十年の惡い夢から覺めちやつた。難有てえ！　光坊が權四郎に出喰すのが、もうちよつと遲かつたら、俺はごんな事をやつちやつたか知れやしねえ。見掛けによらねえ光坊の大膽と强情には俺もおつ魂消た。ああいふ調子で來られちや、威嚇の爲めに他から借りて來た此の脇差で、彼奴を慘殺したかも知れねねぞ。あゝ恐ろしいことだつた。人を呪へば穴二つ……、俺もまだお袋があるのだ。毎日のやうに俺の尻がいくものだから、離れこむない生まれ故郷を離れて、可い年齢をしながら、虚弱いからだで、京の宿屋の飯焚をしてゐるんだ。あ？　先刻、權四郎のいつてゐた三條の萬屋てえのは、お母の奉公先だ。お母の勤め先へ宿る若侍が、財布を忘れた爲めに俺は生命を拾つたのだ。いや俺ばかりぢやねえ、食ふものも食はねえで、こんな親不孝に小遣を送つて呉れるお母は、俺か人を殺して所刑になつたと聞いたら、迚も生きちや居るまい。餓鬼の時に、父

親が死んぢやつたので、苦しい中から、女手一つで育てゝくれたお母にまだ一度だつて、やさしい言葉すら、かけたこともねえこの俺は、何とした罰當りなのか」

斯ういつて若者は、溢るゝ涙を拭ひつゝ、四邊を見廻はした。そして急に思ひ出したかのやうに

「しかし、あれだけ强情な光坊も、權四郎が了佐さんのことをいふと、氷に沸湯をぼつかけたやうに、すぐ兵兒垂れやがつた。餘つ程、了佐さんに戀でゝゐやがる。それも無理はねえ、了佐さんは親切な男なんだもの……俺なんかに、鼻もひつかけねえ筈だ。ぢれや！これから一つ彼の權六を誘ひ出して、母親がかたきのやうに俺を引つぱつて行かうとしてゐた藤樹先生のところへ行くことせう。先生は俺のことを、心配してゐて下さるさうだから……」

性は善なる此の男……名は與作といふ。大いなる決心を、緊張した顏に示して、お光の去つた同じ道へと進んだが、それはもう女を追ふ爲めでないことは、悠然と沈着いて歩き出す其の足取りによつて察せらる。それに忽ち

「おい待て！　與作……」

呼び止める聲がした。

「何の用ですかい！」

「御用だ！　神妙にしろッ!!」

十手振り上げ提灯をかざした四五の男……それは意外にも土地の捕吏であつた。

哀し氣に聞きなされた松吹く風のそよぎも、湖面を微笑ませてゐたのに、滿地に照り渡つてゐた月光が、鬼雲に呑まれて、四邊は忽ち黑暗々の闇となつた。

四

派手やかで、上品な、そして膨らみのある山樂や光琳の水々しい彩色畫を偲ばせる花洛の情緒も、夜の黑刷毛に塗り潰され、月光の胡粉の鮮かな、見る眼、涼しい宗達の繪巻物に描き替へられた。時々起る山嵐が磧のせゝらぎを誘うて夜の戸を叩く。此處三條は萬屋の奥二階、旅の疲勞で、湯浴みも食事もそこ〳〵に、寢牀に就いた若侍の夢は破れたらしい。花洛の夜の更くるに遲く、何處からともなく流れ來る三味の音に袖引出されて、心を澄ましてゐると、太皷の響、琵琶、胡弓、尺八、篠笛などの音いろ、男女の唄聲、笑ひ聲が聞える。それが段々賑かになり、次第に近寄つて來る。若侍はもう寢て居れなくなつた。所が、起きあがつて見ると、

意外にも、夜は何時しか全く明け放れて、四圍の戸は悉く開かれ、ごちら向いても櫻花爛漫…
…紅白段だらの幕張り渡し、柳櫻をこきまぜた堤上堤下の樹蔭池畔に、玩具箱を引つ繰り覆し
たやうな、無數の老若が、亂舞狂踏の爲體ではないか。皷を鳴らし、謡曲をうたひ、拳を撃ち
茶番を演る、今し歡樂のクライマックスに達したと思はれる刹那、
「下に〳〵」
と、警蹕の聲ものゝ〳〵しく、金紋先箱、鳥毛の槍……正しく大名の行列が遣つて來るではな
いか。驚いたのは花見の群衆、蜘蛛の子を散らしたやうに、右往左往に散亂する。あはて、酒
樽を引つ繰り覆す女性、うろたへて辨當箱を踏み碎く醉漢、他の提籃と取違へて間誤つく老爺
滑稽でもあり氣の毒でもあつて、祭禮の最中を、地震に見舞はれたやうな騒ぎである。
「幾ら大名だつて、こりや非道い！」
いま〳〵し氣に口惜しがる法被職人もあれば
「何もこんな場所を通らなくたつて、可さゝうなものだのに……」
泣きかゝつてゐる素町人もある。
旅舘の二階座敷から落花狼籍の此の光景に、稀有迂い眼を瞬つてゐた若侍は、俄破と起ち上

り
「ありや、彼の紋所は、正しく主君彦根侯のそれである」
吾覺らず叫びつゝ二階から飛び降りて、突如其の行列に加はつた。咲き誇る花を吹き拂ふ嵐
のやうに、花見の群衆を追ひ散らかした行列は、靜肅に、悠やかに、そして嚴しく進んで行つ
たが、半晌ばかりも經たらんかに思はるゝ頃、忽ち御駕籠の裡から鶴の一聲……
「とまれッ」
優にやさしい其の聲は、擬ふ方なき若殿の御聲であつたが、花明柳暗を流れて居た行列は、
只ある大きな青樓の前に、パタリ停まつた。見るゝ、此處は、音に聞えた嶋原遊廓……軒の行
燈に「角屋」と讀めた。間もなく若殿首め重なる家來は、目眩しいほど、綺羅美やかな、花洛
錦繡に飾られた大廣間の客となつた。例の若侍は、恐る〳〵上段の間に、悠然と脇息に凭らせ
たまふ若殿樣の前にいざり進で、
「若殿樣には御無事御着京遊ばされ、思ひがけなく旅先にて御機嫌の體を拜し、祝着至極に存
じ奉ります」
恭しく御挨拶申上げたが、若侍をハタと睨めつけた若殿の顏には靑筋が立つた。

「そちや源八郎ではないか。斯かる座席へ招きもせぬに、押しかけて來る不作法者、目通りかなはぬ。退り居らう……」

迅雷の如き激怒を浴びて若侍は、低頭平身、五體の置き場所を失つたが、やゝあつて頭を擡げて見ると、これはまた如何なこと。若殿はおろか、一行の姿は消え失せて、朱塗の櫛に花簪金絲銀絲で繡ひこつた紫紺地に鳳凰の襠裲、花洛名所の裾模様、白綸子の二枚襲、淡紅色地に紫の花、房々しい翠滴る桐の葉の前垂帶、重た氣な太夫が、浮彫の如うに目の前に佇つて居るではないか。

五

婉然たるその花顏、馥郁たる其の芳香……蓮歩輕く歩み寄る氣配に、恍惚こして若侍は、夢に夢見る心地であつた。

「おゝ！　源八郎樣……」

太夫の朱唇から迸り出た此の一言に、若侍は我覺らず太夫の顏を凝視めた。慥に聞き覺えのある親しい聲であつたからだ。

「さういふ其の許は、文子ごのではござらぬか。意外なこころで、意外の面會……これや全體如何なされたのでござるかな」

女は正しく同藩の士横山某の息女で、若侍が意中の人であつた。魚心水心……女も亦た若侍に戀ひ焦がれてゐたものと見え、一度はサツこ滿面を朱にしたが、間もなく驚喜の色に燃え

「源八郎樣！　あなたにお目にかゝりたうて〳〵」

我を忘れて若侍に接近つた。

「會ひたいのは同じここ。それに何うして斯うした御姿になられたか？」

若侍はキツこ太夫の顏を凝視めた。するこ、太夫は其處へ坐り込んで、涙ながらに愬へた。

「あなたがお立ちになるこ、何故か妾は一層御懷かしうて、ジーツこして居られないものですから、家を飛び出し、御跡を慕うて此方へ參る途中、惡漢に誘拐され……」

「此家へ賣られたこ申さるゝか？」

「ハイ……」

こ、いつたきり、女はよゝこばかりに泣き伏した。

「それにしては餘りに速いではござらぬか。斯うツこ、某はあれから膳所に立ち寄り昨夜漸つ

こ此地へ着いたばかりでござるが……はて？」

腑に落ちぬ面色で若侍は、太夫に一入怪訝な目光を注いだ。

「イヤ、其の御不審は御道理ながら、それには仔細がござりまする。兎に角・妾はこんな勤めは死んでも厭でござりまする。速く妾を連れてお逃げ下さりませ。お情けでござりまする」

太夫は若侍に縋りついた此の時、廊下の方から

「吉野太夫さん……」

呼ばはる聲が聞えた。

「あれ！　妾を呼んでゐます。今に此室へ遣つて來ます。速く〳〵源八郎樣」

太夫は泣き强請む。

「ぢやこ申して武士たるものが、遊女を盜み出しも出來申さぬ」

「でも二百兩の黃金がないこ、田舍大盡に、知らぬ他國へ連れて歸られまする」

「事情はよめた。此樓の亭主が、二百金に目が眩み、厭がるそなたを無理强に、田舍大盡の心に、從はさうとするのでござるな」

「はい！源八郎樣……妾の胸の衷を御推察下さりませ」

太夫は若侍の膝へ泣き崩折れた。若侍は覺悟を決めてキツこなり、

「文子ごの！　御安心なさい……タカガ二百兩の目腐れ金……某、おたてかへ申さう」

「源八郎樣　そりや本當でござりまするか」

「可愛いそなたに何うして嘘が吐かれやう」

「お嬉しうござりまする！源八郎樣……」

「そなたのためには此の源八郎、一命は惜うはござらぬ」

「妾こても貴郎故なら、死んでも本望でござりまする」

相思相愛の情火に燃えて兩人が、今し、抱合はんこしたその途端、電光一閃……何者こも知れず背後より打下す一刀、右の肩先から大袈裟に……

「不埒者！　手討に致す」

大喝したその聲は、慥に老公さまのそれではないか。若侍は愕然こして目を覺ました。見れば身はこれ、依然こして三條、萬屋の二階座敷……厚い蒲團の裡に仰臥して、ひしこ兩手を胸の上に置いて見た一場の夢に過ぎなかつた。若侍は吃驚して刎ね起り

「あゝ恐ろしい夢であつた」

ミ、滿身の汗を拭ひ、枕邊の冷水をグーッミ飲み干した。

六

「自分が、こんな夢を見たのも、國許にある相思の女の面影を胸に描きながら、京都の花……彼の南蠻の粋に彩られた、女菩薩の鎭座ます、此の世の淨土ミ洩れ聞ける嶋原へ速く行つて遊びたい、かねゞ〳〵若殿樣から聞かされてゐる、有名な吉野太夫ミやらを買つて見たいなゞゝ思ひつめて居たからぢや。それはさうミ、彼の老公から御預り申した御所への獻金は？」

若侍は初めて彼の重大なる使命の繫つてゐる公金のこゝに心注き、俄かに周圍を探し出したが、忽ち顏を眞つ蒼にして、

「南無三！　一大事……膳所から傭ふた彼の驛馬の鞍に忘れて來た。大津で駕籠に乘り換へる時、行李は受取つたが、財布は鞍の下に入れた儘だ。今、考へるミ、彼の馬子奴の無闇に歸宅を急いでゐたのが怪しい。こりやとり返しのつかぬ失策をして了つた。ゞの道、あんな者の手に落ちた金は、たゞひ天ミ地が引つ繰り覆つても、返つて來ようミは思はれない。それにあ

の馬子は、あの邊の者ではなく、渡り者のやうであつた。馬方を看板にして惡事を働き廻つてゐるのであらう。いや、自分の放心ミ迂闊が他を罪に陷したのだ。自らは覺らずミも、他人を破滅に導く人間は、我が身の破滅は愚か、一家一門を滅ぼすものだ。自分にかうした大失策を仕出來さしめたのは、矢張り自分である。若殿樣の御相手を勤めながら、彼の御遊蕩を諫め奉る勇氣が、何ミしても出なかつたのは、同じ弱點を有つてゐたからである。それにしても御勿體ないのは、大殿樣のお手厚い御恩顧、父の手柄、兄の忠勤を思召されてのこゝであらうが、多くの儕輩中から、二十才に足らぬ青二才、申迂ツ氣者の某を拔擢されて、此の度の大任を仰せつけ下されたのに、大切ない其の獻納金を失つたこゝも知らずに眠る白河夜舟……夢にもしろ、浮きたる場所、戀しい女の許に行つて、二百金を女の爲に拋擲たうミした自分の醜態は、正に老公から御手討をかふむつて然るべき筈である。さうだ！　最早自分は正しく老公の御成敗を頂いたのだ。何の面目あつて、おめ〳〵國に歸り御目通りが出來よう。潔く割腹な致して、せめて武士の一分を立てるより外に、自分の行くべき道はない。それに此の刀は祖父樣が奸臣を殺めて、御割腹なされた恐ろしい業物……若輩の者が佩したなら、ごんな祟があらうも知れぬミ、母上が事を分けてお止め下さつた御言葉に背き、旅の晴れにミ、無理に取出して佩びて來

た此の兼光……不孝な我が身を殺せよこ、天から授けられたのだ。それにつけても、家を出た時、幾度、振り顧つても、掌を合はせて居られた、母上の俤がまざ〳〵ずる。某の無事を祈つてゐて下されたのであらうのに……お宥し下されい！　母上様……父上様の御嘆きの程も嘸かしこ思ひやられる。兄上様にも申譯がない」

五體を戰慄しながら、故郷の空を伏拜みつゝ、料紙取り出し、涙ながらに二通の遺書を認めた。一通は君公に、他は兩親こ兄こに宛てたものであつた。

「おゝ！　東が黎明んで來た……」

周章てゝ、行李から、若しもの用意にこ入れて來た白木綿を取出して、式の如く腹に巻きつけ白紙に包む短刀……アハヤ左腹に突ツ立てんこした刹那、

「お武家樣！お目覺めでござりまするか？」

襖の外からは斯ういつた。

七

「夜中に慌しい何事ぢや。姑く待て！」

主婦の入り來るのを制しつゝ、周章て容儀を取繕ひ、周圍を片付けて、さあらぬ態……。

「主婦！這入つても可からう……」

襖はそろ〳〵開いた。闕際に手を支へた主婦、

「こんな時分に伺ひまして、御免遊ばせ……あの一寸御うかゞひいたしたい急用がございまして……」

「してその用向は？」

「突然でございますが、もしや旦那樣は京都へお越しの途中、膳所から大津まで、驛馬に御乘り遊ばしませんでしたか？」

「うむ！　乘るここは乘つたが、それが如何致したこ申すのぢや！」

「では、もしや革財布を御忘れ遊ばしは……」

皆まで聞かず若侍、

「いや、忘れた！　慥に忘れたが……」

「實は唯今、權四郎こか申す馬子が、それを御屆けに參りましてござります」

「何！　馬子が財布を屆けに參つたこ申すのか。あゝ忝けない！　馬子を直ぐ此室へ案内して

くりやれ……」

若侍は死から蘇つたもの、如く、

「此事こそ夢であつて呉れるな」

と、更に四邊を取り片づけ、居住居を正した。やがて馬子は、若侍の前に姿を現はした。淺黄の筒袖に、こころぐ〳〵つぎのあたつたパッチを穿いた色の黝い四十田舎漢……擬ふ方なき書間乘つた驛馬の馬子ではないか。若侍は、飛びたつ心を、ヂーツと制へながらも、手を把らんばかりに馬子に座をすゝめた。

櫂四郎は馬子には稀らしい、武士の前に出しても、恥かしからぬ行儀作法を心得てゐた。まづ恭しく一禮なし、

「まだおやすみのこころを、だしぬけに參りやして、申譯がござえやせん。御免下つせえ」

斯ういつて背後にさし置いた例の革財布をこつて、

「早速でござえやすが、これや旦那樣のでござえやせう。あの時歸りを急いで居やしたので、お忘れ物に氣をつけなかつた手前の不調法……ござうか御勘辨ぐださつしやい」

斯ういつて若侍の前に差出した。

「お、！それは〳〵忝けない。よくもまあ持參してくりやつた」

「旦那樣にお目にかゝりやして、手前も安心致しやした」

「イヤ、實は櫂四郎ごの、打明けて申すこと、お主の來るのが、今一足遲かつたら、君公への御申譯に腹掻ッ捌いて相果てるこころでござつた。全くお主は某にこつて、生命の恩人でござる。これ此の通り……」

掌を合はして櫂四郎を拜んだ若侍の目には涙が滲んでゐる。強か恐縮した權四郎、

「途轍もねえ！　旦那にそんなことをされちや、此の權四郎は穴へでも入らなくちやなりやせん。手前は此の財布が見つかつて、旦那樣のお忘物ご氣がつきやした時、此家にお泊りのこゝを小耳に夾んでゐやしたのを、ごんなに嬉しく思ひやしたか知れやせん。いかい御心配をかけやして、申譯がござえやせん」

「恐れ入つたる御挨拶……一入恐縮に堪へ申さぬ。お職業柄にも似合はぬ御主の高潔さには、心の底から敬服いたした。殊に夜中、遠い處を、重いものを携へて、よくも屆けて呉りやつたその働は天ッ晴れ武士も及ばぬ任俠でござる」

髓の髓から滲み出る火の如き感涙にむせびながら若侍は、斯ういつて、傍の胴卷から母か人

れ遣きくれた十六兩の小判を、その儘白紙につゝんで、

「失禮ながら、心ばかりの謝禮でござる」

と、差出した。權四郎は突き返して、

「旦那樣！　そんなことは眞平でござえやす。旦那樣のものを旦那樣におけえしするのに、何の奇特がござえやせう。若しやこれをおけえししなかつたら、手前は天下の罪人でござえやす何も善いことをした譯ぢやござえやせん。たゞ惡いことをしなかつたといふ丈けのこと。それに何うして御禮なぞが頂かれやせう。實は旦那樣！　昨日の朝出たつきり、まだ、歸らねえのでござえやす。家には病人もござえやすし、取込みもござえやすから、これで失禮いたしやす御免なすつて……」

斯ういつてお辭儀するなり、權四郎は去りかけた。

「あいや！　暫くお待ち下されい權四郎ごの……」

若侍は周章て抑止めた。

八

「下世話にも、拾ひ物は山分けと申す。殊に某に取つては一命を救はれた恩人である御主に、此の金全部差上げても惜うはござらぬが、これは某の物ではなく、君公から御預り申した大切ない公金……それでたゞ、ほんの某の寸志でござるから、まげて納めては下さるまいか」

「旦那樣！　斯う申しちや何でござえやすが、それを頂くくれえなら、此の財布をお返しには參りや致しませぬ。御蔭で馬方渡世に其の日〳〵を送らせて頂いてるやす、頂くまじき金を戴いちや、明暮苦勞をこもにしてゐる馬にだつて濟みやせんや」

「さうでもあらうけれご、これは某のたつてのお願ひ！是非お聞き入れ下されい！」

「何ご仰在つても此の權四郎は、一旦貰はねえごいつたからにや、こんりんざい貰はねえのでござえやす」

若侍は今更ながら、權四郎の眞々實に擊たれて、身顫ひするばかりに感動した。

「イヤ、權四郎ごの、御許し下されい！　馬方風情ご見縊つたわけでもござらぬが、武士も及ばぬそなたの廉潔には、此の源八郎、全く恐れ入つた。してお主は何か、もの、書籍でも讀まれ

まするかな」

櫂四郎は起ちかけた腰を下すべく餘儀なくされた。

「なーに、旦那様！　お見掛け通りの馬方風情……わけて手前は若え時分から、酒と博奕に身を持ち崩し、喧嘩と悪い事にかけちや、誰にも引けはとりやせんでしたが、我が名さへも書けねえ明盲でござえやす。親を泣かせ、世間に迷惑ばかりかけてゐやしたが、手前の村に、中江の旦那てえのがござえやす。藤樹先生と申しやしてな。此の先生の御蔭で魂を入れ換られ、ごうやらかうやら、眞人間に立ち歸りかけた始末でござえやす。今夜、斯うしてお忘れ物をお返しに參るこゝの出來やしたのも、みんな先生のお蔭でござえやす。それで手前や旦那様の仰在るこゝが、耳が痛くて仕方がねえんでござねやす。もういゝくれゝに勘辨して下つせね」

斯ういつたかと思ふと、もう權四郎の影はない。權四郎の物語に、魂を奪られてゐた若侍あはたゞしく手を叩いて下女を呼んだ。

「唯今立歸つた馬子にこれを渡して呉りやれ！　夜中遠路を來て呉れた駄賃ぢやと申して……」

何貫文かを下女にこゝづけたが

「もう姿は見えません。何じろ足が速いもんですから……」

やがて下女は復命した。

「左樣か！　是非がない……」

斯ういつたもの、若侍、名殘の惜まれる心地がしたらしく、縁端に行つて雨戸を開けた。件し、馬子の姿はもう見えない。月の入方に一雨降つたらしく、河畔の柳も深沈濡れ、せゝらぎの音も高まつて、手に取るやうに聞える。蓬餅に黒胡麻をふりかけたかのやうに、曉鴉の群れ飛べる東山の對方からさし昇る朝日に榮えて、見る目爽かな眺望である。

「はてさて昨夜は、いかい悪い夢を見たものぢや」

我覺らず獨り言ちつゝ、若侍は、貪るが如く四邊の光景に見入つた。

昨夜、死ぬべかりける彼れにこつては、此の生々した天地が、不可思議な存在であるからだ朝日に蘇つた凡てのものが、底知れない感激を唆り立てる。

「あゝ彼の山も、此の川も、我が懐中から取出して、我が手で列べたやうな心地がする。先程の馬子こそは、財布と共に、自分に此の世界を呉れたのぢや」

馬子に對する感謝の念が、美しい日光に煽りたてられて源八郎は懐かしさうに昨日辿つた近

江路を、心の底に描いてゐたが、下女の繰り開ける雨戸の音に、不圖吾に復つて、

「朝餉の用意を至急に……」

斯くいひつけて洗面に降りて行つた。やがて座に復るこ、夜具取片付け、掃き淨められた座敷の床の間に、そのまゝ置かれた昨夜の遺書を、感慨深い眼で火に燻べたその時、目の前に跪いた女がある。それは先程の主婦であつた。

「旦那樣！　早朝から甚だ突然で恐れ入りますが、御隣室に、お泊りなされて居られまする、熊澤左七郎こ申されるお武家樣が、旦那樣にお目にかゝりたいが、御都合如何？　お伺ひ申してくれこのことでございます」

主婦は物靜かに斯う告つた。

「何！　熊澤左七郎殿とな？　未だ一面識もござらぬが、何か知ら承つたやうな心地もいたす。それに未明からの大騷ぎ、嘸御迷惑でおはしたらう。のちほごお詫びかたゞ〳〵當方から御伺ひ致さう。ごうか左樣、傳へて呉れるよう……」

若侍は斯ういつて朝餉をしたゝめ、出達の用意を整へ、て起ち上らうこした刹那、

「これは、石井氏！　御出發の御邪魔致して恐縮に存ずる。拙者は熊澤左七郎こ申す未熟者…

…卒爾ながら、昨夜、貴殿を尋ねて參つた正直な馬子のことを承り、近頃、奇特のことに存じた故……お目にかゝつて、委細承りたく、御無禮をも顧みず、御面會、お願ひ申せし次第…」

入つて來た左七郎の斯うした挨拶に源八郎は強か恐縮した。

「馬子の奇特に引代へて、いやはや面目次第もござらぬ。某は彦根藩中、石井源八郎こ申す青二才、何卒よろしく御鞭達下さりますよう。それに未明から立騷ぎ、定めし御安眠を驚かした事と存ずる。某に取つては生死の境……馬子の律義によつて、幸ひに一命をこり止めた次第……」

意氣相投じたこでもいふものか。初對面こも思はれぬ程、二人の氣持はしつくり合つた。左七郎は言葉を繼ぎ、

「してその中江藤樹こ申さるゝ先生こそ、全く今の世の聖人でおはさう。拙者は元來、此の花洛—五條客舍—に產まれたものでござるが、八才の時から母—熊澤守久の娘兼女—こ共に、當時、德川賴房公に仕へて水戸に在つた外祖父—熊澤守久—の許に罷在つて、本姓野尻を熊澤に改めたのでござるが、寬永十一年、或る人の推薦によつて、十六歲から備前岡山池田光政公の許小姓に奉公いたしてゐたが修業盛りの身を、君寵にゆだねて、惰眠を貪り「時」こ申す魔物

の爲めに刻々生命を食まれてゐることすら、心注かぬ己が不所存に心注き、速刻お暇いたゞき一先づ江州桐原なる實父―野尻一利―の許に立ち歸り、父に軍學、武術を學んでゐたか、泰平の世にそれらのことのみに心を委ねてゐること、敵が欲しくなつて來る。學んだこころを實地に試したくなるからでござる。君公から藩政に就いて度々御下問を蒙りながら、何一言御答へが能きなかつたのも、無學のいたすところ……或人に大學と申す書物を教はつたが、心がをさまらねば身は修まらぬ。身が修まらねば家が齊まらぬ。天下國家を平治むる秘密は、たゞ心を、をさむるに在りとあつた。軍學の極意も、軍學を要らなくするに在ると承つてゐる。取りも直さず、心をさむるをでござらう。しかし、直な樹にもたれなければ、樹木のまがりも矯正らぬやうに、心の正しい人に頼れなければ心の歪は直るまいと、心の師を求めて產れ故郷の此の地へ參つたが、滯在二ケ月、今に良師に得會はず、遺憾至極に存じ居りし所、はからず泄れ承つた藤樹先生のこと。無學文盲の馬子風情まで、その徳に感化され、武士も及ばぬ廉潔の行動致すとは、さて〳〵敬服の至りでござる」

「如何にも能澤氏！　其の段は拙者も同感でござる。又、文字は一體、何を表現はし得ませうぞ、某も貴殿と同じく此の地の產れでござるが、十三歳の時、父兄の主君たる井伊公に仕へて

彦根に罷在つたが、天性虚弱な爲めに、御暇頂き母と共久しくに此の地に止まりし某は、書物に親みも致したが、目に一丁字なき彼の馬子の足跡も踏め申さぬ」

「イヤ彼の馬子こそは藤樹先生の足跡でござる。あゝ人格の力……人格の力はゞ、奇しき力はござらぬ。神の力、佛の慈悲とは、さうした力のここでござらう」

膝を躙らしつゝ、語る左七郎の言葉に、源八郎もいざりよつて、

「機會もあらば、馬子から教はつた江州小川村に、藤樹先生をたづね、親しく慈誨を受けたいものでござる」

「貴殿はさても悠長なお心……イヤ公用を帶びてござる貴殿としては、それも已むを得ねこと でござらうが、拙者は明日ともいはず、今日只今より小川村に罷り出で、入門致す所存でござる」

金鐵をも貫く左七郎のの決心に、源八郎は心魂を撃たれて、

「實は、某も今度の御用を濟まして、主君から御暇頂き、入門致し度きは山々でござるが、父母が老齢でござる故、家を棄て遠く遊ぶこゝもなり申さぬ。此の儀、甚だ殘念に存ずる。たゞ御貴殿が道の爲、折角御勉勵の程、蔭ながら御祈り申す」

「いや、源八郎殿！御厚儀忝けなく存ずる。怠慢ほど恐ろしい放蕩はござらぬからな、縁あらば又、お目にかゝる機會もござらう」

「では、熊澤氏！　公務の都合もござる故、これにて某はお暇致す」

名殘惜し氣に、立ち去つた源八郎のあと見送つて左七郎、

「さて〳〵年齢にも似合はぬ、物柔らかな、床しい御仁態ではある……」

獨り言ちつゝ己が座敷へ立ち歸つたが、高まつた日射しに照らされて、

「あゝ首途には誂へ向きの日本晴れ……湖畔の光景も嘸かしぢや。昨夜、月を賞して宛ら、美人を天の一方に仰ひだやうに思はれた彼の比叡を、今日越さうこは思はなかつた。いで發足の準備な致さう」

左七郎は手を拍つた。聲に應ずる響の如く、

「ハ……」

眼の前に現はれたのは、此の家の亭主、仙之助であつた。

九

「おう御亭主……永々御厄介に相成つた。お蔭を以つて久しく求めてゐた師匠を見出したから直ぐこれから參るつもりでござる」

「實は旦那樣！先刻、御勘定を頂きに石井樣の御座敷へ伺ひました時、御兩人樣のお對話を承り、天道樣があなた樣こ藤樹先生を御引合せなされたやうな心地がいたしました」

「そなたは藤樹先生を存して居られるのか？」

「それや旦那樣！　藤樹先生こ申しましたら、知らぬ人は一向知りませぬが、知つた人は、みな近江聖人だと申して居ります。あの先生のことでしたら、幸ひ、其の村から下女が來て居りまするで……」

「それは好い都合ぢや。ごうかその女中をお呼び下されたい」

「畏まりました」

亭主は座を去つた。入り代つて這入つて來たのは、見るから純朴らしい五十餘りの田舍女であつた。

「ごめんなさいませ」
田舎女は恭し氣に御辭儀をした。
「お前さんは、被の江州小川村の藤樹先生を存じてゐるさうだのう」
左七郎はたづねた。
「はい存じてゐる所ぢや御座んせん。彼の方が未だ藤太郎さんこいはしやつた頃、わたしや能く彼家へ御子傳へに行つて居りました。藤太郎さんのお父樣……德右衞門さんにはえらう御世話になりました。親切なお方で御座したが割合早く亡くなられました。後にも先にもだゞ一人の藤太郎さんが、九ツの時、お祖父さんの德左衞門—吉長—樣が御自分の後嗣に貰はしやつて、藤太郎さんを、伯耆の米子へ連れて歸らつしやつたので、えらう淋しがつて御座つた。それに手放しこむながつてござつたのを中江家の一粒種を田舎で朽ち果たさしてはと、德左衞門さんは仰在るし、藤太郎さんも、行きたがられたものですから……しかしまだ德左衞門樣がござらつしやつた時、たしか十一歳の時でした、お母さんが歸で困つてゐられるこおきゝなされて、藥を持つて見舞に歸りかけられたさうでございますが、お祖父さんに引きとめられさつしやつたこか。何せ御孝心の深い御方でござすから、……それに、御殿樣がお離しなさらぬためにお

父樣の御臨終にも御會ひなさいませんでした。」
「其の德右衞門さんこいふのが、德左衞門さんの嫡男であらつしやつたのか」
「さうでござす。弟御が二人ございましたが、京都で筆道の御師範をして御座つたとかいふこでございます」
「いや、武家の嫡男でありながら草深い田舍に引つ込んで百姓で終られた其の德右衞門さんも尋常の人ではあるまい」
「そら旦那樣！　藤樹先生のお父樣でござすからな」
「實は身共は此れから、藤樹先生の許へ入門に罷り出でたく存ずるのぢや」
「それは〳〵善い御心掛けでござす。同し人間でありながら、妾の倅とはうんてんばんてんの相異でござす」
斯ういつて何故か女中ばオロ〳〵泣き出すではないか。
左七郎は訝しさうに、
「如何致したのぢや」
女中は涙を拭ひながら、

「實は妾に一人の倅がございますが、幼い時に父親が亡くなりましたものですから、つい妾が溺愛やかしすぎた所爲でもございませうが、內で横着する代りに外へ出ると、借つて來た猫のやうに溫順しいのが却つて他の子供に苛められるもこゝなりまして、それが爲に氣が捻ち頽れて了ひ今では村一番のならずものになつて居ります。藤樹先生が預らうと仰在つて、何遍も來て下さいましたのに、倅は先生に會ひこむながつて家出をして了ひました。彼の子の父親……亡くなりました妾の夫も德左衞門樣が、加藤貞恭樣に仕へて、美濃の黑野に御座つた時、御奉公申してゐたのでございますが、御暇頂かさつしやつた德右衞門は、殿樣に就いて米子へ行かつしやいましたけれご、夫は德右衞門樣と一緒に江州小川村の百姓になつて了はれました。はい彼の邊は加藤貞恭樣のお父さんのお若い時の領分でございましたさうで……」

此處まで語り來つて女中は一息入れた。

「いや、忝けない！」

左七郎は膝を蹴らした。女中は言葉を繼ぎ、

「藤太郎さんが米子へ行かしやつて、一年經つか經たぬ慥か元和三年に、お祖父さんのお殿樣—加藤貞恭—が、御國替にならしやつたので、お祖父さんも藤太郎さんを連れて伊豫の大洲へ移かつしやつて風早群の宰から殿樣を申しつかつてござつたが、藤太郎さんの十四の秋—八月七日—お祖母さんが亡くなられ、其の翌る年の秋—九月二十三日—お祖父さんも此の世を去られました。國許のお父さまが亡くならつしやつたのは、それから四年後—寛永二年正月四日—のことでございます。藤太郎さんはそれから四年目—寛永六年—におツ母樣を省ねに一寸お歸村なさいましたが、それから寛永九年お母さんを迎へにござつたが、おはかれなさつた殿樣の弟樣に從いて行洲から六里松山へ出る手前の新谷といふところへ、かしやつたさうでございます。しかし故郷にお母さんお一人お暮しになつてゐられるので、それを二度もお迎へにござつたのに、お母さんは「此の年齡になつて、知らぬ他國へ行き、難しい御武家衆にお交際するのは厭ぢや、死んでも故郷から放れともない」と仰在るので、殿樣から無理暇取らつしやつて、歸郷らしやつたのは、今から七年前でございます。なんせ親孝行のお方……それは〳〵親切な方でございす……それに倅は何こした奴でございせう」

子を思ふ涙と共に、下女は藤樹の經歷を一通り物語つた。下女の一語々々に膝を進めてゐた七郎。

「いや、聞けば聞くほご頭の下る先生ぢや、しかし、緣も由緒も無い某すら先生に引き寄せ

られるのに、それほご因縁の深いお前さんの息子が、何うして先生に引き寄せられずに終らう
拙者も村へ参つたら、及ばずながら力添へを致さう」
左七郎は下女を慰めた。下女は息子の上を頼んで引き下つた。

十

手織布子に道中袴、菅笠隻手に佐七郎が萬屋を去りかけたその途端、表に下りてゐる五丁の
駕籠から現はれたのは、四十前後の武家の奥方……つゞいて十七といつて十九にならぬ花恥か
しき令嬢姿、五十餘りの肥つた女は乳母らし、他に二十才前後と二十五七の女中が従いてゐる
奥方は左七郎を見てびつくりした。
「まあ！　熊澤様ではござりませぬか。あなた様がこちらに御逗留しやらうとは……ごうして
手前の方へお越し下さらないのでございます」
なつかしさうに、そして又、恨めしさうに、奥方は訴へた。
「おゝ！　生島の奥方……」
斯ういつたきり左七郎は立ちすくんだ。

「ごちらへかお出掛けの御様子……だしぬけに伺ひまして、御迷惑でござりませう」
氣遣はし氣に奥方は左七郎を見遣つた。左七郎、漸つと言葉を繼ぎ、
「それがし久しく御無沙汰いたし、何ごもはや申譯ござらぬ。何は然れ、こゝではお話も致し
兼ねますれば……」
左七郎は一同を以前の座敷へ誘ふた。此の五人の女客こそ、以前は中國某藩の家老であつた
が、數年前、職を辭して爾來京都岡崎に引籠り、風流閑雅な生活に、晩年を養つてゐる生島某
の妻女で、皐月といふ一人娘を連れての訪問であつた。皐月が桂の宮に仕へてゐたころ、或る
年の花見に、ふと左七郎を見初め、左七郎また彼の女を悪くからず思つたものか、和歌や手紙
の應酬が架橋となつて、其の家庭に親むやうになつた。兩親もいつしか未來の女婿と心の中に
定めて了つたらしい。
「拙者心の師を求めて、此の地に参りしが、未だ其の師を得ざりしゆゑ……」
「イヤ爾ういふ御事情とは存じませず、娘と何時もお怨み申して居りました。就いては早速で
ござりまするが、今日御伺ひ致しましたのは、娘もだん〳〵年が増つて参りますし、斯う申し
ては何でございますが、實はあちら、こちらから縁談を申込まれて困つてゐるやうな始末……

豫て御約束下さいましたやうに、不束な娘を妻として、御入家下さるまいか、確こした所を承りたく存じまして……」

娘は斯うしたことをいふ母の背後に隠れて耳元まで眞ツ紅にしてゐる。

「豫ての約束と仰せあるが、左七郎、未だ修業中の身の上、當分婚儀など御免蒙りたく存ずる」

冷然たる左七郎の返答に奥方は血相を變へた。乳母は默つて居られなくなつた。

「熊澤樣！　端下女が差出まして失禮でござりますが、御主人は御邸の方へ、お越し遊ばした方が、學問の御修業にも御便利かと存じます。御主人は御承知の學問好き、名高い先生方は、大抵御別懇にして居られまするから……」

「いや、御親切の段、忝けなく存ずるが實は今日、良き師を得たる故、入門に罷り出るこころでござる」

奥方はせき込んだ。

「では、娘の緣談は、ごうして頂けるのでございませう？」

「そんなお話は、只今の某には、問題に致し難うござる。わざ〳〵の御入來に對し、實以て相濟み申さぬが、みごものことは全く緣なきものと思召下されて、然るべき御良緣を他に御求め

下されまするやう」

きつぱり突き放した。母なる人は憤激して、

「熊澤樣！　そりやあんまり御道慾と申すもの……武士たるものが犬切ない約束を反古に遊ばすことは……あなた樣にも御似合ひ申さぬ」

「されば、斯樣な嘘吐き者をすつぱりと、御見すて遊ばされた方が、御上策でござりませう」

「えツ！」

奥方は眞ツ蒼になつた。娘は泣き出した。乳母はオロ〳〵するし、附添の女中もごぎまぎしだした。目もあてられぬ憐らしさに、流石の左七郎も、斷腸の思ひをしたが、小さき妥協は一切を破壞する。一分の親切は全部の抹殺であると思つたものか、

「いつまでお話し申しても盡きぬこと。何と仰在つても、放つた矢は返りませぬ。皆樣、御無事で……では、御免下されい」

涙の火の火を氷の如き態度に打消しながら、見顧りもしないで左七郎は出て行つた。

十一

藤樹の宅は、柴垣さへも廻らさぬ板廂の陋屋であるが、表は店になつてゐて、清酒や、濁酒を杓に量つて賣つて居る。備前燒の火鉢見たいな酒甕の傍には、米櫃が置かれてある。米のはかり賣もするらしい。米搗納屋の背後に板小屋がある。門人共の稽古場であり、寄宿舍でもある。弟子達や村の有志の手になつたらしい。誰いふことなく、會所と名づけられてゐる。此の會所の出來た時から常番人のやうに起臥してゐる書生がある。それは嘗て藤樹が加藤貞恭に仕へて大洲に居た時、懇意であつた同藩士大野某の嫡子であるが、健忘症とでもいふものか、何を學んでも覺えられぬので、親の跡目の嗣げぬは勿論、商人にもなれねば、百姓もむつかしからうと、父は按摩の稽古をさせた。我が亡きあとで生活にも困るであらうとの親心からであるが了佐は可惜武士の子に生まれながら、一生按摩で果てるのを口惜しく思つて「ごうか醫者になれますやうに……」と、藤樹に縋つて、一心不亂に勉強したのであるが、其の記憶の悪いこつたら言語道斷で、三年ばかり大學一卷を習つたが、今に一章一節もすら〳〵讀み得ないのである。尋常の師匠ならば、疾くに謝絶したであらうけれど、藤樹は堅く信ずるところあるもの、如く、縞魂の限を盡くして間がな隙がな教へてゐた。しかし、大洲に居る間は、一向何等の效驗もなかつたが、藤樹の歸鄉後、了佐は父母の許可を受けてはる〴〵小川村に來り、爾來ずつと藤樹の家に寄寓して、朝夕其の敎訓を受けてゐるのである。そして此の頃「南北經驗醫方大成」卽ち「大成論」なる醫書を稽古してゐるが、或日午前九時頃から初めて、午後四時頃までに二百遍も敎はつたが、猶覺えられない。更に七八十遍繰り返して漸つと覺えたかと思ふと、夕餉を認めてから讀ませて見ると、スツクリ忘れて一字も覺えてゐない。傍にゐた弟子達は、覺えずドツと吹き出したが、愚直なる本人は一向平氣で、只管慈父の如き先生の溫情にもたれてゐた。藤樹も亦、

「熱心の伴はぬ記憶の悪さよりも、熱心な記憶の悪さが賴母しい。若しも本人に熱心がなかつたら敎へたくも敎へられない、否、自分こそ、却つて了佐の熱心に惰弱を鞭たれてゐるのである」

斯うしたことをいつて、了佐を勵ますと共に、嘲笑者を戒めた。それに記憶こそ底拔けて悪いけれごも、了佐は眞摯な、熱心な、そして親切な若者で、例の權四郎の女房が病氣になつてゐるのを、殆ど毎日のやうに見舞つてやり、先生からおそはつた良藥を屆けることを、何より

の樂みにしてゐた。

「人は皆平等に天から惠まれてゐるのである。惡人と見ゆる者、必ずしも其の本性から惡いのではない。愚物と思はれる者亦、必ずしも本質から愚かなのではない。人の缺點は必ず其の背後に長所を藏して居る暗示である。自己の隱れたる長所を自覺せざるところに、所謂惡人、所謂愚人の尊さがあるのである」

これが藤樹の門下生に訓ゆる人間觀の要領であつた。

「諸君は了佐の記憶の惡いのを嘲笑つてはならぬ。彼の記憶の惡いのは、彼の咎ではなく、全く私の熱誠が足らぬ爲めである。熱誠の足らぬ私を師として、なほ學問に進境ある諸君は、自らの天分の豐かなることを、天に感謝すべきであるが、同一の天分は、やはり了佐にも惠まれてゐるのである。假にこれを鑿井に譬へんか、井を掘ること二三間、輒ち湧き出づる水は間水であつて、未だ清水を以て許し難い。掘ること更に五六七間、而も猶、一滴の水を見ざるの地は、果して終に井戸を作ることが出來ぬのであらうか。しかし良工は決して其の作業を放棄せぬのである。井は其の深さに隨つて、その水は清冽澄徹なのである。了佐われに就いて學ぶこと前後十年、猶、水を見ざる井に似たるは、彼の心の奥底……、測るべからざる深いところに

最も清冽、最も澄徹なる眞清水の藏されて居る證據である。これしかしながら、了佐一人の謂であらうか。お互も亦、自らを省みて、小成に安んずることなく、更に〳〵自らを穿鑿して、至深に憤し、古今聖賢の實證せられた仁義の眞清水を汲み上げて、普くこれを世の渦ける人達に、頒ち得ることを、學問の標的こ至したいものである」

斯く了佐の爲に辨ずるこ共に、愚か者こ嘲けられる了佐の熱心か、若しも嘲る同塾生にあつたならば、と念ふ心から、藤樹は更に諸生に告げた。

「善き記憶は精神の健康な證據てある。身體の健康な了佐は、更に深く內省して其の精神內……自他の窺ひ知り難き深奧所に、如何なる疾病の存するやを探究せねばならぬ。一見で其の病所に心達した時、從來久しく忘却の墓中に、葬り去られた無數の事象は、悉く蘇り來つて、癒されたる其の心魂の用を爲すに至るであらう、人の身を癒すの要訣は、先づ其の心を醫すに在り、人の心を醫さんこ志す者、先づ自家の心を完全に醫さる、道を求めねばならぬ、世に病者に深甚の同情ある者、難病者に過ぎたるはない。今日の難病者、焉んぞ知らん、他日の國手こして立つべき大使命を負はされたるをや。了佐たる者、決して自暴自棄してはならぬ」

十二

了佐に關する是等の教訓の悉くを、彼は受け容れることは出來ないにしろ、溫かい先生の言葉は、宛ら春の慈雨の如く、枯草のやうな一同の心を潤すのであつた。

或日のこと。藤樹が四五の門人相手に、孝經を講じてゐた時、俄かに消魂しい物音が聞え出した。恰度會所の向ひの空家に、人が慌しく驅け込んだかのやうである。諸生は皆一樣に視線をそれに注いだ。然し、藤樹はそれを別に咎めるでもなく、從容として同じ調子に講義を進めて行く。すると間もなく、多くの人がドヤ〳〵空家を取り圍いた。

「確に此家へ逃げ込んだのに相違ない」

「今度こそ取り逃がさぬやう……」

「二三人裏手の方へ……」

「出ろツ〳〵出てうせんか！」

口々に、喚き、罵り、呟く大聲小聲……却々穩かでない。諸生は皆其の方に氣を奪られてゐるが、藤樹は耳にも入らぬかのやうに、平氣で諄々と講義を續けて行くので、書生の心も流石

に沈着いた。所へ、間の襖を靜かに開けて、闕越しに兩手をつかへた二十歲あまりの女がある。それは藤樹の妻お久であつた。お久は伊勢龜山高橋某の娘で、藤樹とは再從兄妹……痩せぎすな、色の黝い、二目と見られぬ醜婦であるけれども、何となく上品な氣質のやさしい淑やかな女性であつた。

「唯今、お向ひの空家に、其の筋のお尋ねものが逃げ込みましたさうで、御役人の方々が召捕らうとして居られますか、相手が刀を抜いて死物狂ひになつて居りますとかで、困つてお出での御樣子……」

お久が斯ういつてゐるうちに、戶外はますます騷がしくなつて、殆どそれ等の聲が聞き取れぬばかりであつた。

「ウン……左樣か」

藤樹は斯ういつて、徐ろに其の方を眺めた。

「御役人は多勢居られますが、誰も家に入つて行く人がないのです」

何時の間にか傍に來てゐた了佐は斯ういつた。藤樹は默つて靜かに會所を出で、空家の方へ行つた。捕吏らしいのが十四五人もわい〳〵喚いてゐるが、如何にも暗い空家の中へ、誰一人

さして入り得るものがなかつた。ツカ〳〵こ捕吏の前に進んで、藤樹は一禮なし、

「これは御役目御苦勞に存じます。こゝへ逃げ込んだものに、如何なる罪科あつて、かくお召捕りになられるのでござりまするか。私は此の家の主人、中江與右衞門こ申すもの……」

慇懃な藤樹の挨拶に、捕吏頭は恐縮の面色で、

「これや失禮いたしました。御高名はかねゞ〳〵承つて居りまする。藤樹先生こは貴下でござりまするか。拙者は先生を道の師範と仰いで居られる大溝侯―分部若狹守―から、此の村へ派遣されて居る江崎と申す下從武士でござるが、實は鐵火打の與作こ申すもの、放埒にして產を治めず、親を泣かせ世間を苦めてゐるこいふ風聞を、耳にしてゐたが、昨夜刀を提げて若い女を追つかけてゐるこ訴へて來たものがあつたので、早速召捕りに參りしこころ、刀を拔いて抵抗ひいたし、闇に乘じて逃げうせし故、群代に應援を請ひ、今朝漸つこ見付け出したのでござるが、刀を拔いてあばれ出す故、無益に人命を損じるのも如何こ、聊か分別いたし居るこころでござる」

斯うしたいひわけならぬ江崎の辯疏に、對者を捕ふる妙案でもあれば、聞かしてほし氣な心を見て取つた藤樹は微笑して、

「差し出がましうはござりまするが、同人の召捕り方を私にお任せくださりませんでせうか」

無造作にいつて退けた。江崎は覺えず頭を下げ、

「先生！　何分宜敷御願ひいたすでござる」

「では皆樣！御免下さいませ」

身に寸鐵も帶びぬ藤樹は、其のまゝスーツこ空家に入つて行つた。一同は互に顏を見合はした。藤樹の無鐵砲に驚いたこ共に、その安否を氣遣つたからである。やがて死の如き沈默が少時空家の內外を領したが、奧の方で藤樹こ兇漢が、何かヒソ〳〵語合つてゐるらしく思はれるこ程なく藤樹は入つた時こ同樣な、麗かな顏して、悠然こ戶外へ姿を現はした。

「先生！　如何でござつたかな」

胸撫で下しながらも、氣遣はし氣に江崎の尋ねる間もなく一同は、宛ら虎使に馴らされた虎のやうな與作の姿を、藤樹の背後に認めた。

「與作！　御用だ……」

捕吏の二三は急に意氣り立つて、與作に捕繩打ちかけた。

「あゝ一寸お待ち下されたい」

藤樹は制して、

「此の若者は前非を後悔して本來の善心に立歸らうとしたところを、不逞無賴の兇漢こして、虎狼のやうに取扱はれたところから、我覺らず白刃を閃かしたさうでござるが、御寬の如く、拙者無手にて入つて見れば立所に白刃を打ち棄て、掌を合はして涙をこぼし、舊惡を悔い、眞人間に立ち歸りたいこの述懷、拙者強か心を擊たれ同涙いたした」

斯ういつて藤樹は更に江崎に對ひ、

「或は御無理な御願ひかは存じませぬが、此の與作ごのを拙者にお任せは下さるまいか。聖人の道を學びながら、未だ鄕黨を感化する德なきの致すところ……若しも與作ごのに罪がありまするならば、それは私の罪でございまする」

我が罪を詫びるが如く藤樹は詫びいつたのに、捕吏一同は互に顏を見合はした。

「それこも、たつて與作ごのをお召捕り相成るやうならば、ごうか私をお召捕り下さりまするやう……」

眞心溢るゝ、藤樹の願ひに、

「いや、我々が與作を召捕りに參つたのは、格別罪科を犯したこいふのでもござらぬ。前刻申

したやうに、他から刀を借り出して、娘を追つかけてゐるこいふ訴人があつたので、一應取糺した上、罪科がなければ將來を戒めて歸すつもりでござつたが、暴言を吐いて手向ひ致す故、餘儀なく搦め捕らんこいたしたところ、白刃を閃かしてあばれ出すこいふ始末で、かゝる大騷ぎになつたのでござる。他ならぬ先生が御引受け下さるならば、喜んでお任せ申さう」

捕吏頭の江崎は斯ういつて與作に對ひ、

「コリヤ、與作！　貴樣は冥加な奴ぢや。しかこ先生の御敎を腹に叩き込んで、眞人間に立ち歸れ！」

與作は默つて頭を下げた。兩眼は涙にうるんでゐる。捕吏一同は、

「むさくろしい陋屋ではござりまするが、粗茶一杯差上げたうございますから……」

すゝめる藤樹の厚意を謝して、來た時の勢こは打つて變つて、何事か語合ひつゝ、靜かな步調で立ち去つた。

斯くの如くにして、親泣かせの放蕩者……　村の持て餘しものこして、見る人、會ふ人に爪彈きされてゐた與作も、曩に權四郎が救はれたやうに、精靈の親ごもいふべき藤樹の流す熱い涙に救はれた。この二人は昔、惡に强かつた如く、今は善に强く、賴母しい藤樹の肘こなり股こ

なつた。二人とも無學で、殆ど目に一丁字すらないのであるが、其の心膽は璞玉が名工の手に磨かれるやうに、藤樹の人格に化せられて、日一日と其の輝きを增して來るのであつた。それに、二人が改心した爲に、これまで二人を親分、兄弟分と賴んでゐた、無賴漢の多くが改心して、正業に立ち歸つたので、村內の空氣は頓にあらたまり、犬の吠ゆる聲も少くなり、鷄の鳴き聲すら、何となくうらゝかに聞えるやうになつた。

十三

三條の萬屋で圖らず藤樹先生のことを聞いて、隣室の若侍へ財布を返しに來た彼の馬子こそ、良師を自分に授くる爲に、天から遣はされた使者ならめ！と、飛び立つ嬉しさに、精靈を躍らし、性慾を詩化する戀愛の昇天……心の扉に其の面影を烙付けて瞬時も忘れ得なかつた許婚の戀女をすら袖にして、磁石に引かるれ鐵の如く、驀らに藤樹を小川村に訪れた左七郎が直ぐに踵を反したのは何故であらう？　而も其の後、杳として消息は聞えなかつた。然し、それは藤樹に謝絕せられたのでも、藤樹に失望したのでもない。否、藤樹に謝絕されて、より深く入門の意志を固めながら　左七郎が再び凜乎たる其の風貌を、小川村に現はしたのは、それ

から四ケ月ばかりも後、寬永十八年十一月二十四日のことであつた。そして其の姿には、著しく面窶が見られた。直線は二點間の最短距離であるが、人は如何に熱心であつても、自力的努力だけでは、所信に對つて一直線に邁進することの能きぬ場合が多い。機緣が熟さなければ、一つになるべき筈の此れと彼れとも、一つになり難いものである。入門したい一念から折角、藤樹に會ひながら、再訪を期して一先づ引返した途次、問はで應ふる松吹く風に誘はれたのか風なきに散る木の葉の導きか、彼は不圖した動機から、比叡の峯を攀ぢたのが原因で、彼方此方と心の向くまゝに放浪した。然し此の間の放浪は彼れ自身にとつて最も有意義な道程であつた。或は大德、聖者を幽谷に訪ひ、或は碩學、鴻儒を田園に訪ね、或は軍學、劍法の師範を都門におとづれ、靈蹟を探り、古戰場を弔ひ、時には市井の間、花柳の巷にすら放浪して見たが風に吹き散る木の葉を趁うて翔ける小鳥に等しく、彼に屈强の滿足を與ふるものは、何一つないのみならず、一見平凡に見えた藤樹が次第に懷しく、尊く仰がれて來るではないか、斯くして會ふ人の悉くに失望した彼は、孤獨のドン底からドン底へと陷つて行つたが、測り知られぬ孤獨の深潭に、最後の希望として取殘されたのは、藤樹先生の面影だけであつた。此の時程先生に憧憬れ、先生の高教を受けたいと云ふ、念願に燃え立つた時はなかつた。斷乎たる覺悟

を決して、更に小川村に向つた彼の態度の眞劍さが、達磨を松林寺に訪れた二祖慧可のそれに髣髴たるものがあつたのも不思議でない。

斯くて彼は黄色、樺色いろ〳〵の落葉を封じて、七寶こ輝く道の邊の氷を踏み、白衣の聖者の寄り集へる壯嚴世界を聯想はせる、殘雪の山路を越えて美濃から近江路に入つて小川村へこ急いだが、前こは來た路も異つてゐるし、初秋の風に戰いでゐた稻田も、黄金の波が鋤に織られた土の縞目に變つてゐる。

「はて？」

小首を傾けながら、何方に行くべきかに左七郎が思ひ惑うてゐるこ、

松になりたや
　彼の家の松にチンコロリン
藤に抱かれて
　寢こござるチヤ〳〵コン、チヤ〳〵コン

杼の音、筬の響こ共に織娘の歌聲が耳を擊つた。見るこ柿の樹下の百姓家に機を織つてゐる娘がある。

「卒爾ながら、小川村へ參るには、何方へ行くのでござるかな」

窓口に近寄つて、左七郎は唄の主なる織女にたづねた。

「小川村の何方へ行かれまするか」

「藤樹先生の許へ參るものでござる」

「あゝ藤樹さんへ、御參詣でござりまするか」

矢庭に機から降りた織女は、襷を外してうや〳〵しく、

「少時、お待ち下さいませ。御案內致しまするから……」

手速く顏を洗つて衣服を着更へ、襖を開けて兄らしいのにこそわつた織女は、いそ〳〵案內する。奥の間から咳嗽の聲が聞えた。

「病人があられるやうぢやな」

「ハイ永い間、母が血の道で寢て居りまするが、藤樹先生のお蔭で餘程瘳つてまゐりました。有難いことでござります」

「先生は病氣も御醫しなさるのか」

「ハイ他の醫者が見放して了つた妾の母があんなに快くなつた位ですから……」

左七郎は今更のやうに藤樹に敬服した。

「聞きしに勝る民の父母……此の女のやうすを見るこ、藤樹先生も生神のやうに尊みながら、又、親のやうにも慕つて居るやうぢや。水は澄むほど淺く見ゆ、心の天は高いほど近く感じられるからな」

斯く獨り言つた左七郎の目に鎭守の森を中心に、靜かに炊烟をあげてゐる百戸に足らぬ寒村が映じた。

「おゝ分つたぞ！對方に見ゆるのが小川村だ。忙しい中を御苦勞であつた」

左七郎は織女に禮を述べて歸宅を促した。

「妾も御本を習つてゐるのでございます」

織女はいふ。

「女も入門出來るのか」

「ハイ男の御弟子さんの御內裏は、大抵さうでございます。通ふこゝの出來ない方は、手紙や書物で敎はつて居られます」

「御弟子さんは村の人ばかりかのう」

「イゝエ京都や若狹からも來られまするが、伊豫の大洲からも來て居られます」

「おゝ左樣か、大洲に居られた時から、敎育に御熱心であられたらしいな。それに女子の敎育に骨を折つた學者は昔から餘りない、特に今の世の學者は昔の坊主同樣、將軍とか大名とか富豪に抱へられることばかり念がけてゐる。さうでなければ高く止まつて、俗人に近づかず、近付く奴は俗人よりも俗な俗物ばかりだ」

我を忘れて左七郎は呟いた。

「おゝお光！　御稽古に來たのか」

一人の馬子が突然、案內の織女にいつた。

「あゝ父ちやん！　速く歸つておくれよ。兄さんのお稽古に來るのが遲れるから……」

「よし！心得た。しつかり勉强したが可い」

馬子は斯ういゝて馬を追立てつゝ歸つていつた。

「では御武家樣……これで御免蒙ります」

織女も、左七郎に辭儀するなり、傍の茅舍へ入つて了つた。

「はて？　彼の馬子は三條の萬屋へゝ彼の石井氏の忘れた財布を返しに來た權四郎らしいぞ…

……」

馬子の後影を見詰めて左七郎は斯く叫んだ。そして吃驚したやうに、

「おゝ！　此家だ。裏手の方から來たので迂つ濶りいたしてゐた」

咿唔の聲に呼び止められて、我し覺らず斯く獨り言つた左七郎の態度には、我が家へ歸つて來たかのやうな喜びが見られた。藤樹が恰も記憶の悪い了佐に、例の「大成論」を教へつゝある時であつたが、根かぎり親切な其の教へ振りは、傍觀者をして、そゞろに涙を催さしむるものがあつた。然し、了佐の學業は相も變らず一進九退で、餘りこしても亦、餘りに捗らなさ過ぎた。けれごも、藤樹は倦まず撓まず繰り返し〳〵教へてゐた。

「お賴み申す！」

凛乎たる來客の其の聲は、聞き覺えのある懐かしい聲なので、藤樹が起つて店頭へ出て見ると、眉目清秀な若侍が、屹と佇つてゐるではないか。

「おゝ！　そなたは、いつぞや、お目にかゝつた熊澤左七郎殿……」

斯ういつたきり藤樹は口を噤んだ。恭しく一禮した左七郎、

「これは先生！　其の後は御無沙汰に罷越し、失禮御免下さりませ。實は先生！　彼の節、申

上げたる如く、刻々墮落し行く世態人心を見るにつけ、痛憂大患に堪へませぬが、飜つて自己を反省いたしまする時、内心大いに恥づるこころのものこれあり、進んで世の爲に盡くすの勇氣もなく、退いて自己を修むる道をも知らざる、愚昧しき持て餘し者でござるが、先頃、不圖した御緣で御目にかゝり、師と賴むべきは、先生の外にこれなきことを信じながら、餘りに未熟なる自分の恥かしさに、今日に至るまで、彼地此地と放浪いたしたが、何等得るところなく、いよ〳〵先生の外に、拙者の愚昧を御啓き下さる師なきことを覺りました。甚だ御無理な御願ひながら、今日只今より、拙者を御門末にお加へ下さりまするよう」

明晰なる語調、嚴肅なる態度……眞摯な氣は一言一句、人に迫るものがある。然し、藤樹は何ごも思つたか、左七郎の前に低頭平身して、

「これは熊澤殿！　物の數にも足らぬこんな遊民を、お買ひ被り下さつては、お互の迷惑でござりまする。滿足に書物も讀まない斯んな因循者を道の師範なごゝは以つての外、地下でも人並の活動が出來ぬために、若い方の御熱心に引摺られて、聖人の書物は繙いて居りまするが人の師ごなる器ではございませぬ。怎うして貴殿の如き賢明なる御仁に何が申上げられませう。折り返しての御來訪は痛み入りまするが、それは飛んだお門違ひでござりませう」

藤樹の斯うした挨拶に左七郎、見る〳〵顔を赤くした。

「御謙遜なる先生の御言葉に左七郎こそ、實際痛み入りまするが、然し、私に取りましては、先生の外に頼みまする師はござりませぬ。先生に師事することは、一切を喪つた私に、取殘された唯一つの希望……生命懸けの大願でござりまする。入門の儀、扨げて御聞き屆け下さりまするよう」

盤石の覺悟を目の色に現はした左七郎の斯うした嘆願も、藤樹を動かす力はなかつた。

「如何に仰せられても、重箱に牛は詰められませぬ。貴殿の如き千里の駿足には、蹇の馬丁は邪魔にしかなりますまい」

「入門御許し下さらぬこあらば、お店前にて割腹いたし、相果てまするこも、斷じて御暇いたしませぬ」

母の如き底溫かな藤樹の懷中に、嚴父の如き冷たさがあるこしても、年少氣鋭の左七郎にタイラント暴君のやうな專横さがあつた。けれごも、藤樹はそれを氣に障へるやうすもなく、寧ろ頼もしい青年として、其の前途に認むる光明を、一層深めたここが、その態度に微見える。然し、態度の懇切に引き代へて、其の言葉は極めて無情の閃きである。

「これは熊澤氏！　割腹されるのは、貴殿の御隨意ぢやが、店前でやられては商家として、甚だ迷惑致す……　山中なり、又、野外に出でられて、召されたが可からう。入門の儀は絶對に御斷り致します」

斯くきめつけて、而も慇懃に一禮なし、藤樹は奥へ入つて了つた。店頭に取殘された左七郎は、餘りの意外さに、何うすることも能きなかつた。少時、上り框に腰打掛けて呻吟してゐたが、取り付く島もない程に入門を謝絶られたので、寧そ先生を見限つて、再び行衞定めぬ放浪の旅に入らうかと、考へぬでもなかつたが、放浪に疲れ果てた彼の體驗は、再び其の道に進むべく躊躇させた。それに會所の方から、聞える藤樹が繰り返し〳〵了佐に教ふる「大成論」の一言一句が、心魂を貫くから堪らない。

十四

左七郎は會所の入口に積まれてあつた、古い酒菰の一つを引ツ張り出して、出入りの邪魔にならぬやうに、店の入口脇に敷いて、ドッカこ其の上に据り込んだ。

悲しげな夕暮れの冷たい風は五體を撫でる。夜の帷が下りるに隨つて、白刃の如き小川のせ

らぎも刺すが如くに身に沁みる。霜凍る灰白い四邊の木の葉を搖るがして、何處からともなく鐘の音が聞える。頭上の藤棚から漏れ來る露に仰向くと、測り知られぬ深淵の如き紺青の空は、刻々深さを增して、閃く星の明滅が魂の悲鳴のやうに感じられる。

姑の市子と共に安否を氣遣うてゐた妻のお久が翌る朝、

「もう歸られたであらう？」

密ツと、表戸を開けて見ると、左七郎は石像のやうに依然、座つたまゝではないか。お久は其の旨を藤樹に告げたが、藤樹はウンともスンとも言はぬ。しかし藤樹の此の無言の言中に、

「若侍の熱心には無理がある。經學、文章を軍學、劍法に取換へて立身出世に專らなる餘りであらう」

といひた氣な藤樹の心を讀んだお久は、それとなく左七郎に、歸宅を促さずには居られなかつた。しかし、左七郎は

「入門御許し下さらねば、此の儘、此處で相果てまする」

と　覺悟を訴へるので、お久は獨り心を苦しめた。やがて其の日も暮れた。淚のやうな凍雨にそぼ濡れた左七郎は、身動ぎもしなかつた。凍雨はやがて山を飛ばし湖を　さんばかりの

暴風雨となつた。牖を擊つ暴風雨の音に、お久は眼を覺まして

「如何な若侍も、もう坐つてはゐなさるまい」

と、牖戸を開けて見ると、空は何時しか霽れ渡りて寒月一輪、冷光宛ら氷の如く、閻として死せるが如き深默の世界に、獨り左七郎は坐つてゐる。夜が明けたが去らうとはしない。詮ひて歸つた勘當息子の歸參を、嚴父にせがむ慈母のやうに、

「あの若侍は、昨夜からの暴風雨にも立ち去られず、坐られたまゝでござりまする」

左七郎のためにお久は更に藤樹に訴へた。けれごも、藤樹は何ともいはぬ。しかし左七郎に去るべく促す勇氣はなくなつた。母の弱さも、父の強さも、靈の親心に變りはないが、お久は藤樹の態度に、自分の哀訴を撮めて、猶餘りある底知れぬ熱い淚が痛感されたからである。やがて風は凪んだかと思ふと、粉雪がチラつき出した。そして積りさうにも思へなかつた粉雪はお久が表戸を閉ざす日暮頃には、もう世界を眞つ白く彩つてゐた。しかし、なか〳〵やみさうにも思へない。

「此雪には流石の若侍も、辟易されたであらう」

と、毎朝のやうに、そつと表戸を開けて見ると、依然坐つた儘ではないか。すると、母の市

孑は藤樹の前に姿を現はした。

「彼の若侍の樣子を見ると、經書の文字を學びに來たのではなく、見喪つてゐた自分の魂をお前の上に見出したのぢや。いはゞお前が招き寄せたのぢや。師匠になるとか、弟子になるとかいふのではない。もと〳〵一つであつた魂が、もとの一つにならうとするのであるから、幾らお前が突き放さうとしても、それはなるまい。若侍の苦みが、お前の惱みとなり、お前の惱みが若侍の苦みとなつて、互に苦惱が募るばかりぢや。骨を削る寒天に、露佛になつてゐる若侍も痛々しいが、確とそれを抱き占めて心に泣いて居るお前の姿は見て居れぬ」

市子の斯うした悲叫に、兩手を支へて謹聽いてゐた藤樹は、忽ち疊に頭を摺り付けた。

「母上樣！甚だ御心配をかけまして……何ともはや申譯がございませぬ」

只管詫び入つた藤樹の姿を見かねてか、母は自分の部屋へ退いた。しかし、早速起つて戸外へ出て行つた藤樹は、左七郎を見て驚きもし、喜びもした。二日三夜の苦痛を知らざるもの、如く、來た時と同じ顏相、同じ元氣であつたからだ。

「全くの無智無識……大學の素讀すらおぼつかない靑襟の乳臭兒でございまするが、何卒特別の御憐憫で、御心長く御敎授に預りたうございまする」

大地に平伏して佐七郎は泣かんばかりに斯く訴へた。藤樹は穩かに、

「イヤ、私共も、學問とは無理のない生活方……天の心に從うて勤むべきを勤むることとは存じながら、書物を讀みまするとて書物に亡されまする。心が書物そのものになるからでござりませう。それと申すのも必ず聖人たらうとする志が立つてゐないからでござります。眞に志が立ちまするれば、驛馬の鈴の音も師となりませうけれごも、志の立てかたが間違つて居りまするために、孔子も師とはならんのでござりまする。何とも早や面目次第もござりませぬ」

「恐れ入つたる先生のお謙辭に、身の置きごころもござりませぬが、不肖なれごも此の左七郎聖人を志す者でござれご、天性魯鈍にして無學でござりますから、是非先生の御指導を仰ぎたく存じます」

「イヤ貴殿が捨身の御熱心と、剛强なる御意志に、心の惰弱を鞭たれ、腐れた精神に活を與へられた段は、幾重にも御禮申し上げまするが、貴殿が家を棄て、遠く遊ばれるのは、或は御兩親が世を御去りなされたからでござるか、それとも、兄上が家に御座るのか」

「御蔭をもちまして兩親とも揃つて居りまするし、手前が長男で御座りまするが、舍弟や愚妹が御座りまするので……」

「では御弟妹に御両親をお任しなされて、家を出られ、そして聖人たらんとせられるのでござるのか」

「えツ！」

左七郎は顔を赧らめた。

功名榮達の念願に心の大本を忘れてゐた己が不所存に心注いたからである。藤樹は聲を曇らせて、

「聖人とは天の心を心とせられる方のやうに承つて居りまする。孝子とは聖人の別名……孝は未然の光……天地が滅んでも猶、亡びざる神の道と承つて居りまする。大學に『至善に止まる』とありまするのも、孝が萬善の源泉であるとの意味でござりませう」

斯ういつて藤樹は眼をしばたゝいた。

「ハ……」

左七郎は五體をふるはした。

「イヤ、熊澤殿！　茫々たる天地間、たゞ親を思ふ子心のみが眞實でござらうのに、私は己が榮達に心を奪はれて、兩親を棄てゝ遠國に罷越し、絕えて親を省みなかつた自分の過去が思ひ

出されて、留守中、世を去りし父に詫びて居るのでござりまする」

斯ういつて打悄れた藤樹の目から大粒の涙が、左七郎の眼の前に零れた。ヒユー〳〵と鳴る朔風は大地の悲鳴に感じられ、ポトリ〳〵と藤の樹から、落ち來る雪解の滴りに、天亦、泣いてゐるかの如……

「樹欲靜而風不止子欲養親不待」

天和十年の元旦、藤樹を大洲から小川村へ歸省すべく促した皐魚傳中の一節が、會所の方から漏れて來た。

十五

「何時見ても秀麗なのは、比叡の山姿ぢや。京からの春の眺望も格別ぢやが、山水を攝めた此處からの冬の面影は亦一入ぢや」

手欄に凭れて繪にも描けない自然の美觀に見惚れてゐた藤樹門の一人は獨り言つた。

「おゝ！　堅田あたりは時雨れてゐるやうぢや」

傍に居た左七郎は呟いた。

「大分荒れさうぢやな」

何時の程にか緣端に佇んで、一心不亂に湖上を凝視めて居た藤樹は眉を顰めた。

「風雲の光景も亦、一興でござります」

一門人は應ふ。

「それや高見からの見物には、奇絶であらうが、彼の湖上の客が氣遣はれてならぬ」

斯ういつて藤樹の指ざした方を見るに、一艘の扁舟が此方を指して遣つて來る。左七郎はじめ、座中一同の目の悉くが、其舟に注がれて、瞬きもせず見詰めてゐるに、堅田邊りに見えてゐた暗雲が、何時しか空一杯に擴がつて、ハタと風がこまつた、と思ふ間もなく大粒の雨がバラ〳〵降つて來た。

「あ！　惡魔の雲が破れたぞ」

左七郎は叫んだ。やがて雨は歇んだが、忽ち激しい比叡嵐に、湖面は一波動くに見る間に、千瀾競ひ起る大亂濤……例の扁舟は風に飜る木の葉のやう。氣遣はし氣に息もつがずに無事を念じてゐた藤樹は、聊か安堵したらしく、

「あゝ！　彼の舟には尊い姿が拜まれる」

と微笑んだ。扁舟が湖岸に近附いたからだ。

「成程、斯程の暴風雨をも、さして意に介せられる樣子も見えず、母ごも覺しき婦人を劬つて居られる沙門が在られまするな」

左七郎は應へたが、やがて其の舟が紅葉館の眞下に着いた其の刹那、沙門の顏を見て驚いた左七郎、

「おゝ！　ありや先年、京の旅籠屋でお目にかゝつた彼の石井源八郎殿に相違ない……お迎へ申して來るがよからう」

下座に控へてゐた與作と權六にいひつけた。

「ハ……」

と應へて出駈けて行つた兩人は、程なく歸つて來たが、伴はれて來た沙門を見て、懷かしさに堪へざるもの、如く、左七郎は座を起つて喜び迎へた。果然、源八郎であつたからだ。しかし源八郎は出家後、元政と改めてゐる。伴へる老婆は其の母であつた。一別以來の挨拶が終るや、左七郎は藤樹に紹介した。

「藤樹先生！　御尊顏を拜しまするのは、初めてゞござりまするが、御靈貌は御高著等によつ

て、久しき以前から拜して居りました。實は野衲今を過ぐること六年前、先生の御感化を蒙つて居る、馬子の權四郎ごの、ために、一命を助けられました石井源八郎こ申す、白痴者のなれの果……其の後、一度推參な仕り、御禮も申し上げたく、御教訓をも仰ぎたく存じ、公用を了へて歸國いたせしところ、思ひがけなくも叔父の訃に接し、母こ共に泉州和氣に罷越し、歸藩致せば老公の御不豫、續いて野衲の疾病こ、兎角の事に取紛れ、素懷を果すに遑なく、遺憾至極に存じてゐたのでござります一

「イヤ、そなたのことは、左七郎殿より聞かされる以前から、世に珍しき御孝心の程を、誰からともなく承り、御目にかゝれる機會もあらばやこ、念じて居りましたが、今日こゝでお目にかゝるこの能きたのは、此上なき喜びでござる。熊澤殿こ貴殿が相引き相求めて居られるからでござらう。實は左七郎殿が、舊主池田光政公から招聘されて、岡山へ行かれるので、心ばかりの小宴を開いてゐるのでござる」

「それは喜ばしい事でござります。先生によつて救はれた一人が、それからそれへこ、緣に隨つて多くの人を救はれまするやうに熊澤氏によつて示される一藩の範が、やがて諸有藩の範こなりませう」

元政は心から祝いだ。

「その、御挨拶には恐れ入るの外は御座りませぬが、御連れの方は御老母でござらうな」

眞心の籠つた藤樹の斯の一言に、挨拶の機會を待つて居た老母は進み出で、

「これは藤樹先生にあられまするか。御高名はかねてより承つて居りました。殊に、先年、權四郎ごのこやら申す正直な馬子のお蔭で、悴が一命を助かりましたのも、あなた樣のお蔭でござりまする。悴の生命の親でござる先生なり、權四郎殿の許へ早速罷出でまして、御禮を申上げたいこ念ひながら、機會を失ひまして、其の儘に打過ぎ御無禮仕りました」

老母は感謝こ恐縮に堪へざるもの、如くであるが、大野了佐こ共に傍に控へてゐた權四郎の娘お光は、

「さては此の方が彼の革財布の遺失主であられたか」

こ、人知れず顏を羞らめた。返しに行かんこする父を引き止めた當時が思ひ出されたからである。しかし、お光はもう娘ではない。大野夫人であつた。藤樹夫婦の媒酌で了佐こ結婚したのである。それに了佐も今は物忘れの窮措大ではない、近頃評判の大野醫師である。また例の與作こ權六は從僕ごして左七郎に抱へられ、岡山へ從いて行くことになつてゐる。藤樹によつて「學

問の根である心の純眞を喪つて、文字の枝葉た憧憬れたのは、土を穿つて虚空を求むるに等しい愚さである」と、心觸けられた左七郎が、飜然、本具の靈覺に甦へり、親許へ引返した時、藤樹の厚意から與作と權六の駕に送られたが、藤樹先生のお蔭で、改心したらしい二人の話に

ます〳〵自己の非を覺つたのみならず、殊に、與作は、三條の萬屋を去る時に、藤樹のこゝを話しながら嘆いてゐた彼の下女の悴であり、母なる彼の女を引取つて孝養を盡して居ると聞いては、自己の不孝を反省して、心窃かに泣かざるを得なかつた。江州から歸つた左七郎を見て一利は驚いた。これまで見られなかつた沈着こ優しさが見られたからである。感激の餘り左七郎を伴うて、一利自ら藤樹を訪うて共に入門を請ひ、藤樹の近くに移住したので、藤樹は左七郎の入門を許さゞるを得なかつた。斯くて左七郎は寛永十九年七月から孝經、大學、中庸の講義を聞いたが、翌二十年四月、桐原に歸らざるを得なかつた。一利は草深い田舍に此まゝ朽ち果てるのを悲しんで好き抱へ主もがなと、江戸へ行つて了つたからである。左七郎は妹こ共に、母に孝養を盡しながら、窮乏の底に獨學を續けてゐたが、正保元年、二十六歳の時、即ち歸省後二年、藤樹先生から陽明良知の學を授けられたので、淸水紙衣や木綿布子で寒氣に耐へ、百合粉雜炊に飢を凌ぎながら、專ら心法の鍛鍊に勵んだ。左七郎の出世の首途を送る此の席に列つた一利の目に嬉し涙の浮んだのも道理である。やがて左七郎は一利をはじめ、列席の藤樹門人を元政母子に紹介した。

「住所定めぬ雲水……再び地上で御目にかゝれないかも知れませぬ。皆樣には折角、御自愛下されますよう。世の爲め、道のため、只管御祈り申上げます」

元政の斯うした挨拶に、淸水季恪こいふ古參の一門人は、斜し目に左七郎を見遣りつゝ、

「御眞情溢るゝ御高義……肝に銘じて忘れ申さぬが、天性愚昧のわれ〳〵風情は、空しく草澤に腐ち果てなければなりませぬが、熊澤氏は天晴れ御大器！　王佐のオと申しても過褒ではございますまい」

と、皮肉つたが、左七郎は苦笑しつゝ、料紙を藤樹の前に差出して、

「某、岡山に罷越さば、何時又、殿に效に接し得られるやら……何卒御一筆御願ひ申し度く存じます」

ひたすらに揮毫を懇請つた。藤樹は辭することも能きなくなつて、

「原　謹以邇言餞熊澤氏行」

と題し、無師獨學の眞諦、二百五十餘言を錄して筆を擱くと、

明日はお立ちか
お名殘り惜しい
雨の十日も
降ればよい

シャンコ〳〵

斯うした馬子唄が聞えた。頭上を斜めに啼き交はしつゝ行く一連の雁が、蒼空に消え失せた
するゝ、霜氣を帶びて悠やかに、

舊年無幾日
何意上旗亭
送君凌宵器
羞我犬馬齡
梅花鬢邊白

楊柳眼中青
惆悵滄江上
西風教客醒

音吐朗々、溫顏春を含んで童子も懷く藤樹の口から漏れて出た。戸外には木枯が吹き荒んで湖岸の波のさゝやきも聞えるが、此座ばかりは嚴冬窮きて、春動くの感がある。

「意外の奇遇で思はぬ長坐……足弱も伴うて居りますれば、これにて失禮いしたます」

元政は左七郎はじめ、藤樹其の他に挨拶して母を扶けつゝ座を去つた。母子の辭退に耳をかさないで、見送つて來た左七郎は元政に囁いた。

「實は石井氏！　打明けて申すと、拙者が藤樹先生に入門致さんと、彼の三條の萬屋を立にうとした時「父母を棄てゝ、遠く遊ぶことは能きぬ」と、斷はれた貴殿を、優柔不斷のやうに思はぬでもなかつたが、それは拙者の心得違ひ……」

と、藤樹に入門を斷られた當時を物語つたが、やがて言葉を改めて、

「それに、貴殿が主君井伊直孝公に從つて江戸邸に居られた時、不圖した緣で懇仲ごなられた

吉原の高尾太夫こやらが、貴殿の爲めに、意に從はずして仙臺侯に殺された故、後世弔ひの爲めこあつて、御出家なされた風聞を耳にせぬでもなかつたが、世を儚まれての御遁世では ござるまいこ存じてゐた」

「なに、其說は石井常右衞門こか申す若侍のここでござらうが、同姓こは申しながら、某こ間違へられるのは、某が常右衞門に似通つた奇しき運命を荷うてゐるからの事。左七郎殿！お聞き下されい……實は同藩中の相思の女に先立たれて病に罹り、君公から御暇頂いて京都に靜養罷在つた某は、先年財布を失つたここも知らずに、寢入り込んだ當夜、夢に見た島原遊廓へ、友の誘ふに任せて足踏み致したが、不思議にも死んだ戀女こ同じ容貌の遊女がゐて其の女と戀に陷つたが、やがてその女も他界致せしこころから、宿業の深きに悸くこ共に、不孝の罪の恐ろしさから、孝子日蓮の芳躅を趁ひ、身延山に詣うで、法華三大部の體得を誓ひながら性來白痴者でござる故、今猶、俗緣に累はされ、思ひ切つたる出離もなし兼ねてゐる、我が身ながら淺猿しき凡夫でござるが、此の春、母に促されて相州鎌倉から房州小湊、清澄山こ經廻つて、此の程より比叡に罷在つたが、下山して坂本から大津まで舟に乘り花洛に出づる途すがら、圖らずお目にかゝりし次第……」

「いや母上を伴はれての御出家は貴殿にして初めて能るここで御座る。又、それでこそ釋迦が日本に新しく生まれたやうな心地が致す。藤樹先生が浮屠氏を攻擊されたのも、天竺の昔の事を其の儘、今の日本人に强ゆる點でござる。しかし法華經は浮屠氏の孝經こ承つては居りまするが、法華信者の貴殿には涙の詩人日蓮の俤が見える。それに藤樹先生に似ても居られる。身延山幽棲後の日蓮上人こ、小川村隱退後の藤樹先生が貴殿の上に、一つになられたのでござらう」

「御串戲にも程がござる。某如き人非人を兩上人に比せられる御貴殿こそ、英靈活躍の御元氣に饒ませられ、而も沈重温和な御風格には、そゞろに兩聖人が聯想されまする」

「滅相な、久しく膝下にあつて、日夕御慈誨を蒙つた拙者よりも、一日も御入門なさらぬ御貴殿の方が、却つて先生の眞意を繼いで居られる」

「何？　風雲を呼び起す龍智を深潭に潛めて居られる御貴殿は、人中の龍馬でござるが、某如きは、徒らに泥中に蠢く蚯蚓でござる」

「しかし、深夜、人知れず火中する斷翰には乾坤破壞の秘密も潛んで居らうが、人目に立つ書物ほご反口でござるからな」

「しかし一衣一笠の雲水、桂庵によつて程朱の心學が世に弘まつたこを思へば、劒道兵學の達

人たる貴殿によつて、陽明の良知、イヤ、藤樹生先の御精神が世に傳はるのが正統かこ存じます」

「なーに、某如きは問題ではござらぬ　藤樹先生も名目や形式に捉はれたら心は死ぬる。一切の文字は註解で本經は心であるから、註解の爲めに、本經を喪つてはならぬこ仰せられた。一切萬物は良知の顯れで、神、儒、佛、道悉く其の中にあるこも仰せられた。」

「如何にも、陽明先生が天理を存するこいひ、良知を致すこ申されたのも、心の垢を洗滌せよこの佛意に他ならんのでござらうが、たゞ佛は、美醜俱有へた人間本具の美しき感情に一切を攝め取らうとするし、一切は本來清淨の心直ちにこれ宇宙萬物たる陽明の心卽理でござらうが、知良致は禪の默坐澄心こ同じからずこ、陽明先生は、仙、佛を破斥せられたらしいが、それは當時の禪僧なるものが、自利他益の本分を忘れて獨善孤高……自利一方に墮落致したからでござらう。また獨り自ら高しこする心ほご、卑しき心はござらぬからな」

「所が藤樹先生は、此の前、斯ういつたが、あれは自分の誤りであつたこ、いつたやうに、門人に詫びてばかり居られる」

「それでこそ、舍身の求道者こ申すもの……一切の書物を、法華の序分、天地萬物を正宗分こして、實踐躬行の題目に、妙法を活かされた日蓮が、天台大師にも勝れた高僧であられるやうに、朱子や陽明が筆や口で述べられたここを、體讀せられてゐる藤樹先生は、朱子や陽明にも優つた聖者でおはさう」

「成程、朱子こても手足ばかりの師ではござるまいが、心の光明が消え失せ易く、陽明こても心ばかりの師ではござるまいが、手足の自由を失ひ易いこいはれて居るが、藤樹先生には、さうした非難は承はらぬ」

「それや無師獨學の先生は天を師こして居られるからでござらう。天に敵のあらうやうがない至公至平の精神……一言一行の悉くが良知の閃きで御座らうから……」

左七郎は言葉をつぎ、

「御承知の如く、陽明は明の權臣劉瑾を彈劾した爲めに、龍場に謫されたさうでござるが、藤樹先生は德川幕府の劉瑾こもいふべき林羅山を穿窬の盜こまで罵られたけれごも、何等の咎めも受けられなかつたからな」

「それと申すのも、間斷なく向上一の路を邁進され、今日は昨日の非を覺られ、夕に旦の罪を悔ひて居られるからでござらう」

元政との斯うした對話に、五歩また十歩こ元政母子に追隨して遠るを忘れてゐた已れを見出して、左七郎はこれはこ驚き、別ち難き袂を分つて紅葉館へ引き返した。

左七郎に分れた元政は、道を曲つた其の途端、馬子に追つ立てられて驅け來る馬に衝ツ突からうこした、其の途端

「おゝ！石井の旦那……」

馬子は頓狂聲を放つた。

「あゝ其方は權四郎殿！　貴殿に御無沙汰の御詫びもしたいのぢやが、何か火急な御用があられるやうぢやな」

「いや旦那！此間から御病氣中の藤樹先生の奥樣の御容態が急に惡くなつたものですから…」

「それで先生を迎へにござつたのか。某圖らず熊澤氏に邂逅して、先生にも今の先、御目にかゝつたが……」

「熊澤樣の送別會に御出席下さいましたか、實は彼の會へ先生首め、塾生や關係者を一人殘らず列席れるために、奥樣は病氣を態こ輕く見せられたらしいのでござえやす。恐ろしい親切な方でござえやすから……手前はそんなことこは知らなかつたが、何だか氣にかゝりやしたので……」

「御留守番をしてござらつしつたのぢやな……」

心の底に首肯いた老母が、權四郎に挨拶しかけるこ

原是太虛一團月

怒雷烟雨太無端

西風陣々雨霽後

原是太虛一團月

こいふ吟聲が聞えた。權四郎は叫んだ。

「おゝあの聲は先生のお聲だ……」

元政母子は馬子に引摺られて、我覺らず紅葉館へ引つかへして來たのであつた。

十六

春は高觀音の青葉隱れに啼く時鳥の聲こ共に老い、青嵐さはやかに渡る大津の街……紺屋ケ關なる表本陣には、飛ぶ鳥も落す池田新太郎少將お泊りこあつて、備前蝶の定紋うつたる幔幕

引き絞り、同心紋所の高張提灯凛々しく、烏毛の槍、挟箱其の他の伊達道具が整然こ立關前に飾られてある。湖上ゆたかに見渡さるゝ大廣間の上段には、折伏揃に紋服姿の大男、これこそ當年取つて四十歳の池田光政…悠やかに脇息に凭れ、社杼姿大髻の側役熊澤次郎八ー左七郎は去年、次郎八伯繼こ改名したのであるー對者に、漫談に興がられてゐる。風貌傀偉の光政の眼には、不氣味な聰明さが湛へられ、こつて三十オの眉目清秀の次郎八には、精悍の氣が漲つてゐる。此の二傑の左右に居流れた老臣池田大學はじめ十數名の重臣は、耳を澄まして聞いてゐる。旅館の廣間こいふよりも、學問所の態である。

「殿には平素の御寛濶にお似合ひ遊ばさず、お六ケ敷いではござりませぬか」

次郎八は揶揄ひ氣味で光政に耳語いた。

「なーに、予は何時も此の通りぢや」

「然らばお若い時代を素ッ破ぬきませうか」

「莫迦を申せ……」

「では、藤樹先生がござらつしやつた上のここに致しませう」

「仕方のない奴ぢや」

「此歌を一つ先生の御目にかけませう？」

斯ういつて次郎八が差出した扇子を披げて見ると、

「備前岡山新太郎さまの、江戸へござれば雨が降る。雨ぢやござらぬ十七八の戀の涙が雨となる」

岡山城下の流行唄……光政は笑つて捨てた。

「其の許の傍に居ると、嚴格しい伯父の傍にゐるやうな心地が致す。年齢こは反對に、心は予より遙かに長けて居る。藤樹先生から教はつた心法の鍛錬によるのぢやらう」

「しかし、眞に心法の鍛錬された人のみが本當の嬰兒ぢや。道を求める人は皆若いこ、先生は仰せられましたぞ」

「するこ、先生はお若く見えるだらうのう」

「しかし、彼の由井正雪のやうな、外貌の若さは可憐らしく存じまするが……」

次郎八は斯ういつてせゝら笑つた。

「然し、正雪は紀藩に抱へられたこかいふことぢやが、マサか事實ではあるまいのう」

「事實であつて事實で御座りますまい。虚が中に實を包み、實が中に虚を包むのが軍學でござ

いませうから……」

「だが次郎八！正雪を引つ繰り覆したのが誰ぢやつたかのう」

斯ういつて光政、次郎八の顔を瞥めた。次郎八、ハタと光政を見詰めながら、

「正雪を裏返せば正雪でござりませう」

「でも大智は大徳に接すると、古人も曰つて居るではないか」

「それは小智の者の申したこと。聖學は軍學を攝め取りまするが、軍學は聖學の一端に過ぎませぬ」

「實は次郎八！　先年江戸邸に於て、予に軍學を講じて立歸る正雪と、初めて廊下で摺れ違ひ其の人と爲りを覩て取り、近付けてはならぬと、予を警めた其方が、予の正雪招聘説に、一議なく同意した時、予は其方の上に、藤樹先生の精神を認めてゐるのぢや」

「斯く仰せられては赤面でござりまするが、私にして若し藤樹先生に師事しなかつたら、或は正雪の弟子となつたかも知れませぬ」

「なーに次郎八！　正雪にも勝つて謀判氣の多い其方なればこそ、藤樹先生に師事することが能きたのぢや」

「そりや無闇と辻斬りや、御手討に興がられて御座つた君公なればこそ、如何なる罪人の生命

をも、惜しませ給ふ仁君になられたのでござりませうから……」

藤樹の待ち遠しさをまぎらかさん爲めの二人の對話に聞き惚れて、一座が無宙になつた其の時、血氣盛りの若侍が、下座に畏まつて、

「只今、由井民部輔正雪推參致し御目通り願ひ居りまするが……」

と言上したので、一座は緊張した。

「噂をすれば影ぢや。如何致さう？」

光政は次郎八を顧みた。

「御接見相成つて然るべく存じまする」

次郎八は事もなげに應へたが、一座は次郎八の鋭く閃いた眼光に、一抹の暗雲を蒼空に見たかのやうな心地がしたらしい。軈て正雪は光政の前に姿を現はした。富士山下の今楠公、由井ケ濱の趙良を以つて自ら許す傲岸不屈の軍學家、黒繻子の上衣に同じく水色の襲ね衣、黒縮緬の十徳を羽織つた總髪の偉丈夫……恭しく拝伏して、隼の如き目を細めながら、徐に頭を擡げつゝ光政並に次郎八の眼相を見仰げた。低い冷たい底力の潜つた聲で、

「某、紀藩、頼宣公の招聘きに應じて、暫時滞在罷在つたが、所勞の爲め、攝州有馬へ入湯に

罷越し、江府へ歸る途次、君公御宿泊の由承り、久々にて御目通りお願ひ申した次第……」

「久しく會はなかつたが、相變らず軍學に熱心こ見えるな」

「いや、近來健康を損じ、軍學もそつちのけ、恥ぢ入つた次第でござる」

「然し、賴貴公は其許の指南で、餘程の軍學通になられたさうぢやのう」

「何、公は素から諸道に御堪能……軍學に於ても、某の及ぶところでは御座らぬ。然し、御德望高き殿には、居ながらにして天下を治めることこの能きる聖人の學問に御勵みの御樣子……某如き不德の輩は、聊かあやかりたいもので御座りまする」

「なーに論語讀みの論語知らずぢや。禍殃を未發に豫覺る天文に眼を輝かし、一指擧げなば千兵立所に動く軍學に精神を打籠んで居られる貴公の目には、嘸、穀潰しこ見えるであらう」

「それや殿の御目鏡違ひ、五斗米に膝を屈する軍學よりは、次郎八、與右衞門……イヤ孟子、孔子を生擒りにする聖人の學が賴もしうござりまする」

「正雪殿！　有馬は風流閑雅の地こ聞いて居たが、貴公はいろんな夢を見られたやうぢやな」

新ういつて光政が、ジーツこ正雪を見詰めた其の刹那、前こは異つた若侍が、汗たらく〳〵下手に平伏した。

「御意によりまして、中江與右衞門先生を、御迎へ申して參りました」

「それや大儀であつた。早速此室へ御案內致すやうに……」

「ハ、……」

若侍は表へ引き返したが、光政は、衣紋繕ひ、居住居を正した。程なく下手の襖が靜かに開かれて、閾越しに頭を下げた、洗ひ晒しの胴着を被た、デツプリ太つた色の黝い田舍漢……

「お招きによりまして、江州高島郡小川村の士民、中江與右衞門……御目通り致します」

靜かに光政に挨拶した。凡顏常貌、何の變哲もない百姓めいた四十男であるが、何こなく、おかし難い威嚴こ、いひ知れない、懷かしみの湛へられた其の風格は、一座の殺氣を和めるに餘りあるものであつた。

十七

光政は靜かに起つて下座に直り

「藤樹先生！　其處では御挨拶もいたし兼ねますれば、何卒こちらへ……」

慇懃に上座へ招じた。藤樹の下座に手を支へた次郎八

「先生！　遠路のところ、恐縮に堪へません。君公には先程から御待ち兼ね……何卒御席へ御着き下さりまするよう」

「はい、見る影もない百姓與右衞門、此室で結構でござりまする」

藤樹は動きさうにも思はれない。次郎八は語を繼いで、

「先般、書翰を以て、申上げました通り、君公には先生を道の師範と仰いで居られるのでござりますから、是非、彼席へ御進み下されまするよう……」

次郎八は更に迫つた。

「いや、君公の御下問を恥ぢ給はぬ御謙徳には此の與右衞門、ほと〳〵敬服いたして居りまするが、百姓でありながら、滿足に百姓も能きぬ、米喰ひ虫でござりますれば……」

斯ういつて藤樹は更に叩頭した。光政更に藤樹に接近いて、

「驚き入つたる先生の御謙徳……光政、懺汗に堪へ申さぬ。只今、次郎八の申し上げた通り、無識不徳の此の光政、親しく先生の御教訓に浴したく、先般、次郎八を以つて御來藩御指導の儀御願ひ申上げたる次第……此の度、江戸表へ罷り出づる道すがら、かた〳〵御目にかゝり、是非御承諾を得たく心得、御招き申した次第でござる」

眞情溢るゝ、熱切なる挨拶に藤樹は感激した。

「御見掛け通りの半農半商の野人に、何を仰せられまする……」

「いや、先生から次郎八へ賜つた御懇篤なる御慈誨、並びに儒道に關する御高著等をも拜見いたし、某、敬嘆の餘り、心は飛んで先生の座右に罷り在るのでござる。是非御來藩御指導のほど、ひたすら御願ひ申す」

斯くご聞いた藤樹は、何故か強か恐縮して

「あんな書物が御目にとまりましてござりまするか、格法に泥んで自らを縛り、内省を欠いで中庸を失つたこゝばかりを述べまして恥入つた次第でござります」

顏を赧めて詫び入つた藤樹の態度に、光政は我覺らず頭を下げた。

「いや、日々新なる先生の光明に心の闇が破られまする、何卒特別の御思召を以つて、光政が願意、扞げて御聞屆け下さりまするよう」

五體を投げんばかりに光政は懇請した。

「無學にして愚鈍なる私を、斯程までに仰せ下さる段、實以つて感謝の言葉もござりませぬが何分、病身でござりまするし、殊に奉公中でござりますれば……」

「はて、先生が時々宿痾に惱んで居られることは、次郎八より承知して居りまするが、御奉公なされたことは、今が初耳……大溝侯が先生に道を問はれたこの風聞は耳に致してゐたなれど……」

「はい、私は大溝城下の百姓でございまするが、私の抱へ主は、然うした御歷々ではございませぬ。私、少年の頃から久しく大洲藩に御奉公致して居りましたが、お暇を頂きまする時、他藩に仕へるようなれば、必ず舊主の許に立歸る旨誓ひ置きある故、よし再び御奉公いたすことしても、他藩にお仕へ申す譯には參りませぬ」

「するこ、先生の抱へ主こ申さるゝのは？」

「他でもございませぬ、私の抱へ主は私を生み且つ育てゝ、呉れました實母市子でございます。私は母一人、子一人の身の上でございまするし、不孝の萬分の一でも償ひたく存じまして……」

「いや、先生が母御のために、加藤侯から然理暇こつて御歸郷なされたことは、疾くの昔に承はつて居りまするが人心墮落頽廢して、爲政者は政治に倦み、盜賊天下に横行なし、而も、國家を覆さんこ、亂なからしむる爲めの軍學を、亂を起す手段に用ひ、第二、第三の天草騷動を惹起さうと陰謀を企み居りまするに於ては、日の本六十餘州は何時、火の海、血の海に變ずるやも

測り知れざる今日、それを未然に救ひ給ふ救ひ主は先生の外にあらうやうに思はれませぬ。又先生の仰せられる至仁大孝も、萬民救濟の外になからうやうに存じまするが……」

「御意御道理でございまするが、世界は人おのゝの作るところ、否、己が心の眞姿では御座りますまいか。世界が危なかしく見えまするのは、我が心が危なかしいからで御座りませう。禍を未然に防がうなどいふ心こそ、平地に波をおこす危ない心でございますまいか。心に砦を築いてゐては、如何なる金城鐵壁も役には立ちますまい。自分勝手に作つたもの程、他を害ふ物はございませぬ。作つたものがございらぬから、世界は總てのもの、爲めになり、何時までも亡びないので御座りませう。そして何時も太平でございませう。萬古、千古、煙は昇り、水は流れまするのに、君公にはそれを何うしやうとせられまするか！」

「先生の御言葉ではございまするが、人に病氣がございまするやうに、國にも患ひがありまする。それに病人をお醫しになることを、お樂みとされて御座る先生には、國の病氣を御醫しになることが、お樂みの最も大いなるものではございませぬか」

「そりや君公の御聞き違ひ……私、未だ病人を治さうなごと思つたこさすらございませぬ。又、我々人間の力で病氣が癒し得られやうとは思はれませぬ」

藤樹の此の言葉に次郎八は嘆をいれた。

「何、先生が多くの病人を療された事實は、私、實見して能く存じて居りまする」

「そりや次郎八殿！道端の枯草にも、天地を動かす力が潜んで見えまするのは、視る人の心に天が映るのでござりまする。かりに、私が病氣を癒したやうに見られる御方が御座らつしやつたとしても、それは其の方の素直な御心情に天が宿つたのでございまして、私の力は毫末も加はつては居りませぬ。それに私が癒したやうに、他からいはれますと、迂つ濶り手を出して、癒る筈の病氣を癒らぬやうに致しましたことが、ごれだけあつたか分りませぬ。何ごもはや申譯のないとでござりまする」

斯ういつて藤樹は、顔色を蒼ざめた。座中は、墓場のやうになつた。少時あつて、藤樹は言葉をつぎ、

「人の病を醫し得るこ思ふ心が、醫る病氣を醫らなくするやうに、國を治めやうこする心ほご國を亂す心はなからうように存じます。苦しさうに見ねまする御百姓達には、得もいはれぬ微笑が見られまするのに、強さうに思はれる方々ほご、落着きの見られないのも不思議では御座りませぬ。白晝大道を往かれるのに、大刀を手挟み、槍を樹て、種ケ島を引つ擔いで幾百幾千

の警護も要る道理……」

「な、な、何ご！」

光政の眼は閃つた。物凄いほごの沈默に、息もつまるばかりの靜寂が一座を領した。

藤樹は悠然こ、

「恐るべきを恐れぬ心は、恐るべからざるを恐れます」

光政は何ごもいはぬ。

「天を恐れざれば、枯草も鉾に見ねませう、脛一本で大地に立ち、天を對者にしてござるお百姓達に土下座をさせる方々の危なかしさは目があてられませぬ」

水を打てるが如き寂けさの底に、大活氣は充ち滿ちた。

「君公にして眞に天下の平安を願はるゝなれば、民の膏血の凝塊たる城壘を毀し、領地をすて、大安心なる彼の土に親まれねばならぬ筈……大地に仕へるこごは母に仕へるこご、いや一切の母である天につかへる心でござります。吾こ我が身を縛る心の城さへお取拂ひなさるれば江戸城はじめ、總ての城は要らなくなりまする。君公の仰せられる城を毀さうこする野盜の群も消滅せずには居れますまい」

一座は深潭の底に落ちたかの如う。やゝあつて、光政は手をつかへて、

「御高教忝けなく存ずる。私は先生の上に、天の姿……靈なる父の俤を拜しました」

と、稽首した。藤樹は恐縮しつゝ、

「明月は泥にも寶玉を描きまする。淺猿しき對者に、光明を御認めなさいました君公の心の月に照らされる世間は幸福でござります。強い者は弱い者を虐げ、弱い者は強い者を呪ひまするが、彼れと此れとは一體でござりまする。凡ては天の姿で誰しも天を宿してゐます。先祖も子孫も、わが懷中に住んでゐます。人ばかりではござりませぬか。一草一木、悉く皆わが腦裡に居るではござりませぬか。人は天の魂でござりませうから……限りなき希望の光明……慕はしき密喘は、枯蘆からも流れ出で、河原のせゝらぎも、眩ゆき光の翼をひろげて、平和の響を傳へまする」

沈着いた態度、物靜かな口調で語り來つた藤樹の斯うした言に、光政首め、次郎八並に一家中が、暗黑中に一點光を見出したやうな顏相をして、一齊に藤樹を見詰めた其の途端、先程からうち〳〵なだれて眠れるもの、如くであつた正雪も、覺えず頭を擡げて、斜し目に藤樹を見遣つた。光政は頭を下げ、

「御懇切なる御教訓、肝に銘じて忘れ申さぬ。出立の都合もござる故、歸藩の砌、更に御教訓に預りたく存じます」

やがて用意の膳部が配された。式の如く酒杯が廻り初めんこする。藤樹はあはたゞしく、

「御出立のお邪魔いたし、無禮なことを申上げ、何とも早や恐縮に堪へません。抱へ主……イヤ、母も待ち兼ねて居りませうほゞに、これにてお暇いたしまする」

斯ういつて、うや〳〵しく作禮した藤樹は、更に光政を見仰げて、

「然し、江戸表へ御越し遊ばすやうならば、京都におはす御門の許に、お伺ひなされたここでござりませうな」

嚴かに言上した。

「何、京都の御門……」

斯ういつたきり、光政は息をまつた。それこそ見て取つた正雪、何故かニヤリと顏に、云ひ知れない冷たい波を湛へた。するこ藤樹は一座を見渡して、

「いや、お互に自反内省の都に君臨ます良知の御門に、忠勤を勵みたいものでござります る」

此辭を最後に座を起ちかけると、次郎八は一葉の短册を差出した。

「みな人のまゐる社に神もなし、心の底に神ぞましまします」

藤樹は取敢へず、

「皆人のまゐる社は月なれや、心のすまば神や宿らん」

こ返歌して立ち去つた。

十八

小川村の藤樹の家は人で埋もつた。備前岡山の藩主、新太郎少將からの迎へ駕で、昨日大津へ行かれた藤樹先生が、夜に入つても歸られないところから、門人や村人が氣遣つて續々詰めかけて來たからである。藤樹が光政のために、岡山に伴れ歸られたこの噂がひろまつたからだ。斯くて門人間の大問題こなつて論爭將に酣ならんこす。

「全體彼の熊澤次郎八は、新太郎少將の間者だつたのだ」

「成る程それで先生があれほご入門を斷らしやつても、入口に平太り込んで動かなかつたのだね」

「禪家では三日の庭寢といふここをやるが、それは形式だけぢや。それを眞心劍にやつてのけた次郎八は、君命を受けて、先生を生擒りにうせやがつたのだよ」

「ナーニあれや、昔陽明先生が禪坊主を諭されたやうなものさ」

「さうだね。彼の西湖の虎跑寺で、靜座三年、一言もいはず、一物も見ないこいふ禪僧に「お前は何故、そんなに喋舌り倒すのか、そんなに眼をギロツかして何を見てゐるのか」こ、陽明先生が聞かれた。するこ、其の禪僧は、驚いて起き上り「自分は、言はず見ずして三年送つて來たのだ」こ來たので、「君には親身のものはないのか」こ、陽明はいはれた。「いや老母があるけれごも、生きてゐるか怎うか分らぬ」こ、禪僧は應つた。「老母を思ふ心は、起らぬか」こ陽明は問ふた。「起こすまいこする程起る」こいふ。「ぢや、口に言はずこも心に語つてゐるのぢやないか。目にこそ見ないでゐても、初ツ中母を胸に描いてゐるのぢやないか」と諭されたこいふのこ似てゐるね。勿論、それこ此れこは性質は異つてゐるが技、に引つかゝつた心を根に戻してやられた點は一つだな」

「いや、自分もさういふ風に思つてゐたんだが、ごうやらさうでもなさゝうだぜ」

「だが次郎八は、さう惡い男こは思はれんぢやないか」

「君は善人だよ。彼奴は由井正雪のやうな奴でさへ、恐がつて、初ツ中樣子を探つてゐるこいふことだよ」

「それや、次郎八は正雪に羨をかけたやうな男だつたのだが、先生に弟子入りした御蔭ですつかり變つちやつたのだ」

「そらごうだかね。すべて惡人といふものは却つて善人に見えるからな。本當の惡人は、本當の善人に、己れに代つて惡事をなさしめながら、對者も己れも覺らずに終るぢやねえか」

「それに、新太郎少將は、德川幕府の懷中刀だし、次郎八は岡山藩の懷中刀だからな」

「所が、藤樹先生は我々共の生神樣ぢや」

「だから、大名なんかに奪られちやつたら、大變ぢやねえか」

「しかし、光政の父信輝は紀伊守恒利の子で織田信長に仕へ、星崎城を攻めて功を奏し、犬山城主となつた。天正七年攝津國を信輝父子に信長は與へた、十年六月信輝髪を切つて勝入と號つてゐたが秀吉をたすけて明智光秀を山崎に破つた。十一年秀吉は大垣を勝入に與へて美濃に居らしめた。翌年、織田信雄は秀吉の勢力を妬み、家康と相謀つて滅ぼしにかゝつた時、勝入は秀吉に戻つて小坂合戰の急先鋒となつた。秀吉が大坂を發しようとした時、火術に長けてる

た紀州の雜賀衆や根來勢が家康、信雄にそゝのかされて、大坂へ攻めに來た爲に出立がおくれて、六百有餘萬石の力を有ちながら、其の半分にも足らない、家康、信雄の聯合を破ることの出來ぬのを、もどかしがつて、信輝は二萬の大兵を提げ手薄であつた家康の本國三河を突擊したのだが、それと聞いた家康は、主力を勝入の背後に向けた爲めに勝入は大敗して長湫で長子之通と共に討死した。それは秀吉が敵軍を牽制し得なかつたからだ。家康あるも天下は自分の手に落つるので、要らざる犧牲を拂ふことを惜んだからだ。　しかし、秀吉の犧牲になつた信輝は生薑畑へ馬を乘り入れた爲め、敵に殺されたので、光政は生薑を食はぬこいふこゝぢや」

「もしも其の時、信輝が勝つてゐたなら、秀吉の天下は德川氏よりも池田氏のものになつたかも知れないね」

「まさかさうも行くまいが、信輝の次男たる三左衛門輝政は關白秀吉が佐々成政を征した時、從軍し、天正十五年秀吉に從つて薩摩征伐に赴いた。輝政は中川清秀の娘を妻こしたが、長男利隆を產んで死んだので秀吉は家康の二女を彼れに嫁はした。兎に角、播磨、備前、淡路の三國を領して百萬石の大藩主であつたのに、その孫の光政は、三ツ一にも足らぬ三十一萬五千二百石の小藩にされてゐるぢやないか」

「それに、酒井忠勝が亡くなつたから、今後は保科正之の天下だらうぜ。正之は大猷院と腹異ひ兄弟であるし、光政とソリが合ひさうに思はれないよ」

「しかし、光政は天下の副將軍たる水戸侯と仲好ひらしい」

「水戸といへば次郎八の外祖父の守久の主君だから光圀と光政の間には、藤樹先生の御考へが實行されるかも知れないぞ」

「藤樹先生の御考へとは？」

「將軍が政治を朝廷に還し、諸大名が領土を百姓に還すことだ」

「しかし、それを喰ひ止めるのは會津だらうよ」

「しかし、　此の二つの勢力は結局、百姓と大名の果し合ひを招くのだ。　それといふのも以前の大名は領地を自分のものとは思つてゐなかつた。事がなければ亂を防ぐ爲に用ひたものだ。ソレを我が物顏に、一家一門の豪奢に濫用してゐるのが今の大小名ではないか。江戸城はじめ大名屋敷は、百姓の膏血の凝塊だ。幕府に媚る爲めと、自己の虛榮を滿足させんが爲めのものだからねと、先生はいつて居られたよ」

「だから、光政はさうした地獄道の淺ましさに、戰慄して、先生に縋りに來たのだぜ」

「なーに、そりや大變な買被りだよ。彼の人が五つの時、家康に謁つたが、家康は女婿の孫ぢやから、可愛がつて頭を撫で、そなたも成人したら輝政のやうになれ！と刀を與つた。するとすぐ引き拔いてこれは本當に切れるのかといふので、家康は吃驚した態度をして、これは恐ろしいものぢやと、自分で鞘にをさめ、前途恐るべき人物ぢやと、後で側役に語つたといふことぢや」

「しかし、少將なんていふことすら嫌ひで、參覲交代の關札にも、松平新太郎と記してたゞの一度だつて、少將と書いたことはないさうだ。鍛工ですら、何の守とか、鏡磨すら某の大椽とか、いつてゐるぢやないかといつてね」

「だがね。江戸に一寸したことがあると、閉門の家來に留守居をさせてまで、一家中を提げて入府するのに徵ても、德川の懷刀たることが窺るであらう」

「さうだ！　島原亂の鎭定も、直接出征した連中よりも、往かなかつた彼の人の隱れた力が與つて多きに居るといふことだ」

「ぢや島原亂の時、鍋島の隊に加つて戰功のあつた野尻一利の子、熊澤次郎八を引きたてるのは當然だね」

「そればかりぢやねね。大坂七本槍の草賀五郎右衛門、若松市郎兵衛、齋藤加右衛門を召出して二千石宛で抱へるは愚か、山脇某といふ大坂陣の戰功者や、やはり島原亂の時、手柄のあつた吉井藤内、櫻井孫三郎等を召出して、優遇してゐるよ」

「それに藤内は鐵砲の名人ぢや」

「岡田甚五兵衛、今村利右衛門、森脇三右衛門等いふ武藝者から、強弓一寸三分を射るといふ三右衛門の子、右衛佐や、荻野六兵衛、鄕司七右衛門、梶田彦八郎なごいふ種ケ島の上手な奴道地權之丞、中村多兵衛なごといふ弓術の達人、佐分利猪之助、坂口甚左衛門なごいふ槍術家戸田權左衛門ごいふ劍術家、市森彦三郎、谷田勘兵衛、寒川源左衛門なごいふ馬術家、上原治郎左衛門、山田道悅、室田甚之丞なごいふ軍學者を抱へたに徵ても、彼れの人と爲りが窺はれるぢやないか」

「それで藤樹先生をつれて歸つて飾にするのだよ」

「所が藤樹先生はすべてを天へ返されてゐられる人ぢやないか」

「それに藤樹先生のお祖父さんの德左衛門樣(吉長)の主人、加藤貞泰の父光泰は、美濃の人で初め齋藤龍興に仕へてゐたが、後、秀吉に從つて、この邊で七百石を與へられたが、幾度かの

戰爭に功を樹てたので、家康に關州八を與へた秀吉は、其の壓へとして、蒲生氏鄕を奧羽に、彼を甲州に封じて二十四萬石を與へたが、石田三成が憎んで朝鮮へやつて、毒殺したとかいふことだ。そして子の貞恭は美濃黑野に移され、四萬石に減された。それに、貞恭は、三成が父の仇であるから、關ケ原の時、東軍に屬して戰功を立てたけれど、家康から一石の加增もなかつた。如何に賴みなき世とはいひながら、餘りに賴みなさ過ぎる武家生活がいやになつて、德左衛門さんは此の村の百姓にならしやつたが、主君が黑野から米子へ移される時、召出されて從いて行かしやつたけれど、子の德右衛門さん……左樣！　藤樹先生のお父さんは此地の百姓で終らしやつた。藤樹先生が武家をやめさつしやつたのには、いろ〳〵原因のあることだよ」

「それに次郎八の養父熊澤守久は福島正則の家來で、正則が元和元年、安藝、備後二國四十九萬八千二百石を削られてから、寬永元年川中島の配所で卒するまで一六十四歲一從いてゐたさうだね」

「そればかりぢやない、次郎八の實父、野尻一利は島原亂に出征して鐵砲疵をうけたのだが、所屬の鍋島からも、德川からも、何等の恩賞もなかつた。その子の次郎八が、そんなに德川の爲めになるだらうかね」

「道理で、彼れは切りこ公卿に接近いて、武士を莫迦にしたやうなことをいつてゐるさうだ」

「ぢや、次郎八はひよつこするこ、福島正則のやうに、晩年は慘目なものかも知れないぞ」

口角火を吐いて門人がかういつた其の時

「それでこそ、先生のお弟子なんだよ。家柄を笠に着て弱い者をいじめてゐる奴等は、さうした人のために殺されて、時世の夜が明けるのだ」

突然、かういつた沙門がある。

「おゝ、馬方上人！」

門人達は叫んだ。何時の程に遣つて來たものか、此の馬方上人こそ、馬子權四郎の後身である。妻は娘のお光は了佐に嫁し、悴の權六は次郎八に仕へた後、病死し、吾が身は愚か、長男娘が一方ならぬ恩顧を蒙つた藤樹の妻のお久が死んだので、藤樹の許しを受けて、彼の元政の弟子こなつて伏見の深草に住んでゐるのである。馬方上人はいつた。

「君達は先生に十年からもついてゐながら、餘りに先生がわからなさ過ぎる。考へても見るが可い。漸つこ德川幕府が出來たばかりで、まだ鮮い風が止まない時に、兩刀を棄てゝ、百姓にならしやつた先生ぢやないか」

「なーに、わかつて居るよ。師を知る者、弟子に如かずだ」

「先生がわかつてゐたら、總てを天に返して居られる天の物を私してゐる連中の仲間入りを、爲さるか爲さらぬかを問題にする道理が無いぢやないか。莫迦な……」

馬方上人が一喝した、その途端、俄然、潮のやうな聲がした。大狂喜大跳躍の響である。德川の大黑柱を蹴倒して、たゞ獨り、トボ〳〵歸る村民門下の大極柱……否、あらゆる人間の生命の柱たる先生の姿が見えたからだ。天地は急に花やいだ。今を盛りこ咲き盛る紫藤花の下に簇がつて一同は踊り狂つた。大皷を叩き、篝を焚いて……

明け急ぐ空なる星の一つかな

我觀大無量壽經

爲身教人身と自他覺圓滿

佛教は讃嘆に始まつて讃嘆に終る。たゞ讃嘆……それが直ちに濟度であり、念佛であるからだ。母子一體の聲でなくて何であらう。茫々たる天地間、母一人、子一人の人生ではないか。過去の失望に未來の希望を掻き消され、恐怖と悲哀の現在に、怎うして母を呼ばずに居られよう。十方諸佛の讃嘆は、天に、地に、外に、內に、母を呼ぶ一切衆生の叫びであると共に、久遠の母なる彌陀の召還ではないか。二百一十億の佛土卽彌陀淨土であり、八萬四千の法門は直ちに大經—大無量壽經—たるは論ふまでもない。「眞宗とは大無量壽經是也」と叫んだ古賢の心も偲ばれる。大經の身讀者たる親鸞は、觀經—觀無量壽經—の色讀者たる法然の、眞弟子たるこゝを見遁してはならぬ。信長の破壞した佛教を庇護し、庇護した伴天連を破壞した秀吉によつて、信長の志が繼がれたやうに、時代の變遷と人心の推移が、師を殺さなければ師を浩かし得なくするからだ。變々々の相にこそ、永劫不變の生命は藏まれる。無常を外にして何處に如來の常住があり得よう。人生の背景たる時代を無視して、個人の眞相は見られない。僧から俗へ出家して、專ら法然を祖述した親鸞の態度は取りも直さず山から鄕へ遁世して、編

に善導に依つた法然の態度ではないか。邊鄙から邊鄙へと彷徨ひつゝ、欲せずして田婦野人を感化した親鸞の信心爲本は、其の儘にして、首都に隱棲しつゝ、公卿武家を接化した法然の名號爲本たるは勿論である。たゞ血みどろの平安末期が、前者をして大乘中の淨土を一名號に約めしめ、希望の黎明斯たる鎌倉初頭が、後者をして大經中の大乘を一心に疊み込ましめたまでゞある。法然の爲身教人身は、親鸞の自他竟圓滿たることは論ふまでもない。

眞實と方便

齊しく慈悲の權化たる彌陀の眞實在なること及び罪業の救濟を證する、謂はゞ「淨土建立の妙行」並に「凡夫成佛の秘訣」であるが、大經が彌陀淨土の因果、卽ち法藏比丘の本願こと、修行と、成道を說くことに由つて、凡夫往生を證するに反し、觀經は凡夫往生の方法を述ぶることに由つて、淨土の諸功德を會得させる。乃ち甲は五十一の階段を一々に昇つて行つて頂上の四十八院——四十八願——を一々に經廻り、漸つゝ根本中堂——十八願——に辿りつく高峰であるから、其の參拜は容易でないが、乙は山麓の如人堂ともいふべきものだ。西方十萬億土を隔てた彌陀の淨土を、眼の前に觀せて呉れる。無論、それは眞物でない。眞物でないが、眞

物を見るの手引である。卽ち方便假門といはれてゐる觀經は、眞實の敎といはれた大經中に根を据ゑて枝葉を外に擴げ、方便卽眞實たることを證する。瓣は花の方便であり、闇黑は光明の方便であるからだ。法藏比丘が佛たらんこと勵んだのも、衆生濟度の方便ではないか。大經の說主たる釋迦が、普賢の行を持つた己と同等の人達を選んで、それに語つたのも、上智をして、無上大願を成就せしめ、下愚をして菩提心を生さしめんがための方便でなくて何であらう所謂、理性と事象の無礙融卽を語る華嚴の妙理を、人格化して凡佛一體たらしめたに他ならない。

要するに、彌陀本願なるものは、人間慾望の究意地、生活の至聖處であつて、それがそのまゝ往生であり、救濟であり、又、因果でもあるが、之を理智的に說き、意志的に顯示した大經が宇宙の根本力なら、之を感情的に述べ、想念的に描寫した觀經は、神秘直覺の詩であつて、大經が彌陀の自叙傳なら、觀經は凡夫の懺悔錄であらうけれど、孰れも佛智見に依る善巧方便たるに異りはない。たゞ前者が女人凡夫の谷に下り、後者が菩薩、摩訶薩の峯に登るのも、一切を俱會一處の上善人たらしめんが爲である。

しかし、瞬刻限の弛緩もなく、無限に自他の向上を齎す道は、彌陀に打任せる外にないこと

を覺らないで、已が力で實現しようこ努力することは、全地の土の惠まれてゐるここに心觸かないで、一握の砂を摑まうこして虛空を捜し索むるに勝つた。小さき利己心の變形たる悲慘なる愚行であつたこ覺らしむる、所謂自力聖道者の救はれる大經なればこそ、凡道無力の愚者達が容易く救はれる仔細を容易く會得させるのは觀經であらねばならぬ。

善導が貴族的、學究的淨土教を、大衆化し體驗化し得たのも「佛敎の眞髓たゞ此の一經に在り」こ、偏に大經を尊びながら其の實、觀經によつたからである。韋提華夫人が、顯生心を生したのを見た、釋迦の「卽便微笑」も、觀經の所說ではないか。

此處さで書いて來たこき、ドツこ大勢の笑ひ動搖く聲が聞ゑた。俄に起つた一陣の木枯に吹き捲くられた樹木の音であるが、萬軍の胡蝶のやうに、散り亂れる銀杏葉の一つが室內に躍り込んだ。

支那こ大無量壽經

銀杏樹は最古の植物であるさうなが、圖體の大きい割に極めて脆弱い。何樣太い枝でも容易く折れる。黃土の古國たる大陸支那その物の象徵ではないか。樹木の多くは一樹のうちに、

雌雄を包含してゐるが、銀杏樹は雌樹こ雄樹に分れて、雌雄二樹そろはなければ結實しない。謂はゞ他の國は國家であるが、此の樹は個人である。彼樹は國家なるが故に男女を包み、此樹は個人なるが故に、男女に分れてゐるのではないか。支那が南こ北に分れて年鬪年中、相搏ち相鬪ふここによりて、存在が保たれてゐるのも、銀杏樹が雌雄相分れて、種族を保存するのこ同じである。

若しも紅葉を自然の描く赤軸なりこすれば、銀杏は其の黃卷であらねばならぬ。そして此の黃卷を「大經」こ見るならば、彼の赤軸は「觀經」こ見なければならぬ。而も此の黃卷こ彼の赤軸は、支那こ印度の象徵こも受取れる。二經の讃美歌たる小經—阿彌陀經—が、日本の象徵たるは論ふまでもない。

兎に角、西方淨土の思想は、印度の自然觀こ、支那の人生觀の合金たる亞細亞思想の頂點であらねばならぬ。然るにも拘らず、山麓江畔の光明たる亞細亞文化を鼻緒の斷れた尻切草履のやうに一蹴し、自己の足を削りて太西洋文化の靴を穿てる日本に眞似た譯でもあるまいが、支那現下の新思想家なるものは、地上の文化たる科學こ共に、澎湃こして襲ひ來つた歐洲文明に心醉し、泰西人の思想に傾倒するの餘り、嘗ては傳統的なる自國のそれを、孔子の木像こ共

に糞土に投じたが、西に春き初めた近代文明の太陽に、自己が脚下を反照されて、今更のやうに、自國の文化に驚異の眼光を注ぎつゝある。「資本論」に破壊された頭腦を老、莊に醫すマルキストもあれば、「戰爭と平和」に讀み疲れた眼を、李、杜に和められるトルストイアンもあるが、漢譯大藏の如きは、彼等をして宛ら百年海に漂ひし盲龜の浮木に息づくやうな欣びを覺ねしめてゐる。

道安、慧遠、法顯、曇鸞、智顗、惠可、玄奘、道綽、善導、が新しく生れ出て、新しき六朝新しき唐朝の出現は、遠き未來ではなからうやうに思はれる。

僧鎧と親鸞

それに、十二譯あつたといふ漢譯大藏中、我が國に用ひられつゝあるのは、五存の第三、康僧鎧譯であるが、此譯でも流支譯でも梵本に勝つてゐるといふことだ。無論、それは「易」や「老子」その他の支那思想「毛詩」「楚辭」などの詩趣が含まれてゐるからであつて、梵本にない悲化段卽ち佛、彌勒に現世の地獄を極樂化する所謂五善五惡を說く條が攙入された爲めに、夢幻的表現が現實化したといふやうな、そんな愚劣な意味でないことは、梵本から直譯された

大經を見ても分ることだ。尤も此の條は他の經の混交であるとしても、彌勒信仰の熾んな當時にあつては必要であつたばかりでなく、現在に於て未來を希ふことの必要なることく、未來を現在に生くる上に於て必要であるが、法華や磐若經でも、梵文から譯したのは、漢譯に比べると、甚だ素つ氣ない感じがする。森嚴味に貧しいばかりでなく、滋味にも缺けてゐる。それは古來支那思想に薰化されて來た日本人たる我々が見るからでもあらうけれど、佛典に限らず戲曲などでも漢譯に比べると、何となく、乾燥びて物足りない。元來印度の戲曲の多くは、或る哲學的思想の宣傳めいて、ギゴチない所がある。けれごも、支那人のものは、よしやそれが主義主張を述べる爲めに著かれたものであつても、詩的情緒に豐である。而も前者が冗長を得意とせるに反し、後者は簡潔に長けてゐる。隨つて中庸の三千五百六十字で、數十萬字の大般若に優り得ないものでもなく、支那思想と印度思想の對立は、五萬二千八百四字の學庸論孟と八萬四千の法門との對立とも觀られるではないか。

要するに、漢譯大藏が梵本に勝るといふことは、支那文化の印度のそれに、劣つたものでない證左であらねばならぬ。

印度の夢と支那の現

尤も印度の冗長は白晝の夢であり、支那の簡潔は深夜の囈語であつて、前者は人を此の世の外の世界に導き入れるが、後者は、人を此の世に踏ん縛る。而も八萬四千の法門の悉くがお〳〵八萬四千の法門を具備し、數百萬字の般若部も、二百六十字の心經に疊み込み、否、空の一字に約めてゐる。簡潔に複雜を攝め、佛陀の一代を述ぶるここによつて、佛教こ印度哲學を比較した阿濕縛斐沙の如き、宗教的天才詩人も飛び出せば、難解なる大經を、最も簡明に極めて切實に歌ひ解きつした、世親のやうな省筆家も飛び出した。しかし此の世親の「淨土論」は曇鸞の註がなかつたら、日本に弘布しなかつたかも知れぬ。

それに驚くべきここは、僧鎧譯の大經ほど、漢文としての至文も尠い。莊嚴高顯、微妙幽玄而も其の詩的情緒の饒な點に於て、多くその比を見ざるものである。見よ！「光顏巍々、威神無極」に優りて、彌陀に直謁せしむる文字やある。「我建超世願、必至無上道、斯願不滿足誓不成正覺」に取つて代る徹骨徹腸誓言やある。「十方衆生、至心信樂、欲生我國、乃至十念若不生者、不取正覺」あ、何ごした簡淨にして而も深遠なる言文であらう。「乃往過去、久遠無量、不可思議、無央數劫、錠光如來、興出於世、教化度脫、無量衆生、皆令得道、乃至滅度、次有如來次名日光遠、次者月光、次名栴檀香、次り誦し來る時んば、相肯て相異なつた金光赫奕たる諸佛如來が、センダリ〳〵大地から湧出で湧出で、嘹喨たる天樂に途られ、鬚鬘たる紫雲にのつて、次第々々に天上へこ昇つて行く……斯くの如き微妙の響……清淨無垢の感覺を起させる文々字々が他にあらうか。

「……如此諸佛、皆悉已過」こ誦し終つて、「爾時有佛、名世自在王……」に接した刹那、無碍の光明に心の混沌は破られる。

法華の身讀者日蓮に、法華漢譯者の隨一人、鳩摩羅什の面影を偲ぶ自分は、西紀二百五十二年——曹魏嘉永四年壬申——洛陽白馬寺に於て大經のみを譯して世を去つた印度の沙門僧鎧が、親鸞こ名を改へて日本に生まれ出たかに思はれてならぬ。

支那こ佛教

全體、日本に佛教が瀰蔓したのは、支那を透過したからである。同じく悠長な性格の所有主であつても、印度は深林であり、支那は曠原である。支那に似て狹少であり、印度に似て貧弱

なる我が國は嘗ては支印兩國文化の精錬所であつた。古事記の「神」は、何れも「命」であるが、舊事記のそれは「尊」である。前者は「天命」を宗とする儒者の筆になり、後者は「釋尊」を中心とする佛徒の手になつたからだ。此の兩書を打つて一卷とした書紀は「命」と「尊」を主從に當て欵めた。それが日本の國經ではないか。佛教の精神を以て人心の混亂を一洗された厩戸皇子は儒道の實踐者であられたし、儒道の精神に則つて社會の宿弊を一掃せられた天智天皇は、佛教の體達者におはしました。漢魏六朝から唐、宋の文化は僧侶によつて我が國に傳はつた。しかし、佛教の渡來前後から印度僧も來ぬではなかつたが、支那僧はごれだけ來たか判らない。而も印度僧は支那化したそれであり、支那のそれは亡命客が主であつたが、日本から印度に入り得た僧は一人もなかつた。眞如親王は天山南路で虎害に遭はれ、榮西禪師は支那政府に沮止されて思ひ止まり、明惠上人は幾度か渡天を思ひ立たれたが、信徒や門下に引き止められて遂に目的を遂げ得なかつた。所が、佛教輸入のために、我が國から支那に渡つた僧侶は、維新後の渡歐者ほどあつた。隨つて鎌倉以前の佛教は、全然支那の模倣ごいつても可いほど、支那臭を帶びて居た。日本に於ける淨土宗の開祖法然は只管善導に違はんことを恐れたし、曹洞宗の開基道元も如淨の垂示に背かなかつたやうである。

又、風水害の徹底境たる江畔黃土の大陸民だけで、支那人の自然に對する服從は、實に絕對のものであるが、此の自然に對する絕對服從が、彼等を驅つて天成の他力教徒たらしめた。日本はそれを青山白水化したまでのものである　忽ち起り忽ち碎かれる甚だ脆い、生物のやうに見えてゐるが、ひそまやかに深く地中に根を張つて、幾ら碎かれても隙さへあれば、頭を擡げ〳〵する支那人は、人中の蛇であり、蘗である。而も此の蛇、此の蘗が禪を結び、念佛を唉かしたのではなからうか。

世界に於ける日支の關係

山間の民たる日本人に、仁者の寬容が見られぬからといつて、水邊の民たる支那人を、智者の聰明を欠けるものごは斷ずるのは早計であらう。千年や二千年の短かい物尺で度るのは聊か大き過ぎるではないか。よしや勞農露西亞を本山とし「資本論」を教典とする、コンミユニズムごも名くる自力宗ご、米國を本尊ごし、黃金を本尊ごし、黃金を本尊ごし仰ぐキヤピタリズムごも命ふ他力教が、世界に於ける現下の禪と念佛であるこしても此の二宗にごつて代る、否、此の二宗を打つて一丸ごした、より高く、より大いなる宗教は、支那に生れ出はしなからうか。卽ち彼等によつて古い

此の「大經」も新しく生かされるかに思はれる。

希臘語や拉典語は知らず、獨逸語その他の歐洲語譯を見た日本人ならば、聖書が漢譯されなかつたら、基督教は日本に傳はらなかつたこさが判るであらう。我が國へ天主教を輸入し損なつたフランシスクス・ザヴエールが目的成就のために支那へ去つた過去に徴ても「支那さへ赤化すればよい、日本への直接宣傳は無効である」さ、レーニンが遺言したさいふ說は、事實ならぬ事實であるこさが窺はれる。

支那人こ歐洲人

それに、支那人を歐洲人に比べるさ、現實から一歩も踏み出し得ない點に於ては一致するも前者は狹量であるが、後者は呑氣である。隨つて前者には宗教にも、政治にも、激烈なる熱があつて、其の活動力は實に凄まじいものであるが、結果は何時も破壞である。狹量から踏み出すからだ。中世紀の神學、スコラスチック・フイソロフイーは智的活動を示し、十字軍は情念的活動を示した。又、政治的方面の觀察をすれば、英、佛兩國の大革命並に其の他諸國の領土的野心卽ち西班牙、葡萄牙が、新世界に發展したる如き、所詮支那の歷史に見るこさの能き

ない現象である。しかし、支那はさうした狹量こ執着が無い代りに、抱擁力に富み、世界の如何なる文化も同化して、而も極端に走らざる餘裕がある。極端に走るのは、如何に世界唯一の地震國こはいひながら、天上天下唯日本ばかりのやうな心地がする。支那に及ばざるこさ遙かに遠し矣こいはねばならぬ。今度東西の諸有文化を攝取して、之を我が物こするこさは、支那人獨得の擅場ではなからうか。支那人の觀たコンミユニズムなるものは、日本人のそれのやうに、矯激なものではない。歐洲人の極端なる意見とも異つてゐる。クロポトキンのアナーキズムは孔子の仁であるの、マルクスやレーニンの思想は、墨子の尙同主義であるのこ、如何なる新思想でも自國に、其の萌芽を見出すこさが能きるこいつて、自國のものにして了ふ爲に、到底之を其の儘、支那に實現するこさは難かしい。尤も爾うした主義主張の革命は、滅亡以前の露國に見るやうな極端なる專制國でなければ所詮行はれない。支那はもこ〳〵さうした國柄でないから、マルクスやレーニンの思想は、平和的、漸進的に行はれるかも知れないが、之を以つて支那を赤化しやうなさ、は唯物論てふ科學的迷信の釜を以て、物心一體の彌陀を溶かさうこするにも優つた妄斷といはねばならぬ。

斯く記し來つた時、何時の間にやら傍に置かれた一通の書翰が目に觸いた。差出人は目下

來阪中の支那僧である。

「江畔の黄土だけに、昨日の平和は今日の戰爭と、極から極に飛びたがる支那に生れ支那に育つた野衲は、日本に來て千年前の建築物や書き物が殘つてゐるのに驚いた。しかし、それが千年の後までも、人の頭を壓へつけはしなかつたらうか。等しく釋迦の說法であるこいひながら、僧侶といふ僧侶が讀んだ經文の相異から、箸の持ち方までもちがへてゐる。それにいづれも普通人こは全然異つた衣裳をつけ、異つた家に住でゐながら、普通人こ同じ生活をしてゐる。一種の俳優であり、藝者のやうな心地のするのも、文字に殺された結果である。我々の祖先は、何も日本人を生埋めにしやうこて文字を輸入したのではあるまいが……」

こいつたやうな文意である。

「成程、菊や紅葉よりも秋を莊嚴するのは銀杏である。それに、菊は無闇こ人工ゞ加へて、外形ばかり整へるものだから、生命の根は次第に衰へて來たし、紅葉は花よりも紅であるが、花も實もありやしない」

斯く呟きながら、不圖封筒を見ると、何か印刷文字が目に觸いた。

「十人足らずの子分を有つた泥棒が、法廷に引き出された」

「貴樣の父親は何處に居るのぢや」

「太上皇帝、蒙塵して其の所在を知らず」

「二人の弟は何處に居るか」

「東征將軍、西征將軍相携へて征途に上り、久しく歸らず」

斯く言ひ放つて意氣昂然たる泥棒の袂を引いて、妻は私語いた。

「そんな高言を吐いてゐるこ殺されますぞ」

「皇后よ！　安んぜよ。今來往古、未だ滅びざる國家なく。死せざるの人あらず。朕、天命盡きぬ。また何をか悲しまん」

と、夫は豪語したが、果然、首はねられた。しかし、其の名は靑史に錄された。

と錄されてあるではない。

「いかにも日本人は文字に殺されるが、支那人は文字の爲めに死ぬやうぢや」

覺えず獨り言を云つた。するこ、

「支那の書物は遺言狀であるが、日本のそれは判決文である」

と應ふもがある。しかし、それは木枯に吹き捲られる銀杏樹の聲であつた。

猶太人と日本人

惡い奴の棲める美しい島……淨土へ逃げ込んだ地獄の生物とは日本及び日本人に對する異邦人の定評である。エスキモー、コロボックル、ホッテントツト、亞米利加インデアン、布哇のカナカ、臺灣の生蕃、アフリカの蠻人等が日本人の先祖であるとも、神民とはいひ得まい。それは先祖がろくなものでなかつたからである。あらゆる國々の敗殘者、逃亡者、侵略者の逃込んだ地上の極樂園が、日本であるこいつてゐる。しかし、それは中傷でもなければ暴言でもなからうやうに思へる。中には日本は人類の精鍊所であり、日本人は古銕を銘刀に鍛ひあげる鍛工であるとさへ讃へるものもある。孰れにしても猶太人とは亞細亞の東端と西端のそれのやうに、正しき反對である。彼は國を有たないでゐて世界を我がものこしてゐるが、我は孤島に嚙りついて離れないしかし、元を質せば同胞であるこいふ說は嘘でないかも知れない。全く相反せるものは、又、最も相似たものであるからだ。此の二國が世界の危險國として各國から睨まれてゐるのも、此の兩國に相異なつて相似た點があるからだ。

所が、國土に寄生して惟神に遠ざかつた日本は、もう猶太の敵ではない。猶太人は曰ふ。

「文字を有たぬ點に於て、御身達こ我々はあらゆる民族にすぐれてゐた。我々がアビラツク文字を用ひた爲めに、墮落したのも嘘ではないけれごも、お身達が漢字を用ひた爲めに亡んだ慘めさは同情に堪へない。成程、我々はバイブル蟲である。けれごも四千年近い今日も、モーゼの十誡を放さないが、天の御中主にぶらさがつてゐたのが天照皇大神に、神武天皇に天智天皇に、□□□

ずるものだこ、何人も受取つて呉れる。猶太人こは神を信ずる者の別名であるかのやうになつてゐるのに、日本人だこいつた所で、神を信ずるものだこ思ふ人間は、日本人中にもあるまい。親もおもはなければ、子も思ふまい。それに信仰の自由こいつて御身達は威張つてゐる。然し、その自由は虚偽の自由である。御身達の信仰は、虚偽ではないか。打開けていふこ、日本こいふ美しい島は住人が入れ代つてゐるのである。御身達の先祖は、支那に、印度に、歐洲に移住して現代の日本人は世界の刎者が寄集つてゐる樣に思はれる。御身達こ我々は兄弟分であつたこいふ説を取消さねばならぬ。御身達の爲めに神の選民たる體面を汚さるここを惧れるからだ。御身達に若しも一片の潔癖性が殘存してゐるならば、吾々の此の要求の已むを得ざるに出たものなるここが了解出來る筈である」

こ。

法華軍こ淨土軍

言文は人間の排泄物である。如何なる教典も體讀しなければ、讀んだ言文に殺される。佛の力を享けて菩薩の說いた華嚴を、佛、自ら顯示した大經は勿論、大阿彌陀經を詩化した小經も

法華の創作たる觀經も、躬行を外にしては反故である。滅んだ佛教の復興を圖る大乘軍の急先鋒たりし般若思想も、經文こなつた時は生命の脫けたその時であつた。華嚴思想が般若のそれこ親和し抱合して、進化し發展した彌陀思想も、大經こなつて皃を告げたではないか。吾人は彌陀を文字の底から救ひ出し、淨土を經卷の奥から引摺り出さねばならぬ。

尤も大經の出現は爾前の諸經を片付けさしたが、彌陀救濟の眼目たる五逆謗法……否、彌陀の救濟は直ちに五逆謗法の消滅たるはいふまでもないが、救濟を完うせんが爲めの故に、大經が一先づ救濟から取り除いた五逆謗法の代表者……提婆達多を拉し來つて、これこそ、釋迦に大乘を授け、佛果を得せしめた前世の恩師であるこ叫び、未來の成佛を保證するのみならず、女人は淨土へ送るにしても、必ず男子に變ぜしめるこ說ふ大經の裏を行つて、畜生の小娘……即ち八才の龍女の成佛を說き、それを疑へる智積、舍利弗の面前に於いて、忽ち佛たらしめる「提婆達多品」を味方に引込んで、華嚴の十地こ大經の十劫の結婚に生み出された久遠の古城……光壽無量の本佛を引つ擔ぎ、阿閦から彌陀から釋迦を抱き込み、蓮華往生から兜率往生まで攝取れて、現世利益の藥王菩薩は愚か、來世往生の彌陀の脇侍、觀音、勢至をも會座に列ならせ、前者を妙法院裡の一末寺、普門品に幽閉めて「聞其名稱、卽得免難」の宣傳に狂はせ、

後者を「常不經菩薩品」の對告者たらしめ、文珠、普賢を首め、彌勒、阿難、舍利弗其の他多くの對告者を網羅して「十方諸佛土の中には唯一乘の法のみあり、二なく亦三無し、佛の方便の說をば除く」と、大法鼓を鳴らし、大法螺を吹きつゝ、飛び出した法華經が、大經を壓迫した時、忽ち法華の背後を突擊するものがあるではないか。それが卽ち觀經なのだ。彼れは敵の刀を奪つて敵を斬る卽ち法華の逆謗讃嘆を藉つて、提婆、阿闍世の活躍に幕を開け、下品下生の往生に幕を閉づる彌陀劇を演じて、大經を援護した。爲めに法華は體驗埒内から驅逐されんとする形勢さへはなつたのである。如何に法華經軍が憤慨したかは「父母の首を刎ねらるゝ、こも、念佛を申さず、世界を與へらるゝこも、觀經なごによりて成佛を期せず」と末法の法華行者日蓮の怒號に徴ても窺はれよう。權實の起盡を諦かにせんが爲めの故に、四十餘年未顯眞實の一言を、一卷三品に包んだ無量義經が馳せつけて、法華の前衞を力め、普賢觀經が飛び出して體驗門を守つたのも無理からぬことである。が、韋提華夫人一人の爲めに、幾萬の聽聞衆を、ほつとけぼりにして、法華の會座を去り、靈鷲山から一足飛びに、王舍城中に現れた釋迦を責めるの外はなからう。

それに、大、觀二經の出現は、藥師の東方瑠璃光世界も、彌勒の兜率天も、彌陀淨土に併合

さした。幾世紀に亙つた幾多の信仰表現を、綜合し純化し統一して、東洋文化史上に甚大なる影響を及ぼした。我が國に於いても、儀式本位の三論、法相、學究的なる天台、加持祈禱の眞言乃至佛門擁護の禪宗までも念佛に化して了つた。彌陀こは大和民族が理想の人格化、西方淨土こは日本そのもの、詩化されたものかのやうな心地をさせるに至つた。隨つて淨土三部を貫いた思想の純眞さは、法華の敵し得ざるところである。同しく爾前の諸經を攝取したこしても法華は叢書であるが、大經は撰書である。隨つて後者は彌陀の悲願に一貫されて、一心に歸命せしめるが、三諦圓融を示し、事理不二を語り、一念三千を說く法華は、バラ〳〵の密集、部分々々の聯結事ではないか。世間法もあれば、出世間法もあり、菩薩法もあれば彌陀法もあり法身佛もあれば報身佛もあり應化佛もある。比喩もあれば暗示もあり、折伏もあれば攝取もあつて、川流江河に對する海であるの、衆星に對する月であるの、もろ〳〵の小王に對する輪轉聖王であるのと、餘經に對し優勝を誇るこによつて、辛くも統一が保たれてゐるのである。

日本經と日本人經（附法華京）

しかし、欽明十三年、百濟の聖明王が、我が國に佛像、經卷を傳へたこいふのは、公文書

に記された公的事實であるが、私的事象はもつと〳〵以前のことであらうやうに思はれる。そして大經と法華經が最初の渡來經ではなかつたらうか。何か知ら日本國經と日本人經のやうな心地がする。若しも兩經が渡來しなかつたら、よしや、佛教が傳はつた所で、單に貴族や智識階級の玩弄物たらずば、權力者の利器にしかならなかつたに違ひない。佛教が社會生活に織り込まれたのは、此の二經が民衆經であるからだ。隨つて大藏中、これほど世に用ひられた經はない。殊に日本に於いて然うであつた。

海の經ともいふべき大經が水路本位の關西にても、山の經とも思はれる法華經が陸路本位の關東に弘布したのも當然である。殊に關西の中心たる京攝は大經の都會化であり、關東の中心たる東京は其の儘にして法華經ではないか。見よ！　彼方此方に中心があつて、何處にも中心がない。部分々々を見ると甚だ淺薄のやうであるが、全體を通じて見ると、各部互に響應して、組織ならざる組織の裡に、總てが統一されてゐる。妙法五字を中心に、周圍に十界の形相を描き現はして、本佛の體とする妙宗の本尊、所謂十界觀悟の大曼陀羅ではないか。久遠本佛の功力を顯す常寂光土のやうにも思はれる。而も火宅に迷ふ衆生には三車の喩……否、往來に迷ふ旅人の爲めには汽車、電車、自動車を以てし、一味の雨に百艸を蘇らせる代りに、道路の

泥濘に萬人を手古摺らしむるは愚か、ともすれば八百八町を八百八川たらしめる。成佛の授記よりも、卒業證書を授からんとて、草木も燃ゆる晩春に、無數の學生は試驗の爲めに　生命の新芽を摘み奪られてゐる。寶塔中に妙法を聞き妙相を見ることは能きないが、封筒中に辭書をしのばせる放蕩者、小包に爆彈を秘めかねまじき不良少年は珍らしくない。放浪の窮兒に全財產を與ふる富豪のない代りに、富豪の全財產を捲き上げんとする無產者はザラである。

滅亡の前夜

法華經は所謂三歿三存の漢譯をはじめ、各國語に譯されて、十五種の多きに達するとか、いふことであるが、東京も亦十五區に劃られてゐる。若しも京橋、日本橋が序品であり、神田、麹町が方便品、本所、深川が藥草品であるならば、八宗混交の緩衝地帶たる淺草は普門品、丸之內は壽量品、藥王品は本鄉、山の手方面は寶塔、湧出、化城喩品其の他の諸品であらう。本門法華の「寶塔品に事起り、湧出、壽量に事顯はれ、神力、囑累に事竟はる」とは、正しく東京を形容したかのやうに思はれる。

しかし、肥前島原、儒者の松本乾山―退藏―は、晩年、江戸に移つたが、故鄉が日本の西端

であるからこいつて、當時、江戸の西端たりし羽澤に居を構へたさうであるが、其の羽澤は、今は澁谷の眞ン中になつて了つて、全市の中央部に屬してゐるのに徴ても、如何に東京が西方に伸びたかゞ窺はれよう。

それに法華經が大藏の結論たり、北極星たる如く、我が國の首府たる東京は、又、二千五百年史の結論とも受け取れる。釋迦の理想が法華てふ文字の華と咲き出たやうに、大和民族の滿開が現下の東京ではなからうか。

しかし、政治機關に使はれた華嚴は、寧ろ樂の大佛と化つて滅び、淨土や禪の種に使はれた理的智解の天台法華、山門、寺門を殘して姿を隱し、眞言を種に使つた情的、意的の本門法華は滅んで二十一本山と飛び散らかつた。それでも大和民族は東京となつてます〳〵發展するのであらうか。

法華經と觀經と

しかし、大經に法華經を見るの人は、關東に京攝を讀むの人、觀經に法華を觀るの人であらねばならぬ。觀經の中堅たる空中住立の無量壽佛は、法華經の中心、見寶塔品の擬人ではないか。孰れも眞如實相の象徴であるこ共に、女人凡夫も彌陀の寶體たるここを示せるもの に他ならぬ。

隨つて觀經は法華普門品の擴大、大經は壽量品の延長こもいひ得られるが、又、法華の迹門は觀經を客觀的に描寫したもの、本門正宗分は大經のそれ、流通分は小經のそれこ觀られる。

尤も觀經こ法華を比較するこ、前者は創作的で、後者は近代劇だ。もしも、謠曲が華嚴の古典劇を摸したこするならば、我が國の歌舞伎なるものは、法華に學んだものこいはねばならぬ。舞臺の廻轉は愚か、ドンデン道具、チヤンチキの囃まで、法華經からヒントを得たかのやうな感じがする。せりだしは大地が裂けて無量十萬億の佛が湧出する「湧出品」に、早變や宙釣は「見寶塔品」に眞似んだやうに思はれる。隨つて法華經たる東京は、また芝居國であらねばならぬ。芝居氣のない人間が居らう筈がない。總ての建築物も殆ご底抜けで、芝居の道具建そのまゝではないか。ごだい人間の足が大地に着いてゐない。住民のすべてが比丘か、優婆塞か、聲聞か、緣覺か、阿修羅か、天人か、紳士か、盜賊か、女性か、男性か、皆目見當がつかない。褒めてゐるのか、貶してゐるのか、否か諾か分りさうな道理もない。思想家と政治家こ

實業家の三乘は勿論、闍提、女人即ち、不良老壯少男女を包み込む大風呂敷であり、全國土に鳴り響かせる大法螺であり、大言壯語の本場所でもあらうけれご、大言は大なる程勇ましく、壯語は壯なる程素晴らしい。法華の眞價も畢竟、其處にあるのである。それに東京ごいふ法華經は、細言小語、私語密談の巷に變つてゐる。墮落も大墮落でなく、腐敗も小腐敗で、鳴りを靜めたドンド法華の憫れさではないか。

天台法華と平安京

して見ると、天台法華に壯嚴された平安京は流石に偉かつた。建國以來の文化は悉く平安朝に歸納する。明治神宮も王朝時代を模した筈だ。それごいふのも法華經を法華經として讀んだお蔭である。宗派、教派に拘らず、好き好つぱうに學んだからである。政治や宗教方面ばかりでなく、文學の上、風俗の上、否、一切人の生活に法華は讀み込まれた。

「斯うせなければならぬ」「あんなことをいつてはいけない」ご、他をキメつけるのは、他を殺すことである。宗派、黨派、主義、主張の粗製濫造は、自轉車乘をして自動車を避けるためには老婆を轢き殺すのが當然だご心得しめ、色曰くする藥を賣るためには、色の黑い女房を離緣し、毛生へ藥を賣り出すためには、藥鑵頭の父親を殺しかねない人間をつくり出す。メンタルテストを行はぬ學校は危險であると、生徒が機械化しないのを憤る教育家が歡迎するやうになる。眞に生命のある宗教家、教育家乃至爲政者は、絕對放棄の姿を現すものだ。歩々の反省に刻々向上を齎らすからだ。夕の自己が死してこそ、旦は更に瀦る。日々亡ぶる太陽は、日々新らしく生れ出るではないか。

他を殺すもの

皆が思ひ〳〵に歩いてゐると、ごれだけ多くの人間が同じ道を往來しても、少しもこだはらないが、若しも、皆が往き先を同じくしたら「往」ご「還」ご、道を劃つて「右往！」「左歩め！」ご、交通巡査の厄介をかけながら、怪我人を出し易い。他の事は他に任して置けば可いそこに自己の自由があり、一切世間の幸福があるのである。ごうせ人間は、他に生かされてゐるのであるから、生きてゐる限り、他の爲めになる筈であるが、たゞ一つ爲めにならぬことがある。それは「あゝしては不可ない」「斯うしなければならぬ」ご、他をキメつけることがそれだ。これほご他を損ふものはない。世にこれにも勝つた不道德があり得ようか。僭越の限り、

暴慢の極致ではないか。

京 攝 と 東 京

思ふか、行ふか、二つに一つしかやれないのが人間だ。行ふものは思はず、思ふものは行はない。京攝者は前者に屬し、關東者は後者に屬する。隨つて東京人は耳には八釜しく目には激しいが、觸つて見ると正體がない。耳に靜かで目に寂しく、叩いて見ると石より堅い京攝者と表裏をなしてゐる。卽ち後者は、金を儲けやうとは思はないで、金を儲ける。儲ける話をするのが上手でなくて、金を儲けるのが上手である。前者は豪さうなことをいふのが上手く、豪いと思はせることも亦うまいが、其の實少しも豪くない。實際に行るのでなく、思ふたり、言ふたりするだけであるから、激しさうに見えるけれども、少しもこだはらない。けれども、誰も彼もが目的を同じくしてゐるために、呑氣に見えて、觸れ合つたら火でも出さうな心地のする京攝人は、彌陀一乘を額にあてながら、腹の底に地獄の火を燃やしつゝ、安心の異同論にその日を送ることによつて、存在の保たれてゐる眞宗に等しい。彌陀を黃金に取代へた一向宗でなからう。性慾の讃美歌たる觀經に縋りつくものも無理ではない。性慾は肉體內の黃金である

からだ。

蓋し今の京都は如來の常住を說く涅槃經であらねばならぬ。見よ！ 山河草木悉皆成佛の感がするではないか。

所が、涅槃經の善見王を未來化した彌陀を更に現實化して「進めば財寶——西方——淨土の臺に上り、退けば無錢——無間——地獄に眞ッ逆さま……」と、淫流滔々たる黃金地獄に驀進する一向宗は、全國土に流行つてゐる。

表 裏 轉 倒

傳統萬能、物質本位の京攝に、獨創の思想家、眞純なる信仰家が飛で出し、鎖國主義の德川時代に、世界的海外發展家の出でたことを思ふと、敎育の普及が兒童を惡化し、個性の尊重が、團體運動を勃させるのも、不思議でない。學校あつて敎育なく、組合あつて職業なく、政黨あつて政治なく、宗派あつて信仰なく、凡化運動、天才撲滅に專らなる程、非凡人に憧憬れて新講談が流行るのも怪むには足らない、日々濫造される創作が、大衆とは殺伐、獰猛、淫靡、亂倫その物なるかの感じを生させ、無名無實の人間を有名ならしめ、歷史的人物を取扱ひながら

毛頭歷史に關係なきものほど、歡迎されるのは寒心に値する。能樂が嚴肅味を喪つて形式を生命とし、謠曲が內容よりも技巧が弄ばれた時、室町幕府は滅んでゐた。淨瑠璃が舞臺效果を專こし、趣向の變化を競ひ、よしや部分々々に見るべきものがあるとしても、全體こして見るこ、支離滅裂、殆ご體をなさなくなつたことが、德川幕府の倒壞ではなかつたか。

法華こ老莊

又、關東こ關西こは法華こ老莊こも見られる。法華は人をして豪健快活ならしめ、老莊は失意無聊を慰める。而も「虛靜不爭、無爲自然」を體こし「向上努力、活動飛躍」を用とするここは、二者其の軌を異にしたものでない。孰れも偏狹なる國家觀念や、捉はれた倫理思想を拂拭して、萬有の本體に歸向せしめ、そこに絕妙、嚴肅なる人生觀を確立せしめ、社會生活の要素を生み出さしめて、歡喜法悅に究竟せしめる筈である。此の深遠なる二大思想の流れは古來我が國民の頭腦に浸みわたり、仁義を宗こする儒教の精神こ相表裏し「あなうれし、あなたのし、あなさやけおけ」の惟神こ內外共通し、安心立命の境地を味はしむるに至つたのであつて、西方欣求の思想こても、其の流れを異にしたものではない。老子は慢心を戒め、莊子は

不遇を慰むる。謙虛にあらざれば、身を保つこご難く、其の境を樂めば、貧しき中にこそ、至樂の地のあるこごを說ける老莊は、其の儘にして即身成佛の法華ではなからうか。此の支那と印度の二大思想は、寧樂、平安を通じて鎌倉朝の前後に入り、藤原氏の驕慢、源平の對立から南北朝の葛藤に當面するに及んで、如實に一世の精神界を支配するに至り、世の果敢なさを觀じ、自家の逆境に處する上に就きて、この思想の靈泉を掬ひ、そこに安心立命の如是境を自得して、悠々たる別天地に其の一生を託し、無悶無憂の樂土に安住するこごを得たのである。所が、此の老莊こ法華が儀式化して法相こなり、古義眞言こなり、理論化して三論こなり、山林化して天台こなり、田園化して淨土教こなり、曹洞禪こなり、新義眞言こなり、都會化して臨濟禪こなり、本門法華こなつたのではなからうか。

南無妙法蓮華佛

要するに、大經の「速得往生」は、法華の「卽身成佛」で、前者は主觀的法華であり、後者は客觀的念佛である。彼が釋迦の內傳なら、此は彌陀の外傳である。而も此の內外兩傳が、吾人こ宇宙の一體を證する。

此事に就いて思ひ出されるのは、後水尾上皇の御逸話である。國學に御造詣深く和歌に御堪能に渉らせられた上皇は、又、佛道にも通じて居られた。御筆蹟が御見事で在らせられた上に極めて平民主義な仁君におはした爲めに、米屋の看板も書いてやらるれば、豆腐屋の額も認めて御遣しになつたさすら傳へられてゐる。或る時、本願寺が六字の名號をお願ひ申し出た。やがて、御宸筆を賜つた。すると本國寺は、七字の題目を御願ひ申し上げた。無論、これも御認め遊ばした。所が住職がうや〳〵しくそれを披げて見るこ、七字の題目でなく五字の題目ではないか。卽ち「南無」がなく、たゞ「妙法蓮華經」こあるので「何卒「南無」を御加へ給はりまするやう……」こ、更に御願ひ申し上げた。所が、上皇は「南無」こは何を意味するか」こ仰せられる。「歸命の義で、卽ち身心を献げ奉る意でござります」住職は御奉答申し上げた「妙法蓮華經こは？」上皇は再び問はせ給ふた。「ハ……それは、經の名稱で御座います」「然らば書物に身心を献ぐるのか」上皇は仰せられたので、住職は恐れ入つて退り下つたこか。流石に上皇におはされる。妙法體驗の深意……法佛一體の妙諦を暗示されて居られる。法華經中に、彌陀召還の聲を聞いた日蓮は、定めし地下に感泣したこであらう。

又、日蓮はご「卽身成佛」こいひ、「娑婆卽寂光土」こいつて、不斷に「佛」を念じ「淨土」に憧憬れた僧も尠い。「大無量壽經」の血肉こまで讃はれた親鸞が「本願海」こか「群生海」こかいつて、口癖のやうに「法界」を讃嘆したのこ一つである。四百餘通もある日蓮の遺文中にも、教門こあつて宗門こいはず、數十種の經文を引いて「教行信證」を著した親鸞が、一言半句も法華經を引かないからこいつて、仇敵同志であるかに思つてゐる人間は、御水尾上皇の言に聽かねばならぬ。

法華こ大經こ

或は曰うであらう。等しく世界的、人類的ではあるが、其の文學的價値に於ては、法華を推さねばなるまいが、實在そのもの、力の德用を與ふるものは大經であらねばならぬ。體驗を通じて過去を現在に活かす宗教であるこ共に、未來を現在に莊嚴する藝術であるからだ。時代人心に鑑みて、慧心、法然は觀經に依り、良忍、一遍は小經に依つたのであるが、要するに、大經の精神に參徹した結果に他ならないこ。しかし、さうした言を吐ふ人は「大經を誦すること、信ずる人ではなからう。說法は實行である。人をしていふのは、正行を修することである」こ、て實行せしめるでなければ說いたこはいへない。聞いても實行しなければ聞いたこはいへない

からだ。法華の體驗能きない人に怎うして大經が體驗されよう。彼は更にいふかも知れぬ。「女人凡夫は愚か、瓦礫、草木の悉くが成佛するこ、法華は斷案を下してゐるが、如何にして成佛するかこいふここに就いては、一言半句も洩らしてゐない。効能書ばかりで藥劑は見當らぬ。國手の診斷書ではあるかは知らないが、處方箋が添うてゐない。「枯木死灰も阿耨多羅三貌三菩提が獲得能きる無二亦無三の一乘法である」こ、偏に自經を讃嘆する以外の何物でもあり得ない。莊嚴な七堂伽藍かは知らないが、本尊は見當らぬ。

「已に說きし、今說きし、當に說かんこする經に於て、是の法華經、最も第一こ爲す」こか「諸の小王中に輪轉聖王ぞ最も第一こなすが如く、この經も亦た復た是の如し、衆の經の中に於て、最もその尊こ爲す」こか、誇つて、一經、八卷、四七品、六萬九千三百八十四字の悉くが、自經廣告ではないか。天台大師が「餘經を弘むるには、一代の教相を明さざるも、義に於いて缺くるなし、若し法華を弘むるには、教相を明さずんば、文義闕くこころあらむ」こ、いつたのも」一切經の中に、此の經の壽量品ましまさずば、天に日月の、國に太王の、山に珠玉の、人に神のなからんが如し」こ日蓮が叫んだのも無理ではない、こいつても居るが、一切の文字は法華の序分、正宗分は天地萬有、そして題目は流通分だこ叫び、否、文々字々は實踐躬行

の飛花落葉……而もその蔭影に他ならぬこ日蓮の覺つてゐたここを覺つてゐない。

如來秘密神通之力

自經廣告以外、何物をも見當らなく見ゆる法華經なればこそ、一切を生み出す生命を秘めてゐるのである。是れ卽ち如來秘密神通之力ではないか。如來秘密神通之力……あゝ何こした力強い力であらう。過現未を現在一刹那たらしむるこ同時に、一事を解決せずして、一切を解決する神秘ではないか。合理論者も、實驗論者も、厭世主義者も、樂天主義者も、享樂主義者乃至道德主義者も、其の前に拜跪せざるを得ない神秘……諸有確信を一掃、言文の總てを抹殺する奇しき力……コンミユニストも、サンヂカリスト乃至ニヒリストも、自己の破滅に心注かしめられる大懷疑……刹那々々に價値を創造して一切を無價値ならしむる生命の詩……偏端其の儘を中心たらしめ、斷片其の儘を組織たらしむる不可思議そのもの……見えざるものに見えるものを藏ましめ、局限された人間に無限の宇宙を活殺せしむる根本力……單純混沌たる老子こ、複雜明瞭なる佛子をも抱擁せしむる久遠の母性……刻々變化して永劫不變なる矛盾の調和に統一せしむる神秘ではないか。

斯くの如き神秘不可思議なる法華の自己讃嘆は、懐疑のヴエールを剝ぎ除つて一躍、無智の妄者を自覺の殿堂に飛躍せしむる威力である。そのまゝにして成佛の方法ではなからうか。若しも大經が人中の鐵ともいふべき、泥凡夫を吸引する磁石であるならば、法華は眞理の黄金を含有する鑛石であらねばならぬ。前者は其の儘、用をなすが、後者は分解に竢たなければならぬこしても、此の鑛石こ彼の磁石は、相索引し照應して、法華を空論徒說と嘲るの人間こ大經を方便假門こ斥くる人間を同心一體たらしめる。

要するに、法華は人間の價値增進に缺くべからざるものであるが、大經は現在及び未來の社會進化を、決定するに重要なるものである。何人爲めの經でもない、何人の說法でもあるからだ。

被轉經人

それに大經が「經道滅盡」の一語に、爾後の說々を一掃するここによつて、十劫の昔を永劫に生かさうこするやうに、爾前の諸經を撤回するここによりて、未來を現在に莊嚴し、絕望の精神に、新しき希望を齎らしめ、最迷へる劣機に活機を投げつける。能書卽藥劑・伽藍卽本尊

にあらずして何ぞやである。此の點に於て法華の偉大性を認めなければならぬ。殊に序論の半から結論に躍り込む性急な日本人の爲めに、書かれた一種の縮刷大藏であるこいつても可い程日本人に愛讀された。

諸經の中で、恐らく法華經ほご、日本人に讀まれた經はないであらう。何か知ら日本人のために書かれた經のやうな心地もする。聖德太子も經こしては法華、僧こしては惠慈、人としては片岡山の飢人、居こしては夢殿、妃こしては膳の大郎女を愛せられた。法相、三論時代の寧樂朝に於ても、法華は大歡迎にもてた。聖武帝の御發願に成つた國分寺は、國家鎭護の金光明王經が主であるが、法華の寫本が配布されてゐた。光明皇后の御發願に成れる懺悔本位の國分尼寺は、法華本位であつた。而も此の僧寺こ尼寺が靜動二脈こなつて、心臟たる寧樂こ相待ち、文化的血液を全國土に漲らした。若しも寧樂を華嚴の都こするならば、より以上の意味に於て、平安は法華の都こしなければならぬ。華嚴が寧樂を莊嚴した以上に、法華は平安を莊嚴したではないか。朝題目に夕念佛、起ては眞言、坐れば坐禪、叩けば彌陀の飛び出す四種三昧の天台は愚か、妙法蓮華經こは彌陀が、娑婆出世の名稱たる觀音の密號なれば「我れ成佛以來甚大久遠」は「觀音卽無量壽佛」の意に他ならぬ。末世往生の曩に現世利益をつゝむのが、彌

陀の本願であるこ、三國に傳播したけれごも、日本に入つて一宗派こなつた。否、日本を籠つて法華國たらしめた。しかし、教化の中に求道を包み、說法に懺悔を秘め、攝取を折伏に藏せる此の經を讀み損うて、支那の宋朝を眞似た譯でもあるまいが、我が國の平安朝は鬼を告げた空想に耽つて言文の遊戲に狂ひ、不可能の理想を主張して大地の外へ脫線したからであるが、大經を讀み損つて、錦繡に罪業を蔽ひながら、戒律に祈禱を裏付けなければならぬ筈の眞言を眞似、種字曼陀羅を光明本に、極彩色の繪曼陀羅を、金ピカの彫刻曼陀羅に、八種の佛天を太子七高僧に、三密加持を三經轉讀にあらためて、嘗て眞言が神道を自宗に利用して、自宗を喪つたやうに、眞言を自宗に攝取れて自宗を喪つた宗派もある。又、觀經を讀み損つて己が罪を棚に放り上げ只管、世を呪ひ、他を咎めて、彼の國への往生に狂ひ、空家で聲を嗄らす人間も多く、小乘を稱み損つて、「助けて呉れい！〳〵」こ、一心不亂に木魚は愚か、鉦すら叩き割り、兆載永劫の大行を、若七日に埒明けようこする。卽ち佛陀の救濟を我がものにしやうこする者もザラである。法華を讀んで法華に轉ぜられるの人は、大經を讀んで大經に轉ぜられるの人、卽ち網に執して魚を逸し、指に執して月を見得ない人である。

法華法亂こ一向一撥

我歌へば枯木も躍る。我悲めば寒巖も亦泣く。死灰も滅塵も我が心の相であるからだ。飛花落葉また誰とかせんやである。我發して法こなり我潛んで佛となるのではないか。泡沫夢幻の世とは知りながら、何處までも生きこほさうこする人間の本能を、更に淨化しやうこする本能が、我が心の奥底に潜んでゐる。名けて理性こ云ひ、法性こ道ひ、彌陀こ說ふ。而も此の彌陀佛を文字化した大經は、惠むに眞實の利を以てするこ誓ひ、法性の文字曼陀羅……成佛の根本義を暗示する法華は、眞實を顯すこ叫んで居る。宛ら資本主義こ共產主義の差別ではないか。而も此の利こ理の衝突から、幾度か血みごろの世界を現出させた。孰れも三世諸佛出世の本懷は、此の經を說かんが爲めであるこ叫びながら、今日のプロレタリアートこ、ブルジョアジーのそれのやうに、相爭ひ相戰つて、孰れも諸佛出世の本懷を裏切るばかりであつた。極端なる軍國主義が國家を亡ぼし、單純なる平和論が平和を破るやうに、法華を說く者に法華の賊が多く、大經を講ずるものに大經の敵が尠くないからである。空想的現實病者が、法華法亂を起し眞理病者こいふ、概念患者の、一向一撥をおこしつゝある現代は、世界の足利末期ではなからうか。

法華と觀經と

所が淨土經の提婆達多品ともいふべき觀經は、法華と等しく劇的表現ではあるが、法華の構成要素の神話的なるに反し、觀經のそれは創作的である。こいつて哲學的に組織された大經も創作的に表現された觀經も、讃美歌的なる小經も、思想内容は一つである。否、觀、小二經は大經中のもの、大經は觀、小二經の隱顯兩面の描寫である。しかし、創作こして見るこ、親經ほご龍頭蛇尾の作はない。恰もそれは、劇こしての法華そのまゝである。

しかし、耆闍窟山の法華の說法が、將に終りを告げんこする時、普賢菩薩が馳け付けて、法華の第一義諦を問へるに對して、釋迦が答ふるに「四法」を以つてしたやうに、王舍城中で釋迦が下生下品の往生を說き終つた時「善の何たるかも知らざる極惡非道の下生下品に、定、散二善が修し得られませうか」こ、難じた阿難に「だから名號を持たねばならぬ。此の名號こそ、優れた成佛の方法である」こ、いつて虛空を踏んで靈鷲山に歸り行く釋迦の後姿を拜した阿難は、覺えず五體を大地に投げつけて、慟哭した。今の今まで見て居た釋迦ではなうて、彌陀佛であつたからだ。あとに殘された名號こそ、蛇尾から出でた寶劍ではないか。阿難が此劍を引拔いて觀經を逆に、尾から頭へ眞つ二つに引き裂くこ、胎内から十方諸佛の讃嘆が聞えた

其聲が卽ち彌陀の召還ではないか。「世尊我一心歸命盡十方無碍光如來願生安樂國」こ、婆藪槃豆が、優婆提舍劈頭の叫びも、其聲を聞いた刹那の大觀喜であらねばならぬ。又、觀佛の經から念佛の聲を聞き、釋迦の後ろ姿に、無量壽佛を拜んだ阿難なればこそ、大經の會座に列るや否や、說法主の顏が、平素の釋迦に非ずして、無量壽佛であるここが直覺されたのではないか。觀經が大經の秘密を闡く秘鑰でなくて何であらう。善導も、法然も、此鑰によつて「佛々相念一」の秘密に觸れた。況して「大經卽彌陀」こ信じた親鸞をやである。釋迦が韋提華夫人に定散二善十六觀法を說き、諸善萬行をすゝめた、別を說いたのも、此の秘鑰を授けたさの餘りであつた。

佛教こ基督教

しかし、現下の法華こ念佛は、佛教こ基督教であるこもいへよう。文身に始まつて獸皮、獸肉こ弘まつた聖書は、新舊兩約こも文字の殿堂で、增減ならなく構築されてゐる。けれごも、金石や竹木に傳はつた大藏は、自然に堆積した文字の山ではないか。そして此の二者が東西文化の最高表現で、自餘の一切は此の二大山脈の流れに他ならない。所が「太始に神、天地を

創造たまへり」の劈頭の一句に、六十六巻の兩約全書を疊み込める聖書はアブラハムの子、ダビデの子、イエスキリストの系圖」なぞゝ、二千年のヘブライ史を一言に象徴し、神の子イエス福音の始め」の一喝に、全人類を永遠に神の奴隷たらしめ、「太初に道あり道神と偕にあり、道卽ち神なり」の一文に、全宇宙を紙中に攝取れる。魔の利劍にも似たる言文が、巻を開く毎に飛び出して、讀者の魂を引つ摑み、奇蹟を錄すにさへ、何日頃、何處でゝ明確にしてゐるが「如是我聞一時佛在」の定まり文句で蓋を開ける佛典は、何經も、此經も、序、正、流の三階造で、同じやうな言說ばかり繰り返してゐるが、何處の話やら、何時の事やら皆目見當がつかない。彼は審判の鐘であり、此は釋放の響であるからだ。聖書が人類を鬪はしめ、佛典が國家を滅さしめるも無理からぬことである。前者は驀進し努力し革命せしめるが、後者は冥想し、靜坐し詠嘆させる　甲は破壞を專らとし、乙は調和を旨とするからだ。勿論その破壞は復活の秘鑰であり、此の調和は創造の秘密であつて其根柢に流るる生命の水に異りはないが、一は目に見ゆる末見の現成に狂ひ他は目に見えぬ現實の莊嚴に狂はうとする。

隨つて釋迦最初の說法だといふ華嚴は、舊約全書の創生記に似てゐる。華嚴は「三界唯一心心外無別法」を說く、謂はゞ唯識哲學の詩であるから、天地創造の神を說く創生記とゝ、全然異つたやうに思はれるが、天地創造の神は唯一心の姿であつて、一切萬物はエホバの心の姿であゐる。エホバはたゞ「光あれ！」といつたゞけだ。太陽や太陰を造つたわけではない。卽ち三界唯一心、心外無別法ではないか。

而も釋迦最後の說法だといふ涅槃經は、ヨハネの默示錄と相心印する。默示錄は新天新地の出現であるから、涅槃經が唯識の理によつて、法身常住を說くのとかはらない。それに舊約全書中の傳道の書は、開卷第一「空の空、空の空なる哉、都て空なり」と喝破する。卽ち是れ般若の空々ではないか。たゞ傳道の書は空を人生に局り、般若のそれは永遠の宇宙に說き及ぼしてゐる。ダーウキンが進化の理を生物界に局つて說き、スペンサーが、それを全宇宙に說き及ぼしたのと相似た所がある。それに「ヨブ記」は又、觀經に似てゐる。それはドラマとして面白い點ばかりでなく、その內容に相似た所がある。ごこまでも神の御旨を守つてゐるものが苦められ、それに背いたものが榮える矛盾顚倒の事實を見て、神意の是非を疑ひ、惱めば惱むほど、生き徹さうとする本能が、いよ〳〵深まつて來るヨブの心は、業緣の恐ろしさに怪き眼

前の地獄に戰慄して、世を呪へば呪ふほど、ますく〳〵永遠に生きんことを欣求めて已まない韋提華夫人の心ではないか。ヨブ記が沙翁のハムレツト、ダンテのデハインコメデー、ゲエテのファウスト、ミルトンのパラダイスロストの種子となつたやうに、觀經は馬鳴の起信論、龍樹の毘婆婆論、世親の淨土論乃至善導が四帖疏の要素ではないか。

共觀福音書と淨土三部

膨脹發展の象徴たる太陽と、吸收長養の勢力たる本能の凝塊たる人間が、太陽崇拜と生殖器崇拜の結晶たる觀經に、吸引されるのは當然なことであるが、希臘の肉的宗教、埃及の天文藝術、印度の精神哲學の合金ともいふべき此の觀經は、佛典中の路可傳ごいはねばならぬ。勿論淨土三部は共觀福音書と相似たところがある。福音書は何れも耶蘇の一代記ごもいふべく、耶蘇の生活體驗の記錄であるが、馬太の抽象的にして而も詳細なこころは、釋迦の八相成道の說かれた大經に比べく、大、觀二經の讃美歌即ち機法一體の詩ごもいふべき小經は、馬太、路可二傳の原典ごいはれてゐる簡潔明快な馬可傳であらねばならぬ。尤も馬可傳はキリストの傳記であつて、理想化されざる事實のまゝの記述であるから、彌陀の讃美歌たる小經ごは、似ても似つかぬものゝやうに思はれるが、小經も彌陀傳であつて、一字一句も事實ならざるなしである。彌陀が釋迦の理想の人格化であるが如く、馬可傳の耶蘇はキリストごしての耶蘇であつて、耶蘇の理想の人格化ごもいふべきものだ。隨つて尋常人にごつての奇蹟も、彼にあつては常跡でなければならぬ。又、眞の理想は事實に化するボツシビリティーがある筈だ。一艸一木奇蹟ならざるはないが、人間は奇蹟が中の奇蹟ではないか。一點一劃も、聖書に疑ひを插むものは、眞のクリスチヤンたり得ない所以である。そして耶蘇の理想その物の錄された女人福音書の稱ある路可傳は、女人無量壽經ごもいふべき、觀經に比すべきものだ。

約翰傳と法華經

而も、三位一體觀にたてる約翰傳は、無論、三身一佛の法華であつて、彼れがユーアンゲリオンであるなら、これは如來の長篇詩ごもいふべきものだ。

約翰傳は肉身の基督、實は太初以來神ご共にあるロゴス「道」そのものである。卽ち「道、肉體ごなつて世に現る」ご說ふヨハネ傳は、所詮は釋迦の能詮の壽量本佛ご一體であるごいふ法華ご一つではないか。彼れの「道」は此れの法であるからだ。耶蘇の眞弟子の耶蘇信仰——死

後復活したりこの信仰!!は、たま〳〵保羅の救濟觀と合し……といふよりも、之によりて理智的、哲學的な其の救濟觀に脈を搏ち出して完成せられ、生きた保羅神學は出來上つた。其の保羅思想と奇蹟的史實の信仰を、織り混ぜて出來上つたのが共觀福音書である。隨つて其の共觀福音書なるものは、必ずしも純然たる歷史でなく、實に保羅思想の色彩の濃厚なるものたるは當然である。而して保羅思想と、外來の新思想によつて、構成せられた一新宗教觀から、基督傳を觀たのが約翰傳ではないか。

若しも爾前の史的若しくは半史的釋迦牟尼が、法華に至りて純然たる久遠の本佛化したこのが、當を得た觀方であるならば、共觀福音書のボウロ的思想の一面を備へた半史的耶蘇は、殆ど約翰傳に至りて完成したこいふべきである。此の點が約翰傳と法華經と相似たこころである。隨つて基督教が約翰傳に依つて世界に弘布したやうに、淨土教も法華に依らねば世界的に發展しなからうやうに思はれる、謂はゞ法華は、淨土行のプロペラーであつて、飛行機そのものは大經ではないか。淨土三部は法華三部の普賢觀經であり、法華三部は淨土三部の無量義經であるこいふが、日本こいふ淨土經は、支那こいふ法華經に結びつかなければ、行結りから遁れ出るこの能きぬ理由もそこにある。恰もそれはキヤピタリズムこいふ淨土宗が、コ

ンミユニズムこいふ法華宗に、親和し抱合して渾然たる一體たり得ずしては、永遠性が得られないのこ等しい。

世界は基佛の相反に生かされる

こいつて、出發點を異にし、發達の徑路を異にしたキリスト教の愛なるものこ、佛敎の智慧なるものを、結合させやうこ努力する其の努力ほご、悲慘な努力はないであらう。バビロンの藝術、アツシリヤ、ユダヤ、フキニキヤその他の文化を生み出して、世界統一の權力はバチカン宮にあるこいふ、キヤソリシズムのローマ帝國を勃興せしめた地中海の魅力たる彼れこ、亞細亞文化の源泉たるヒマラヤ山麓の威力たる、此れこの相反に、世界の在在が保たれてゐるからだ。しかし有始有終の天地を創造る神は無始無終であらねばならぬ。此の無始無終の神にまで到達するこそこに佛が居るではないか。基督教は佛教に到達するの楷梯こもいひ得られる。然し亞細亞文化復活の狼烟は歐洲人によつてあげられた。亞畑亞人がさうした楷梯を失つて亞細亞人文化から見放されて了つたからだ。

或は新時代の新佛教も、基督敎徒し手になるかも知れないが、自國の風土の濕潤を顧慮しな

い模倣洋館に、自國の生活にふさはしからぬ服裝を誇り、生活の獨立を失つてゐるこゝが、思想上の行燈を吹き消したかのやうに心得てゐる世界唯一の佛教國から、さうした萠芽は見られさうにない。

精神不滅と物質不滅

王樣は乞食を夢見るし、乞食は王樣を夢みるこか。何だか同一人が王樣こ乞食が晝夜交代してゐるかのやうな心地もするではないか。無神論者は絕えず心に神を描き、有神論者は神のこゝを考へたことがない筈だ。物質の分拆を重ねて行くと、分子より原子、原子より電子こいつたやうに、次第に單純化して行つて、はては形もなく、色もなく臭もないものになつて、精神と異つたものでなくなるこか。眞に神の觀える目は、唯物主義のドン底から光るのではなからうか。現實を突き貫くこ夢とかはらない。否、夢は現實よりも現實であるはずだ。地上の繫縛が天國を造り、生存の恐怖が淨土を建立せしめる。確實なる體驗に根ざしたものでないこ、如何に絢爛な文字の羅列された、莊嚴な詩であつても、人を動かすものではない。全實在の動力を詩化した至純な藝術であり、複雜な現實を飾ひ除つたエッキスたる一切藏經は、雄大瑰琦、

森嚴豪宕なる大自然の象徵である。殊に淨土三部の極樂莊嚴……地の極にまで連つた地球の本尊こも覺しきヒマラヤ連峰の曉嶺に立つて、雲霧の幕の開かれるところ、雄大の限りを流してゐるガンヂスが、香樹芳草の燃えに燃ゆる大野を縫うて、微茫たる大洋に注ぐ大自然の偉靈こ崇嚴が、人間に最高理想の實現を迫り、靑いものはこゝこぎり靑く、赤いものはこゝこぎり赤い、彼の森羅たる天造の藝術美が、地上に於ける最大の詩を歌はしめずには措かない。空翔ける鳥も、野を驅け走る獸は愚か、名もなき草の葉末に息づく名もなき羽虫すら、五彩七色に輝きて、七珍八寶の淨土の莊嚴を內部に感ぜしめる、彼の印度の大自然美が眼前に躍動する。無邊に輝く光の詩……、無窮に流る、生命を潛めた淨土三部の自然觀……これほど水の偉靈さ淨嚴さ、天造の建築物たる樹林の莊觀、蒼空の輝きを感受せしめる藝術が他にあらうか。忽ち見る如來白毫の光鉉は直ちに水こ變り、大地こ化つて徐ろに微風のおこるところ、林泉があり鳥が啼く。そして一切が妙法を說く。音樂こ彫刻こ繪畫が一つになつて、人心を淸淨無垢の天上に導き入れる。若しそれ落日堂々、西方に沒するの時んば、僧俗、鬼神、鳥獸虫魚、其の他の萬有が沙羅林に集まる涅槃の風光を偲ばせる。

斯くの如き生命の詩は、殼から殼へこおしこめられた、人間を本具の正覺に蘇へらせ、宇宙

の根本力に合一せしめ、「大宇宙は是れ我が所有、一切衆生は是れ我が子」この感じを生させる。

實に萬有の諧調する法界の風光は、人をして絶大無邊なる威力を體認せしめ、一切が互に融和して、無碍の關係を保ちつゝある神秘に跪かしめ

「歸命盡十方無碍光如來……」

と、絶叫せざるを得ざらしめる。それこそ、事々物々、塵々法々……相互融通無障無凝なる千差萬別の現象は、一々性の如く、相卽相入して、無碍自在、重々無盡なる秘密を示す華嚴であって、深奥沖邈にして該攝周偏する十玄緣起に參徹せしめ、現象卽實在に參徹させる。

佛物同人

斯くの如き大自然の活動は、吾人を絶對と抱擁せしめ、萬有を擧げて佛陀たるの實感をそゝりたてる。發心求道の現實生活に、正覺の圓現を期せしめ、永劫に自他の向上を齎しめる。此の永劫の願ひこそ、吾人を驅つて佛陀たらしめる。瞬刻限のゆるみもなく、無限に廻轉する地球其のまゝを淨土たらしめるからだ。

世の科學者なるものは、變々化々する森羅たる自然現象を、物質原素と見てゐるが、諸有物質原素を統率し、永劫不死の勢力を駕御して、萬有を創造し破壞し、破壞し創造する大自然そのものは、實に無限大なる天才藝術家、靈活無比の英靈漢ではなからうか。之を天に仰いで創造神といふ。其處に至高至眞の歡びがある。あゝ、創造神……それこそ、宇宙の最嚴意志ではないか。人格に擬して天父と崇め、如來と憧憬れる。吾等は彼が指呼の間に浮沈し活殺さるゝ一微塵に他ならぬからだ。

白晝の無神論者は深夜の有神論者たるはいふまでもない。順境の唯物主義者は逆境の唯心主義者ではないか。法界そのまゝを眞實と認むる華嚴と、其境を實體に歸納して眞實を叫ぶ法華は前者の本體と德用を示し、華嚴、法華の眞實を體驗せしむる大經は、後者の血肉であらねばならぬ。物は佛なりといふのに無理があらうか。

一人は一切人、否、諸有萬有は一人である。一切に棄てられると、一切に感謝せざるを得なくなるからだ。仇敵の死を聞いて嘆く淚には永劫不變の光明がある筈だ。此の永劫の光に優りて、一切を攝取し盡さうとする彌陀の本願に歸依させるものはない。自他の向上を念ずる永劫の願ひであるからだ。此の無限向上の念願程、無私な心……純眞な閃きはない。永遠不滅の

生命であり、宇宙の本能であつて、そこに理想と現實の一致が見られる。

極めて單純な、概括的表現で、古拙な神話に過ぎないと「大經」が、今猶、人の心を惹きつけるのも、理論主義的說明を離れた直接經驗の暗示であり、神秘直感の事實であつて、架空的、夢幻的表現の底に、永劫不變の生命が潛んでゐるからだ。實感の根から咲き出た靈膓華……大自然の眞實と合致した作者の創造性が、光輝と滋味を流露活躍させるからである。

玩具匣とビックリ匣

宇宙は玩具匣であつてビックリ匣だ、一切が偶然であつて必然である。必然は自然であり、自然は偶然ではないか。此の自然にして而も偶然を外にして眞實はあり得ない。眞心劒さはないこれに敵するものはないからである。「如何なる惡も恐るべからず、念佛を妨ぐるほどの惡なきが故に……」と古德は斷つた。念佛は必然にして而も偶然の聲……法人一體の相でないか、無智な凡夫を悲智圓滿な佛に化するからだ。光は闇を已れに併せて障りがない。彌陀が惡人を正機とする道理だ。如何なる惡も佛に敵し得ないからである。煩惱を以て煩惱を救ひ、惑業を以て惑業を淨化し、魔は魔なる程、いよ〳〵淨められ、染は染なるほど、ます〳〵不染たらしめられる。爾うした恐ろしい同化力を有つた佛といふものは、全體、何處に居るのであらう？　心外に居て心內に居る、心內に居て切外に居る。……至上最高の此の念ひに佛の世界があるのではないか。曾て古人はその世界を高き空に仰いで兜率天と名づけたが、その上へその上へと天を積み積んで極しがなくなつた。すると極のないその極に西方淨土が現はれた。卽ち「救諸厄難」の現世往生から「生彼國土の」「來世利益」への直線から曲線へ、彌勒から、彌陀へと飛び放れたわけである。卽ち上昇思慕と西方欣求の轉換である。而も、西は萬物の終歸であるから、現實を踏まへて理想が貫いたわけである。

此處と此時

「此處」と「此時」とが時、空の十字架であるから、天地未生以前に遡生つても、天地亡んで後に生れ出ても「此時」といふ感じは變らない。最高天の上に出ようが、極なき地の極に彷徨うが「此處」といふ思ひは一つである。「華嚴經」が、釋迦の成道を主眼とし「涅槃經」が釋迦の入滅を骨目としてゐるやうに、大乘經典の悉くが、おの〳〵釋迦の生涯のある一事項

を中心こして、其の生活體驗の全内容を表現しようこしのたも、時空の十字架に釘付けない限り、如何なる問題も、解決出來ないからである。隨つて釋迦の入滅を基調こして佛陀の内容を觀察し、釋迦の常恒不滅たるここを現した涅槃の信徒は、釋迦の最後の理想は涅槃であるこいふし、釋迦の成道を中心こする華嚴家は、大無量壽經の法藏比丘は華嚴の善財童子、過去五十三佛は五十三善智識、華嚴一體の六面觀察 卽ち「六相」は、彌陀名號の心、「十玄緣起」は「十却正覺」の相であるなご、宛ら大無量壽經を華嚴の意譯であるが如くに說ふのであるが、佛それ自身の内證話たる華嚴は、佛界に到達する因行を修する普賢の緣起こ、報身毘盧舍那佛の果報の緣起を說く因果緣起である。此の因果緣起の根據たる本體、卽ち法界の緣起であつて、卽ち因果の緣起は重々無盡であるが、而も唯一の眞理を本體こせざるはない。此の本體卽ち法界であつて、その作用は卽ち現象これである。そして此の二者は、融通無碍にして、現象そのまゝ直ちに絕對であるこ觀じ、現象そのものゝ、究極 的圓融關係を明かし、一卽一切の絕對を表出して、事々無碍を證する。然して其の所說は「心佛衆生是三無差別」こ立てゝ、此の三者の無盡の緣起を說ける唯心法界說たるは說ふまでもない、

斯くして諸有萬有を已れに攝め「無量無邊法界の智慧日輪を成就し、常に無色無碍の智惠光

明を放ち、先づ普賢菩薩等の諸大山王を照らし、次に決定善根を照らし、緣に隨つて化を受けしむ。然る後、一切衆生乃至邪定を照らし以て未來饒益の因緣こなす」こ叫ぶ「華嚴經」は、經の本尊たる遮那王は無始無終、常恒不變にして萬象の主であり眞にして寂、幽邃玄通、應用自在にして、天地風雲、山川國土、水火人物、草木瓦礫より色聲香味觸法の微にいたるまで、皆、その胸中より流出、顯現せる遮那法性たるここを示してゐるが、その遮那王こそ、明大法鏡の映現した彌陀の姿であつて、佛の自内證たる「華嚴經」を說法敎化に攝めて世間、出世間に宣傳した「法華經」が、社會生活の進轉を資けたこするならば、慈悲救濟に「華嚴經」を活かさうこする「大經」は、人類進化の上に貢獻がなくてはならぬ。

特別經

しかし「大經」は特別經である。一切藏中の局部を選擇したものである。爛れた局部を治療して全身を救はうこするのだ。所謂選擇本願である。何が爲めの選擇か、其の選擇は自己の爲め……全く行き詰まつて行かんか行く能はず、退かんか退く處もない。さりとてジーッこして居られない。自己それ自身の救濟である。「久遠劫の昔から人は總て佛になつてゐる。宇宙

の活動し始めた時、已に存在し、世界破壊の後に存在する永劫不滅の淨土は吾々がこれから行つて、建てるのではない、已に建つてゐる。ぼつ〳〵金箔を塗つて三十二相、八十種好の佛を作るのではなく、もうちやんと出來上つてゐるのであるから、此の身此の儘行きさへすれば可い。そこには老少不定の中に永遠が生かされねる。一切の人と一つになるからだ。死に行きし人も、まだ生れない人も、自分を勵まし、自分を護りたてゝくれるここに心づかしめられる。ごんなに惡らしい忌はしい對者の上にも、否さうした對者であればあるだけ、底にさうした反感を抹殺して餘りある懷しい、尊い姿が拜まれる筈である。それが拜まれない限り、自己は救はれない。小さき自己が殺されて、大いなる自己が蘇らないからだ。何人も自餘の一切に生かされてゐる。一切が自己であり自己が一切である、一微塵でも全く消え失せたら、人類の全滅は愚か、宇宙そのものも存在しない。一切が尊く仰がれねば自己は輝くものではない。一人の內には一切がゐるではないか」と、「大經」は叫ぶ。「一箇の小石の首肯も全地の首肯ではないか。五百羅漢の中に亡き父がゐるこいふが、十六羅漢の中にも、二羅漢の中、一佛のたゞ顏面の中、否、一毛孔の中にも現はれる。大地渴れ果てゝ一莖草を留むれば、その一莖草に現はれるここに心づかしめる「特別經」だ。「吾叫ばずば石叫ばん」と叫んだ耶蘇三年の說法も「人

首肯かざれば石首肯かん」と首肯いた釋迦五十年の獅子吼も、特別のもの……吾々一人の爲めではなかつたらうか。

　止利佛師が法隆寺の壁畫を描いて佛教を石化したやうな愚行でもけれぼ「五月雨の降り殘してや光る堂」なごこ、芭蕉が剝げちよろけた荒堂を新しく光らしたやうな遊びごこでもない。凡愚なる劣機たるに心づいた時、佛々相念の至聖處に到達する、卽ちそれが「彼の國」への往生ではなからうか。久遠劫の昔から、彌陀に抱き占められてゐるここに心づいて、法淚に咽ばしめられるからである。彼の國へ急ぐことのみが、猛烈なる精進であり、諸緣を放棄して專心に己事を究明するこごなのだと、「大經」は吾等を勵ましてゐるc苟も神秘不可思議なる實在の力を、人間向上の力たらしむる妙行を說ける此の經に傾倒する魂は諸佛の所に引上げられる。他の魂をも引入れるからだ。此の自性淸淨の閃くこころ其處に、亡き母、亡き父の聲がする。そしてその聲は次第に擴がつて、一切の父母をかねた大いなる父母の光顏……卽ち彌陀の慈顏となつて、未だ曾て睹見せざる釋迦の殊妙相に驚嘆した往昔の阿難は、直ちに自己自身であるこごが會得される筈である。

純他力と半他力

所が、同じ他力に立つてゐる淨土教の中でも、淨土宗は他力的自力の傾向を帶び、純他力は眞宗の唱へるこゝろであるが、一部の淨土宗徒にいはせるこ「若し眞宗のやうに何事も佛のはからひであるこ見るならば、一種の宿命論ではないか。そのやうに何事も宿命的に解決するならば、何等人間の自由意志を認めないこゝになる。人間の自由意志が開展しない社會は墮落である。社會の墮落、人心の腐敗を肯定し、地獄の出現をも佛のはからひであるとするならば恰も彼のキリストが全智全能であるこいふ神が、此の不完全なる人類及び社會をなぜ創造したかこいつたやうな、妙な現象を繰り返すこゝになる。さうしたキリスト教の弱點を、佛教の中でも、その教理の完全を誇つてゐる眞宗に於て、繰り返すのはごうしたこゝなのか。吾々が生存するこいふこゝは、より自由なる、より完全なる國家社會を建設するこゝろにある。卽ち完全無缺である極樂を現在若しくは未來に於て建設するにある。また淨土教の根本思想も、これ以外にはない筈だ。より高き社會の向上發展、自己の自由意志を認めて向上するこゝろに、淨土教の淨土教たる眞價があるのであるから、地獄、そのものを彌陀の計ひこして、それに肯從し感謝しなければならぬこいふ眞宗は、自棄自滅の信仰隨地獄教であるこいはなければならぬ。吾々が淨土教の中でも、法然の所謂半他力、半自力でなければならぬこ叫ぶ理由はこゝにあるのだ」こ叫つてゐる。社會の多くもさう思つてゐるらしい。

しかし、それは覺如の建てた彌陀堂こ名づくる閻魔堂……本願こ稱ふる末願、眞宗こ銘打つた肉妻御免の眞言宗徒卽ち紫宸殿造りの殿堂、金ピカの彫刻曼陀羅、五彩七色の金襴衣、貴族的な音樂等によつて、愚夫愚婦を迷はし、信心爲本を笠に着て、稱名をうちすて、易行の名にかくれて、難信の法なるこゝを安賣する連中、凡夫から拜まれなければならない筈の身でありながら、凡夫の前に拜跪合掌する連中の頭上に下す鐵槌ならば知らぬ事、眞にさうした考へを有つてゐるならば、餘りごしても亦餘りに、法然を解し得なさ過ぎるではないか。ごうして淨土教が解し得られやう。眞の他力とは自力を抹殺する絕對的のものであつて、自他一心のまごゝろである。半他力半自力こはその外形に他ならない。要するに、純他力は自他を超じた人間希求の至高處卽ち彼岸であつて、神こいふのも此の心の姿に外ならない。

人間の理想は裡に神を潛ませる。往生の大願は、大威神力であらねばならぬ。他力に依らね

ば救はれないと信ずる心は、恐ろしい自力ではないか。而も此の自力は、自己の生み出したものではなく、未然の光明、未發の中、即ち生命そのもの、閃きだ。取りも直さず彌陀本願ではないか。大いなる自力でなくて何であらう。見よ！　法然は所謂自力聖道の徒を群賊惡獸と叫んだ。もろこし我が朝に、もろ〳〵の智者達の沙汰し申さる、觀念の念にもあらぬ正信中の正信者、一文不知の尼入道に學んだ絶對無私の念佛者ではなかつたか。一心不亂の念佛の形式を見ると、自力のやうに思はれるが、その實、信心歡喜の顯現れで、純然たる他力の相ではなかつたらうか。

信仰こは他力の別名である。他力の他に信仰はあり得ない。利他の外に自利はなく、自信の外にごうして教人信があり得よう。たゞ聖道跋扈の極に出た法然は、自力修業の弊害に怖いて淨土門の一行を示し、往生も念佛も、たゞ此の名號の効果に他ならぬこ叫び、親鸞時代は淨土教の混亂時代であつたから、眞實の信心を顯揚したまでゞある。即ち前者は聖淨對立の見地に立ち、後者は眞假分判の見地に立つたまでだ。彼れの念佛は信心の相、此れの信心は念佛の心であつて、時代によつて一は、行を顯にし、他は信を顯にしたのに他ならない。

自他本願

淨土であるべき此の地上を地獄に化する吾々は、またそれを殺さうこする吾々ではないか。それが卽ち他力念佛なのだ。地獄こ淨土に擊がつた人間ではないか。地獄の業苦が淨土を欣求せしむる筈だ。無人の沙漠に生まれ出て、惡獸毒蛇に追ひ捲くられつゝ闇黑を逃げ廻り、恐怖こ苦痛に襲れ果てた人間に、地上の星こ薰る此の麗はしい花を見せしめ、天上の花こ閃く彼の淨らかな星を仰がしめたら怎うだらう？　歡喜の餘り覺えず五體を地に投げて泣きはしなからうか地獄で作られた魂に淨土の身體を被らされた我々が其の懷中に・地獄を亡ぼす佛を見出したら、恰度さうした感激に擊たれはしなからうか。それが彌陀の本願なのだ。淨土の土を以て地獄をつくる惑業も、人間の本能に相違ないが、惑業淨化の作用も亦爾うではないか。此の本能こ本能の爭鬪が、彌陀本願を生み出したのだ。而してその生起本末を審細に述べたのが「大經」なのだ。大海を漕ぎ出して海底に沈んだ一つの珠玉を拾ひ上ぐるに勝つた難業を、一彈指の間に成就せしむる一佛直授の秘密である。何處に觸れても一切の人類に電波を及ぼす熱の貫流した、大經中の報身に心惹かれる時、小さき自己の執着は消え失せる。自己否定の極に陷るから

だ。是れ卽ち「洗滌心垢一直ちにこれ一宿善の開發」ではないか。何うして歡喜湧躍せずに居られよう。此の超世の大願を成就して、超日月光佛と命はれ、不可思議光と仰がれてゐる不可見、不可說の彌陀佛は、恐怖の底から現はれる。怎うして言句に證されようぞ。信の一念に經論章疏を葬つた親鸞は「大經」の體得者こいはねばならぬ。彌陀新に生まれ出で正法を說くからだ。淨土再建の偉業をなし遂げ得たからである。二百一十億の佛土の中から淨土を選び諸行の中から名號を選んで、刻々臨終の正念に住した法然の再誕にあらずして何ぞやである。彼は「本願名號正定業」と喝破し「重誓名聲聞十方」と叫んでゐるが念々懺悔に一貫されてゐる。

阿彌陀如來の四十八願

それに三惡火坑臨々欲入の泥凡夫を一人漏らさず濟はんがための救助小舍、卽ち彌陀淨土の梁柱こもいふべき彌陀の因願なるものは、康僧鎧譯には四十八願になつてゐる。餘佛に見られぬ多願であるに徵ても、如何に彌陀淨土が他の佛土に比して大なるかゞ窺はれる。所が、五存の漢譯中には三十四願のものもあれば、四十六願のもある。大阿彌陀經や平等覺經のやうな古い經には、二十四願になつてゐる。七缺中にはいろ〳〵異つた願數が見られたから

も知れない。現存の梵本には四十六願こなつてゐるらしい。

因願にはいろ〳〵議論もあるが、何か知ら支那の「易」が聯想される。「易を作れる者それ盜を知れるか」こ孔子は曰つた。彌陀本願を信ずるものは惡人であらねばならぬ。卽ち是れ「易」を弄ぶものそれ憂患あらん」ではないか。「易」は儒敎の源典であるが、老、佛こ合して禪を生んだ。支那の禪家の多くは易、佛一體の見地に立つてきであらねばならぬ。極重惡人の悸るる。中には洞山や藕益の如き易學者もあるが、支那淨土敎の開祖惠遠も易道の大家であつた。もこ〳〵「易」は支那人が風水害を恐るゝ餘り、自然現象を人心の上に觀て、天意の暗示を讀み、自反內省して安心の彼岸に到達するには無くてはならぬ、人生の大洋に漂蕩せる一虛舟たる人間の舵であるが、又、現在に於て未來を推測するの羅針盤である。筏に乘つて廣きここ海の如しこいはれたヒンズー河を渡らなければならなかつた古代印度人が、無事に渡り了せた歡びは實に非常なものであつた。彌陀信仰は地上の此の到彼岸を天上未來に移したものだ。澎湃こして襲ひ來る時代轉變の波濤こ、洪水に惱まされる支那人が、水を坎卽ち艱として、大川を涉るに利しこ叫ぶ「易」を生んだのこ等しい。釋迦の四諦、十二因緣、八聖道は、伏犧の四象八卦こ重卦の表裏十二爻に該當るのも不思議でない。伏犧は支那に於ける釋迦であり、釋迦は印